

しも
下
いん
印
いん
印

おお
大
じ
路
じ
路

たに
谷
古
古
台

古
墳
墳
墳
台

墳
群
群
群
状

群
C
墓

平成4年2月

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本書は神戸市西区平野町印路・中村に所在する下大谷古墳群・印路台状墓・印路古墳群の発掘調査報告書である。
2. 本調査は近畿農政局東播用水農業水利事業所が開発する国営農地開発事業（平野団地印路・中村工区）に伴う調査である。
3. 本調査は兵庫県教育委員会が近畿農政局からの依頼を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
4. 調査期間は以下の通りである。

確認調査	1989年度
第1・2次調査	1990年度
第3次調査・遺物整理	1991年度
5. 本書で使用した方位は座標北を示す。また、図中の高さは標高を表す。
6. 本書では遺物番号を種類ごとに付け、本文・実測図・写真に共通して用いた。
7. 本書の執筆分担は以下の通りである。

久保弘幸	第1章第1節
篠宮 正	第1章第2～5節、第2～4・8・9章
鐵 英記	第5章
多賀茂治	第6章
8. 赤色顔料の分析は武庫川女子大学安田博幸・森眞由美氏、歯の鑑定は樫原考古学研究所研究嘱託宮川 渉氏に依頼し、原稿をいただき、第7章に掲載した。
下大谷古墳出土の勾玉の材質分析は奈良国立文化財研究所村上 隆氏に御世話になり、コメントをいただいた。
9. 本書の編集は篠宮が担当した。
10. 現地調査および報告書作成において、喜谷美宣・口野博史・千種 浩・高島知恵子の各氏に御世話になった。
11. 発掘調査で出土した遺物、作成した図面・写真類は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて保管・管理している。

目 次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	遺跡名の整理	2
第3節	発掘調査の経過	4
第4節	整理作業の経過	5
第5節	調査の組織	6
第2章	遺跡の環境	7
第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境	7
第3章	下大谷古墳群の調査	11
第1節	古墳の位置と立地	11
第2節	墳丘の構造	11
第3節	埋葬施設	12
第4節	出土遺物	13
第5節	小結	17
第4章	印路台状墓の調査	19
第1節	台状墓の位置と立地	19
第2節	墳丘の構造	19
第3節	埋葬施設	19
第4節	出土遺物	20
第5節	小結	21
第5章	印路古墳群C第1号墳の調査	22
第1節	古墳の位置と立地	22
第2節	墳丘の構造	22
第3節	出土遺物	22
第4節	小結	24
第6章	印路古墳群C第2・3号墳の調査	25
第1節	古墳の位置と立地	25
第2節	墳丘の構造	25
第3節	埋葬施設	26
第4節	その他の施設	26
第5節	出土遺物	27
第6節	小結	27
第7章	自然科学的方法による調査	28
第1節	赤色顔料	28
第2節	下大谷古墳群第1号墳第3号埋葬施設出土歯牙について	31
第8章	考察	33
第9章	まとめ	39
別表		
図版		

下大谷古墳群

印路台状墓

印路C
|
1

印路C
|
2・3

図 版

- 図版 1 遺跡 遺跡分布図 (国土地理院1/50,000『須磨』『高砂』『明石』『神戸』を使用)
- 図版 2 遺跡 調査の位置 (神戸市1/10,000『神出』を使用)
- 図版 3 遺跡 工事計画と調査地点
- 図版 4 遺跡 下大谷古墳群 位置図
- 図版 5 遺跡 下大谷古墳群 調査前地形測量図
- 図版 6 遺跡 下大谷古墳群 調査後地形測量図・墳丘断面図
- 図版 7 遺跡 下大谷古墳群 上 第1号墳第1号埋葬施設平面・断面図
下 第1号墳第1号埋葬施設鉄器出土状況
- 図版 8 遺跡 下大谷古墳群 上 第1号墳第2号埋葬施設平面・断面図
下 第1号墳第3・4号埋葬施設平面・断面図
- 図版 9 遺跡 下大谷古墳群 上 第1号埋葬施設玉出土状況
下 第4号埋葬施設玉出土状況
- 図版10 遺跡 印路台状墓・印路古墳群C 位置図
- 図版11 遺跡 印路台状墓 調査前地形測量図
- 図版12 遺跡 印路台状墓 調査後地形測量図・断面図
- 図版13 遺跡 印路台状墓 上 第1号埋葬施設平面・断面図
中 第2号埋葬施設平面・断面図
下 第3号埋葬施設平面・断面図
- 図版14 遺跡 印路古墳群C第1号墳 調査前地形測量図
- 図版15 遺跡 印路古墳群C第1号墳 調査後地形測量図・墳丘断面図
- 図版16 遺跡 印路古墳群C第2・3号墳 調査前地形測量図
- 図版17 遺跡 印路古墳群C第2・3号墳 調査後地形測量図・墳丘断面図
- 図版18 遺跡 印路古墳群C第2・3号墳 右 第2号墳埋葬施設平面・断面図
左 第2・3号墳間土坑平面・断面図
下 墳丘断面図平面・断面図
- 図版19 遺跡 印路古墳群C第3号墳 埋葬施設平面・断面図
- 図版20 遺物 下大谷古墳群 土器類
- 図版21 遺物 印路台状墓 土器類・砥石
印路古墳群C第1号墳 土器類
- 図版22 遺物 印路古墳群C第1号墳 土器類
- 図版23 遺物 下大谷古墳群 埴輪
- 図版24 遺物 下大谷古墳群 第1号墳第1・4号埋葬施設玉類
- 図版25 遺物 下大谷古墳群 第4号埋葬施設玉
- 図版26 遺物 下大谷古墳群 第3号埋葬施設小玉
- 図版27 遺物 下大谷古墳群 第4号埋葬施設小玉
- 図版28 遺物 下大谷古墳群 第1号墳第1・2号埋葬施設鉄製品
- 図版29 遺物 下大谷古墳群 第1号墳第3・4号埋葬施設鉄製品
印路C古墳群第2号・3号墳 鉄製品
- 図版30 遺跡 1 古墳群全景 (南東から)
2 下大谷古墳群全景 (北西から)
- 図版31 遺跡 1 印路台状墓・印路古墳群C全景 (北から)
2 印路台状墓・印路古墳群C全景 (北東から)
- 図版32 遺跡 1 下大谷古墳群 第1号墳上層全景 (北から)
2 下大谷古墳群 第2号墳全景 (南から)
- 図版33 遺跡 1 下大谷古墳群 遺物出土状況 (南東から)
2 下大谷古墳群 遺物出土状況 (東から)

- 図版34 遺跡 1 下大谷古墳群 第1号墳第1・2号埋葬施設(東から)
2 下大谷古墳群 第1号墳第1号埋葬施設(北から)
- 図版35 遺跡 1 下大谷古墳群 第1号墳第1号埋葬施設玉出土状況(東から)
2 下大谷古墳群 第1号墳第1号埋葬施設鉄器出土状況(東から)
- 図版36 遺跡 1 下大谷古墳群 第1号墳下層全景(北から)
2 下大谷古墳群 第1号墳第3・4号埋葬施設(北から)
- 図版37 遺跡 1 下大谷古墳群 第1号墳第3・4号埋葬施設(東から)
2 下大谷古墳群 第1号墳第4号埋葬施設玉出土状況(東から)
- 図版38 遺跡 1 印路台状墓 調査前(北西から)
2 印路台状墓 全景(北西から)
- 図版39 遺跡 1 印路台状墓 第1・2号埋葬施設(北西から)
2 印路台状墓 第1号埋葬施設(北西から)
- 図版40 遺跡 1 印路台状墓 第2号埋葬施設(北東から)
2 印路台状墓 第3号埋葬施設(南東から)
- 図版41 遺跡 1 印路台状墓 溝土層断面(南西から)
2 印路台状墓 南テラス土器出土状況(東から)
- 図版42 遺跡 1 印路古墳群C第1号墳 全景(北東から)
2 印路古墳群C第1号墳 全景(北西から)
- 図版43 遺跡 1 印路古墳群C第1号墳 周溝断面・遺物出土状況(南西から)
2 印路古墳群C第1号墳 遺物出土状況(西から)
- 図版44 遺跡 1 印路古墳群C第2・3号墳 調査前(北西から)
2 印路古墳群C第2・3号墳 墳丘(北西から)
- 図版45 遺跡 1 印路古墳群C第2・3号墳 墳丘(北西から)
2 印路古墳群C第2・3号墳 墳丘(南東から)
- 図版46 遺跡 1 印路古墳群C第2号墳埋葬施設(北西から)
2 印路古墳群C第2号・3号墳間 土坑(北東から)
- 図版47 遺跡 1 印路古墳群C第3号墳埋葬施設(南西から)
2 印路古墳群C第3号墳埋葬施設(南東から)
- 図版48 遺跡 1 印路古墳群C第3号墳埋葬施設断割り状況(西から)
2 印路古墳群C第3号墳鉄製品出土状況(南西から)
- 図版49 遺跡 1 印路古墳群C第2号・3号墳間 周溝断面(南西から)
2 印路古墳群C第3号墳 北周溝断面(南西から)
- 図版50 遺物 下大谷古墳群 土器類
- 図版51 遺物 1 下大谷古墳群 土器類
2 下大谷古墳群 埴輪
- 図版52 遺物 印路台状墓 土器類
- 図版53 遺物 印路古墳群C第1号墳 土器類
- 図版54 遺物 1 下大谷古墳群 第1号墳第1号埋葬施設玉類
2 下大谷古墳群 第1号墳第4号埋葬施設玉類
- 図版55 遺物 1 下大谷古墳群 第1号墳第3・4号埋葬施設玉類
2 下大谷古墳群 第1号墳第1・4号埋葬施設管玉(X線)
- 図版56 遺物 下大谷古墳群 第1号墳第1・3号埋葬施設鉄製品
- 図版57 遺物 下大谷古墳群 第1号墳第1～3号埋葬施設鉄製品
印路古墳群C第2・3号墳 鉄製品
- 図版58 遺物 1 下大谷古墳群 第1号墳鹿角装刀子
2 下大谷古墳群 第1号墳鹿角装刀子(X線)

別 表

別表 1	下大谷古墳群第 1 号墳第 1 号木棺管玉一覧表	44
別表 2	下大谷古墳群第 1 号墳第 4 号木棺管玉一覧表	44
別表 3	下大谷古墳群第 1 号墳第 1 号木棺丸玉一覧表	44
別表 4	下大谷古墳群第 1 号墳第 4 号木棺丸玉一覧表	45
別表 5	下大谷古墳群第 1 号墳第 3 号木棺腹部小玉一覧表	46
別表 6	下大谷古墳群第 1 号墳第 3 号木棺頭部小玉一覧表	47
別表 7	下大谷古墳群第 1 号墳第 4 号木棺頭部南側小玉一覧表	48
別表 8	下大谷古墳群第 1 号墳第 4 号木棺頭部北側小玉一覧表	49

挿 図

第 1 図	遺跡の位置	IV
第 2 図	第 1 号墳須恵器杯・蓋内面拓影	23
第 3 図	下大谷古墳群第 1 号墳埋葬位置の復原	34
第 4 図	下大谷古墳群首飾りの復原と埴輪にみる首飾り	36

表

第 1 表	印路古墳群ほか遺跡地図変遷	2
第 2 表	ジェフニカバジドによる呈色スポットのRf値と色調	29
第 3 表	ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調	29



第 1 図 遺跡の位置

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

今回実施された調査は、国営農地開発事業（平野団地 印路・中村工区）に伴うものである。この開発事業にあたって、近畿農政局東播用水農業水利事業所より委託を受けた兵庫県教育委員会では、平成元年度（1989年4月24日～4月26日）に、開発予定地内の埋蔵文化財分布調査をおこなった。

当該範囲は国有林を主体とし、一部に民地を含む丘陵地であり、分布調査実施時点においては、大部分が森林であった。その状況から、遺物・包含層の発見による遺跡の確認は困難と考えられたが、すでに丘陵上では古墳群の存在が知られていた。

このため分布調査は丘陵上を中心として、古墳状の隆起、および遺跡分布の可能性が高い丘陵上の平坦面を見出す努力を主としておこなった。その結果、開発予定地内から古墳状隆起13か所、平坦面3か所が確認された(図版3)。このほかの分布調査で確認された古墳状隆起および平坦面は開発予定範囲外とされたため、事後の調査は特に実施していない。

上記の16地点についての確認調査は、平成元年度に実施された。

いずれも丘陵上に立地しているため、樹木の伐開後にトレンチ調査を実施した。その結果、No.5～8、10～13、15、16地点と、B、E地点では、遺構・遺物ともに検出されず、残るNo.9、14地点で古墳が、D地点で弥生時代の台状墓がそれぞれ検出され、全面調査の必要な範囲とされた。なお、No.9地点については、確認調査の時点で古墳が2基存在することが確認されたため、便宜的に9-1、9-2地点と仮称して、全面調査を実施した。

さらにこの確認調査の間に、No.9地点とD地点の間の丘陵頂上部に、古墳状隆起が存在することが知られたため、これを9-D間地点と仮称して、平成2年度に確認調査を実施した。その結果須恵器等の出土から、古墳であることが確認されたため、全面調査必要範囲に含めた。

全面調査は、平成2年度～3年度にわたって実施した。

平成2年度には、No.9・14地点およびD地点、3年度には9-D間地点についてそれぞれ調査をおこなった。

なお本報告書の編集にあたって、これまでやや錯綜していた本古墳群内の古墳の名称について整理をおこない、分布調査時の地点名を改めることとした。以下では、すべてこの改訂された古墳名を用いることとしたい。

第2節 遺跡名の整理

文化財保護法による遺跡地図が初めて刊行されたのは、昭和43年3月の事である。この時点では今回の開発地域の指定はなかった。

同年12月に県教育委員会が出した地図では、当該地域において印路群集墳9・12～18号墳という名称で8基が登録された。いずれも直径15～25m、高さ1.5～3mの円墳という概要である。昭和45年の都市計画地域内の地図では昭和43年12月のものを群として印路周辺を一括して囲っており、印路群集墳1号墳ほか24基で登録されている。その後昭和48年には神戸市教育委員会から、昭和57年には文化庁から地図が刊行されているが、当該地域内においては、登録番号こそ違うものの名称・基数とも昭和43年12月兵庫県教育委員会発行の地図と変わりはない。

平成元年、神戸市教育委員会が出した地図によると、従来印路群集墳としていたものをA～Dの4地区に分割し、印路古墳群A・B・C・Dという名称で登録した。このうち当該地域には印路古墳群Bの一部と印路古墳群Cが登録された。

第1表 平野印路古墳群ほか遺跡地図変遷

本 報 告	確認	分 布 調 査	市教委⑥	⑤④②名称	⑤	④	②	文化財保護委①
下大谷古墳群第1号墳	○	14	無	無				
下大谷古墳群第2号墳								
	×	12・13・15・16・E						
	保存	C						
印 路 台 状 墓	○	D	122 印 路 古 墳 群 C	印路群集墳14号墳	978	155	76	無
印路古墳群C第1号墳	○	9-D		15	979	156	77	
印路古墳群C第2号墳	○	9		17	981	158	79	
印路古墳群C第3号墳	○			18	982	159	80	
	×	11		12	976	153	74	
	×	10		13	977	154	75	
	×	9東		16	980	157	78	
	×	8・7						
	×	5・6		無				
	保存	B						
	保存	4	121印路古墳群	印路群集墳9号墳	973	150	71	
		3・2・	B					

平成元年、当該地域における農地開発事業の計画に伴い、従来の分布成果をもとに改めて分布調査を実施した。この結果、予定地内において従来から確認されている8地点を含めて22地点を確認した。この分布調査の結果に基づいて協議した結果、5地点を保存対象地とし、残りを開発することになった。開発対象となる16地点について、全面調査に入る前に遺跡の有無、遺跡の概要を調べるために確認調査を実施した。この結果14・D・9-D・9の4地点に5基の古墳ないし、墳墓が存在することが判明した。この確認調査の結果に基づき全面調査を実施した。この結果14地点で2基の古墳が存在する事が確認され、結局4地点で5基の古墳と1基の方形台状墓が存在する事が判明し、調査を行った。

今回印路での調査を報告するにあたって、従来から古墳として登録されていたものでも確認調査によって古墳でなかったものや、今まで登録されていなかった地点でも新たに古墳が発見されたものもあるため、名称を整理する必要性が生じてきた。そこで神戸市教育委員会発行の最新の遺跡名を生かし、調査を実施したものについて新規の名称を与えることにした。D地点は印路古墳群Cの範疇で従来14号墳とされてきたが、調査により弥生時代の方形台状墓であることが判明したため、印路台状墓と名称を変更した。9-D・9地点は印路古墳群Cの範疇で従来印路群集墳15・17・18号墳とされてきたが、印路古墳群C-1・C-2・C-3号墳と名称を変更した。また14地点は全くの新規発見の古墳であり、印路古墳群と立地が異なるため、地名をとり新たに下大谷古墳群と命名した。2基存在するので当初発見した高所にあるものを第1号墳、調査途中で発見した第1号の東側に位置するものを第2号墳とした。

〔参考文献〕

- 1.文化財保護委員会『全国遺跡地図（兵庫県）史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図』1968年
- 2.兵庫県教育委員会『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表 第2集』1968年
- 3.兵庫県教育委員会『兵庫県都市計画地域内埋蔵文化財分布地図及び地名表』1970年
- 4.神戸市教育委員会『神戸市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表<垂水区・兵庫区 第1集>』1973年
- 5.文化庁『全国遺跡地図 兵庫県』1982年
- 6.神戸市教育委員会『神戸市文化財分布図（西区）』1989年

第3節 発掘調査の経過

1. 確認調査

確認調査は平成2年2月26日～平成2年3月30日にかけて実施した。

事業対象地における分布調査によって確認された遺跡のうち、設計変更の対象とならなかった地点において、遺跡の有無および性格や範囲、土量を確認するために確認調査を実施した。実施した地点は総計14箇所第5～8・10～16・D・Eの12地点は農政局側の費用で実施し、第9・Bの2地点は文化財側の補助金で実施した。

調査は幅2ないし1mのトレンチを地形に応じて設定し、掘削を行った。

この結果第14地点で古墳1基(下大谷古墳群第1号墳)を確認し、D地点で弥生時代の墓(印路台状墓)を確認した。さらに第9地点においては古墳2基(印路古墳群C第2・3号墳)を確認した。

2. 第1次調査

第1次調査は平成2年6月4日～平成2年6月28日にかけて実施した。

前回確認調査で確認された遺跡のうち文化財側の補助金で実施する第14地点(下大谷古墳群)の全面調査を実施した。

調査はまず発掘範囲よりやや広めに伐木を行い、調査前の写真撮影・地形測量を行った後、除根・表土掘削を全て人力により行った。当初、古墳1基であると考えられていたが、東側の緩斜面でもう1基確認できたため、拡張して調査を実施した。表土・覆土・流出土を掘削した後は写真撮影、地形測量を行った。その後盛土をはずし、埋葬施設の検出を行った。その後棺内の掘削を行い、写真・図面等の記録を採った。この段階で第9・D地点(印路古墳群C・印路台状墓)と一緒に空中写真の撮影を行うため一時作業を中断して、保護し、第2次調査を行った。

3. 第2次調査

第2次調査は平成2年9月19日～平成2年11月30日にかけて実施した。

農政局側の費用で実施するD地点(印路台状墓)・第9地点(印路古墳群C第2・3号墳)の全面調査と第9-D地点間の確認調査、第9地点東側の確認調査、第14地点(下大谷古墳群)周囲の確認調査を実施した。さらに第1次調査の下大谷古墳下層の調査も実施した。

調査はまず発掘範囲よりやや広めに伐木を行い、調査前の写真撮影・地形測量を行った後、除根・表土掘削を全て人力により行った。表土・覆土・流出土を掘削した後は写真撮影、地形測量を行った。その後盛土をはずし、埋葬施設の検出を行った。その後棺内の掘削を行い、写真・図面等の記録を採った。合わせてD地点(印路台状墓)・第9地点(印路古墳群C第2・3号墳)と第14地点(下大谷古墳群)の空中写真の撮影を行った。最後に盛土を一部、旧表土ま

で下げ、あるいは断割りを行い記録を採り、築造工程と旧地形が復原できる様にした。なお第14地点（下大谷古墳群第1号墳）の下層から2基の埋葬施設（第3・4号）を検出したため、棺内の掘削を行い、写真・図面等の記録を採った。

第9地点東側の確認調査は伐採により古墳状隆起が確認されたため、トレンチにより確認調査を実施したが、自然地形と判明した。

第9-D地点間の確認調査では新たに円墳（印路古墳群C第1号墳）を確認した。

第14地点（下大谷古墳群）周囲の確認調査では新たな施設や古墳は確認できなかった。

4. 第3次調査

第3次調査は平成3年6月10日～平成3年7月13日にかけて実施した。

第9-D地点間（印路古墳群C第1号墳）の全面調査を実施した。農政局側と文化財側の費用負担の割合に応じて調査の面積を割り振った。

調査はまず発掘範囲よりやや広めに伐木を行い、調査前の写真撮影・地形測量を行った後、除根・表土掘削を全て人力により行った。表土・覆土・流出土を掘削した後は写真撮影、地形測量を行った。その後盛土をはずし、埋葬施設の検出を行ったが、流失して存在しなかった。最後に盛土を一部、旧表土まで下げ、あるいは断割りを行い記録を採り、築造工程と旧地形が復原できる様にした。

第4節 整理作業の経過

整理作業は平成3年度発掘調査の終了を待って、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において10月1日から実施した。

整理作業は、出土遺物の①水洗→②ネーミング→③接合・補強→④実測・拓本→⑤復原→⑥写真撮影の順に実施した。さらに、遺物実測図・遺構図と共に⑦トレース→⑧レイアウトを行い⑨原稿執筆→⑩印刷を経て報告書刊行となる。

なお下大谷古墳・印路古墳群Cにおいて出土した金属製品は劣化を防ぎ、元の形状を復原するため保存処理を行った。保存処理作業は①形状観察・写真撮影→②脱塩処理→③X線透過試験→④錆削除→⑤真空樹脂含浸→⑥乾燥→⑦欠損部分を補填→⑧密封乾燥保管の工程で行った。

合わせて下大谷古墳・印路古墳群Cから出土した赤色顔料については武庫川女子大学薬学部安田博幸・森真由美氏に分析を依頼し、下大谷古墳から出土した歯については榎原考古学研究所研究嘱託宮川彦氏に鑑定を依頼した。また、下大谷古墳から出土した勾玉は奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの村上隆氏に分析を依頼した。

第5節 調査の組織

事業は兵庫県教育委員会が主体となり、調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が主体となり実施した。

平成元年度

〔調査事務〕 所長 大江 剛 副所長 村上絃揚 副所長 才木 繁
調査第一課長 大村敬通 総務課長 小池英隆
主査 井守徳男 主任 長谷川真

〔調査担当〕(確認) 主査 小川良太 技術職員 村上泰樹・村上賢治・藤田 淳

平成2年度

〔調査事務〕 所長 内田隆義 副所長 村上絃揚 副所長 才木 繁
所長補佐兼調査第一課長 大村敬通 総務課長 小池英隆
主査 井守徳男 主任 長谷川真

〔調査担当〕(第1次) 技術職員 久保弘幸・篠宮 正

(第2次) 技術職員 久保弘幸・篠宮 正・多賀茂治

補助員 田中 勝・藤本城次・藤井太郎・芳倉るり子

平成3年度

〔調査事務〕 所長 内田隆義 副所長 駒井 功 副所長 才木 繁
所長補佐兼調査第一課長 大村敬通 総務課長 田中豊英
主任 長谷川 真

整理普及課長 松下 勝 課長補佐 小川良太

〔調査担当〕(第3次) 技術職員 久保弘幸・鐵 英記

〔整理担当〕 技術職員 篠宮 正

嘱託員 社領育代・古谷章子・井川佳子・杉本淳子

二階堂康・早川亜紀子・西野淳子

〔保存担当〕 主査 加古千恵子

嘱託員 尾崎比佐子

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

今回の事業用地は神戸市西区平野町に所在する。事業地は六甲山系西端に源を発する明石川中流域の右岸に立地する。明石川は中流域では南流し、厚く沖積層を堆積させ平野を形成している。明石から加古川にかけての播磨灘北東岸は、段丘面の発達著しい。事業地は最高位である明美Ⅱ面の南東面に位置し、明石川に面した場所に分布する明美Ⅰ面の一部に立地する。深い開析谷が発達し、丘陵状の尾根が形成されている。開析谷は事業地の東側部分では明石川に開け、西側部分は谷八木川に開けている。今回調査を実施した下大谷古墳群は谷八木水系に立地し、印路台状墓・印路古墳群Cは明石川と谷八木川の分水界にあたる尾根上に立地している。段丘を形成する堆積物は大阪層群の明石層と呼ばれ、砂礫層によって形成されており、風化により赤化が進んでいる。

事業地の現況は山林であり、植生はアカマツ・モチツツジを中心に、コナラ・タケ林が分布している。

古墳・台状墓からの眺望は非常に良く、北に明石川上流域・雄岡山・雌岡山を望み、東に六甲山系・西神ニュータウンを望む。南に明石川下流域・淡路島を望み、西に播磨灘を望む。

第2節 歴史的環境

明石川流域・谷八木川流域は恵まれた立地条件のため、旧石器時代から近世にわたって多くの遺跡が分布する。ここでは調査を実施した下大谷古墳・印路台状墓・印路古墳群Cが立地し、該当する時期である弥生時代中期後半と古墳時代の明石川中・下流域・谷八木川流域の遺跡について、主にみていくことにする（図版1）。

1. 弥生時代

弥生時代中期の集落は新方・今津・玉津田中・居住小山・西神ニュータウン第50号・西神ニュータウン第38号・養田中の池・鍋谷池・西神ニュータウン第65号・西神ニュータウン第62号・青谷などの各遺跡で調査が実施されている。新方・今津・玉津田中・居住小山は中期中頃までの集落であり、いずれも明石川中・下流域左岸の沖積地もしくは台地上に位置している。中期後半の遺跡はいずれも丘陵上に立地している。西神ニュータウン第50号・西神ニュータウン第38号・養田中の池の各遺跡は明石川中流域左岸に、鍋谷池遺跡は明石川中流域右岸に、西神ニュータウン第65号・西神ニュータウン第62号の各遺跡は榎谷川右岸に、青谷遺跡は榎谷川と永井谷川に挟まれた場所に位置している。

22. 西神ニュータウン第50号遺跡では竪穴住居跡20棟が調査されている。26. 西神ニュータウン第38号遺跡では竪穴住居跡3棟が調査されている。30. 養田中の池遺跡では竪穴住居跡10棟が調査されている。32. 鍋谷池遺跡では竪穴住居跡が調査されている。12. 西神ニュータウン第65号遺跡では竪穴住居跡6棟と通路状遺構などが検出されている。11. 西神ニュータウン第62号遺跡では竪穴住居跡1棟が調査されている。10. 青谷遺跡では石戈や磨製石剣や鏡などが採集されている。

弥生時代中期の墓は新方・今津・出合・玉津田中・西神ニュータウン第47号・西神ニュータウン第40号・西神ニュータウン第42号・鍋谷池・西神ニュータウン第65号などの各遺跡で調査が実施されている。新方・今津・出合・玉津田中の各遺跡はいずれも中期中頃までの方形周溝墓や木棺墓などが調査されている。中期後半の墓はいずれも丘陵上に立地している。西神ニュータウン第47号・西神ニュータウン第40号・西神ニュータウン第42号の各遺跡は明石川中流域左岸に、鍋谷池遺跡は明石川中流域右岸に、西神ニュータウン第65号遺跡は榎谷川右岸に位置している。

23. 西神ニュータウン第47号遺跡は墓塚群で11基が調査されている。25. 西神ニュータウン第40号遺跡は丘陵先端に築かれた方形台状墓が2基調査されている。1号墓は一辺約9m、2号墓は一辺約6mの規模をもち、両墳墓とも3基の箱形木棺が検出されている。24. 西神ニュータウン第42号遺跡は尾根頂部からやや下った所から木棺墓2基、土墳墓1基、土器棺を検出している。32. 鍋谷池遺跡は土器棺墓が調査されている。12. 西神ニュータウン第65号遺跡では土器棺1基が調査されている。

以上の様に明石川流域では、集落・墓地は弥生時代中期中頃までは低地に形成されていたものが、弥生時代中期後半になると丘陵上に形成されている。その後、後期になるとまた低地にも集落が形成されている。

2. 古墳時代

古墳時代の集落は吉田南・新方・高津橋岡・出合・玉津田中・黒田・印路・西神ニュータウン第62号の各遺跡で調査が実施されている。吉田南・出合の各遺跡は明石川下流域右岸に、新方・高津橋岡の各遺跡は明石川下流域左岸に、黒田・印路の各遺跡は明石川中流域右岸に、西神ニュータウン第62号遺跡は榎谷川右岸に位置している。

3. 吉田南遺跡は前期から後期にかけての集落で方形の竪穴住居跡72棟を検出している。4. 新方遺跡では中期末の竪穴住居跡が調査されており、中には勾玉や管玉などの玉製品を制作した工房と考えられる建物も調査されている。6. 高津橋岡遺跡では後期の竪穴住居跡が8棟調査されている。15. 出合遺跡では中期から後期にかけての竪穴住居跡群が調査されている。17. 玉津田中遺跡では竪穴住居跡群や水田・水路が調査されている。31. 黒田遺跡では後期の竪穴住居跡2棟と土坑が調査されており、土坑からは鉄滓やふいご羽口が出土している。37. 印路

遺跡は今回調査地点の東側の沖積地に位置しており、中期の竪穴住居跡と前期から中期の溝が調査されている。**11. 西神ニュータウン第62号遺跡**は竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡5棟が調査されている。

古墳時代前期の古墳は天王山4・5号・瓢塚・堅田神社境内1号・養田中の池などの地点で調査が実施されている。天王山4・5号・瓢塚の各古墳は伊川右岸の丘陵上に、堅田神社境内1号・養田中の池の各古墳は明石川中流域左岸の丘陵上に位置している。

8. 天王山4・5号墳は一辺19mと20mの方墳で、いずれも割竹形木棺を埋葬施設にもつ古墳である。**7. 瓢塚古墳**は全長57m、後円部径31mの前方後円墳である。**28. 堅田神社境内1号墳**は14×18mの方墳で、埋葬施設は2基の割竹形木棺と箱形木棺1基である。**30. 養田中の池**の丘陵先端では1辺10mの方墳が築造されており、2基以上の割竹形木棺と土器棺を埋葬施設としている。

古墳時代中・後期の古墳は鬼神山・天王山・王塚・出合亀塚・居住小山・中村・印路古墳群A・B・D地点・西神ニュータウン第55号・西神ニュータウン第41号・西神ニュータウン第30号・西神ニュータウン第32号・西神ニュータウン第33号・堅田神社境内3号・西神ニュータウン第11号・七曲り6号・カゲユ池などの各古墳で調査が実施されている。

鬼神山・天王山の各古墳は伊川右岸の丘陵上に、王塚・出合亀塚の各古墳は明石川下流域右岸に、居住小山・西神ニュータウン第55号・西神ニュータウン第41号・西神ニュータウン第30号・西神ニュータウン第32号・西神ニュータウン第33号・堅田神社境内3号・西神ニュータウン第11号の各古墳は明石川中流域左岸に、中村・印路古墳群A・B・D地点・七曲り6号の各古墳は明石川左岸にそれぞれ位置している。カゲユ池古墳は谷八木川下流域右岸に位置している。

9. 鬼神山古墳は直径14mの円墳で円筒埴輪が巡らされていた。**8. 天王山第6号墳**は一辺8mの方墳で箱形木棺を埋葬施設にもつ古墳である。**13. 王塚古墳**は全長93m、後円部径42mの前方後円墳で、水をたたえた周濠をもつ。**14. 出合亀塚古墳**は帆立貝式古墳1基、方墳1基、円墳1基が調査されている。墳丘は削平をうけているが、亀塚古墳は全長29m、後円部径21mの帆立貝式古墳である。**16. 居住小山遺跡**では後期前半の古墳5基が調査されている。2基は円墳、3基は方墳である。**18. 中村古墳群**は今回調査を実施した地点のすぐ南に位置している。第4・5号墳が調査され、第5号墳は全長17mの帆立貝式の古墳で埋葬施設を2基内蔵している。第1号墳からは帯金具・大刀・鉄鏃などが出土している。第2号墳からは鹿角装大刀・刀子・竪櫛などが出土している。第4号墳は14m前後の円墳で、第5号墳と共に円筒埴輪が出土している。**20. 印路古墳群A・B**、**19. 印路古墳群D**は今回調査地点の北・東に分布し、数基の円墳から構成されている。**24. 西神ニュータウン第41号遺跡**では直径12mの円墳を調査している。**27. 西神ニュータウン第30号遺跡**では直径16mの円墳が調査され、木槨に割竹形木棺を

埋納した埋葬施設である。27. 西神ニュータウン第32号遺跡では2基の古墳が調査されている。2号墳は直径10mの円墳である。27. 西神ニュータウン第33号遺跡は5基の円墳からなっている。28. 堅田神社境内3号墳は直径約17mの円墳で、埋葬施設は箱形木棺である。29. 西神ニュータウン11号遺跡では直径10mの円墳1基と木棺墓2基・土壙墓2基などが調査されている。33. 七曲り6号墳は直径10mの円墳で3基の埋葬施設をもつ。35. カゲユ池古墳群は6基の古墳からなり、木棺直葬の埋葬施設であったと考えられる。

古墳時代の須恵器窯は藤原橋・高丘がある。34. 藤原橋古窯跡は明石川中流域右岸に位置している。調査は行われていないが、6世紀後半の須恵器杯・甕などが採集されている。36. 高丘古窯跡群は谷八木川上流域に位置している。全部で20基確認されており、その内9基が調査されている。7世紀初頭に操業が開始され、8世紀まで操業を続けている。水系は異なるが谷八木川の1本西、赤根川下流域右岸には金ヶ崎窯跡があり、6世紀前半の須恵器を焼いている。

【参考文献】

- 明石市教育委員会「高丘第3号窯跡発掘調査報告」 1966年
- 是川 長「鬼神山古墳」神戸市文化財調査報告9 1967年
- 兵庫県教育委員会「明石市高丘地区埋蔵文化財調査略報」 1968年
- 兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会「中村古墳群発掘調査報告」 1969年
- 兵庫県教育委員会「高丘古窯址群調査概報II」 1970年
- 兵庫県教育委員会「新方遺跡」 1971年
- 神戸市教育委員会「西神ニュータウン内の遺跡中間報告I」 1972年
- 赤松啓介「神戸市垂水区青谷遺跡出土の石戈(一)」『考古学雑誌』59-3 1973年
- 金沢貢「堅田神社境内1・2号墳地形測量報告」『神戸古代史』1-2 1974年
- 河野通哉・中村善則「堅田神社支群第3号古墳」『日本考古学年報』27 1976年
- 中村善則・喜谷美宣「養田中の池遺跡」『日本考古学年報』28 1977年
- 神戸市教育委員会「新方遺跡発掘調査概要」 1977年・1984年
- 神戸市教育委員会「神戸市垂水区玉津町高津橋岡遺跡現地説明会資料」 1980年
- 神戸市教育委員会「天王山4号墳現地説明会資料」 1980年
- 神戸市教育委員会編「昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報」 1983年
- 兵庫県教育委員会「玉津田中遺跡調査概報I」 1984年
- 兵庫県教育委員会編「兵庫県埋蔵文化財調査年報-昭和57年度」 1985年
- 神戸市教育委員会編「昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報」 1985年
- 明石市教育委員会「明石市史資料(考古編)第4集」 1985年
- 兵庫県教育委員会編「兵庫県埋蔵文化財調査年報-昭和58年度」 1986年
- 神戸市教育委員会編「昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報」 1986年
- 鎌木義昌・亀田修一「播磨出合遺跡について」『兵庫県の歴史』22 1986年
- 兵庫県教育委員会編「兵庫県埋蔵文化財調査年報-昭和59年度」 1987年
- 神戸市教育委員会編「昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報」 1987年
- 兵庫県教育委員会編「兵庫県埋蔵文化財調査年報-昭和60年度」 1988年
- 神戸市教育委員会編「昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報」 1988年
- 『新修神戸市史歴史編1自然考古』 1989年
- 神戸市教育委員会編「昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報」 1989年
- 明石市教育委員会「赤根川・金ヶ崎窯跡-昭和63年度発掘調査概報-」 1990年

第3章 下大谷古墳群の調査

第1節 古墳の位置と立地

下大谷古墳群は谷八木川水系に位置する古墳群である。高位段丘からの開析谷によって形成された南方に延びる尾根先端の隆起している部分に立地し、最高所は標高82.58mを測る。本墳の西側は古墳築造後に生じた地滑りによって急な崖になっている。当初1基の古墳と見られていたが、調査中に東側の緩傾斜地より新たにもう1基見つかり、合計2基になった。高所のものを下大谷古墳群第1号墳、東側の新たに見つかったものを第2号墳と命名した。なお、尾根にそって古墳の北側と南側に確認トレンチを追加し本墳の施設及び、別の古墳の存在を検討したが、新たな知見は得られなかった。

第2節 墳丘の構造

下大谷古墳群第1号墳は直径12.0mの円墳である。西側は地滑りにより大きく削られている。墳丘の基底部は周溝を設けるのではなく地山を削り出したテラスにより墳丘を区画している。基底部は標高81.2mの等高線に沿っており、その周囲に幅3～4mの傾斜が緩やかな平坦面が巡っている。墳丘の高さは基底部から1.34mを測る。平坦面には墳丘からの流失土が40cm程度堆積し、土器・埴輪類のほとんどは、ここから出土している。

墳丘は土層の観察により構造が復原できる。盛土除去後の墳丘基底面上には炭化物及び灰が5～10cmの層を成して堆積していた。墳丘基底面上にある炭灰層には部分的に直径30cm前後の穴が確認できた。この炭灰層は墳丘周囲の地山を削り出した部分には存在しない。地山の削り出しは北側で高さ0.65m、東側で高さ0.48m、南側で高さ0.58m行っている。この炭灰層の上面には2層の盛土が確認できた。盛土には炭化物が若干混じっており、地山の削り出しによって排出された土を盛っている。下層は0.30m前後を測り、第3・4号の2基の埋葬施設を配置している。上層はかなり流失していると考えられるが、0.45m前後を測り、第3・4号の2基の埋葬施設の封土である。この上層の盛土の上面には第1・2号の2基の埋葬施設が配置されている。

第2号墳は第1号墳の東側に位置し、直径7.0mの円墳である。墳丘基底部は周溝によって区画されており、第1号墳のテラスを切っている。周溝は高所部分にあたる第1号墳側で全体の3分の1程度巡っている。幅1～2mで、深さは20～30cmを測る。墳丘は盛土のほとんどが流出しており、埋葬施設は検出できなかった。

第1・2号墳とも葺石等の外部施設は認められない。わずかに墳丘南側のテラスで少量の円

筒植輪片が出土したが、据え置かれた状況で出土したものは存在せず、いずれも小片であることから詳細は不明である。

第3節 埋葬施設

下大谷古墳群第1号墳の墳丘上には4基の埋葬施設が見られる。2基（第1号・第2号）は墳丘中央部上層に所在する埋葬施設であり、2基（第3号・第4号）はこの下層に所在する埋葬施設である。下層の2基は一部が切り合う関係にある。墳丘の斜面、墳丘周囲のテラスには埋葬施設は検出されていない。なお墳丘の西側が大きく崩壊している。崩壊部分に埋葬施設が存在した可能性もあるが、残った埋葬施設から考えて、その可能性は低い。

第2号墳は盛土流失のため、埋葬施設の存在が確認できなかった。

次に各埋葬施設について記述していくことにする。

1. 第1号埋葬施設

墳丘上層の墳丘中心部より北にずれた位置に、東西に主軸を配して設けられた埋葬施設である。木棺を直葬する埋葬施設であり、主軸をN88°Wにとる。記述の便宜上東西軸とよび、方位を東・西と簡称することとする。墓壙は西側が崩壊しているため東西2.88m以上、幅は1.26mの長方形を呈している。この墓壙側縁は緩やかなノリをもつ。木棺は痕跡からみて箱形木棺であり、東西2.44m以上、幅0.78mの長方形を呈する。検出面から0.23mの深さを測り、棺底は標高82.33mを測る。棺内は粒度の細かい土で埋まっているため、容易に判別できた。棺内からベンガラが検出された。

第1号埋葬施設に関連する遺物としては、首飾り1連、鉄製品として大刀1振・鍔6本・刀子2口・錐1本・鉈1本・鑿1本がある。また埋土から須恵器片が出土している。

2. 第2号埋葬施設

第1号埋葬施設の南、墳丘中心部より南にずれた位置に、南北に主軸を配して設けられた埋葬施設である。木棺を直葬する埋葬施設と考えられるが、墓壙底の痕跡しか残存していない。主軸をN39°Eにとり、第1号埋葬施設より西側が南に振っている。墓壙は東西2.28m、幅は0.92mの長方形を呈している。深さは検出面から0.05mを測り、棺底は標高82.42mを測る。

第2号埋葬施設に関連する遺物としては鉄製の刀子1口がある。他に表土直下で検出した鉄製の刀子、鍔などがある。

3. 第3号埋葬施設

墳丘下層の墳丘中心より南にずれた位置に、東西に主軸を配して設けられた埋葬施設である。墓壙の一部は第4号の墓壙の一部を切っている。木棺を直葬する埋葬施設であり、主軸をN80°Wにとる。墓壙は西側が崩壊しているため東西3.36m以上、幅は1.30mの長方形を呈している。木棺は痕跡からみて割竹形木棺であり、東西2.90m以上、幅0.67m、深さは検出面から0.24m

を測り、棺底は標高81.94mを測る。棺内からベンガラが検出された。

第3号埋葬施設に関連する遺物としては、玉類、鉄製品として大刀1振・刀子2口・鏃5本がある。

4. 第4号埋葬施設

墳丘下層の第3号埋葬施設の北側、墳丘中心部より南にずれた位置に、東西に主軸を配し、第3号埋葬施設と並列して設けられた埋葬施設である。墓壙の一部は第3号の墓壙の一部に切られている。木棺を直葬する埋葬施設であり、主軸をN74°Eにとる。墓壙は西側が崩壊しているため東西3.80m以上、幅は1.47mの長方形を呈している。木棺は痕跡からみて箱形木棺であり、東西3.50m以上、幅0.88m、深さは検出面から0.22mを測り、棺底は標高81.98mを測る。棺底の小口に近い部分に幅16cm、深さ6cmの溝が確認された。蟻椁である可能性が高い。

第4号埋葬施設に関連する遺物としては、首飾り2連、その他の玉類、鉄製品として刀子2口がある。

第4節 出土遺物

遺物は主に墳丘周囲から出土した土器類・埴輪類と、各埋葬施設から出土した玉類・金属器がある。

1. 墳丘出土遺物

(1) 土器類

土器は須恵器坏身・坏蓋・高坏・高坏蓋・短頸壺・壺・甕と土師器壺・甕が存在する。ほとんど墳丘南側テラスの墳丘盛土の流失層から出土したもので、一部埋葬施設や盛土から出土したのも存在する。

須恵器坏身（1～4）口径が10.5～10.8cmのもの（1～3）と口径11.6cm（4）の2形態がある。前者はたちあがりわずかながら内傾しており、端部は内傾する明瞭な段を有する。底部は丸く受部は短く上外方にのびている。後者はたちあがり比較的短く内傾し、端部は丸く仕上げている。

須恵器坏蓋（5～12）3種類に分類できる。口径11.5cmで、高さ4.6cm前後のもの（5・6）と、口径13.6cm前後で、高さ5.0～5.4cm前後のもの（9・11・12）と、口径13.0cm前後で、高さ4.2cm前後のもの（7・8・10）とがある。前者・中者は口縁部に内傾する明瞭な段を有し、稜は短く丸い。前者は器高が口径に対して比較的高く、天井は丸い。中者は口径が大きく、後者はきわめて形骸化した稜が付され、口径に比して器高が低い。

須恵器高坏（15～17）いずれも短脚で基部より外傾し、端部は鋭く内彎しており、方形のすかしを3方向に持つ。口径は9.8～10.0cmで坏部の特徴は坏身（1～3）と同様である。

須恵器高坏蓋（13・14）口径11.3・11.4cmで特徴は坏蓋（5・6）の特徴と同様である。天井

部の中央に扁平なつまみを付しており、そのつまみの中央は大きく凹んでいる。

須恵器短頸壺 (18) 口径8.0cm、口縁部高さ1.6cmを測る。胴部最大径は12.2cmを測る。肩部はカキメ調整を施し、底部はヘラケズリを行っている。

須恵器壺 (19・20・21) 19は外反してのびる口頸部をもち口縁直下に凸帯が付く。20・21は外傾する口頸に、球形の体部が付く。20は体部最大径にカキメ調整を施す。

土師器甕 (22) 外反する口縁をもち、端部が僅かに肥厚する。卵形の体部が想定できる。

土師器壺 (23) 小型壺の底部である。僅かに平底ぎみの丸底を呈する。

(2) 埴輪

墳丘テラスから小片になって出土している。全て円筒埴輪で基底部の破片は2点(80・81)存在する。直径は27cm前後である。またタガの存在する破片は5点(74~76・78・79)存在する。タガの高さは0.7~0.9cmを測る。透孔のある破片は存在しない。外面調整は第1次調整としてタテハケを施し、第2次調整としてB種ヨコハケを施すもの(79)と、第2次調整を省略するもの(71~78)とに分類できる。

2. 第1号埋葬施設

第1号埋葬施設からは玉類と鉄器が出土している。

(1) 玉類

玉類は頸部と考えられる地点から首飾り1連が装着状態で出土した。構成は青銅製勾玉1・ガラス製丸玉14・碧玉製管玉14の合計29点で構成されている。先端に勾玉をつけ、あとは丸玉と管玉を交互に配している。出土状況から推定して紐の長さは45cm程度である。管玉の配置で注意をひくのは、全ての管玉が向かって右側に穿孔の大きい部分を規則的に配し、繫いでいる事である。

青銅製勾玉 (1) 全長2.0cm、中央部幅0.6cm、厚さ0.6cmを測り、断面形は円形である。紐孔は直径1.5mm前後で正円ではない。両端はブロンズ病が著しい。鋳造品の可能性が高い。

ガラス製丸玉 (11・12・14~23・25・26) 14個出土している。この内16・25・26は細片のため図示していない。いずれも両端の加工は行っていない。長さは19の6.3mmが最大で、15の3.0mmが最小で、平均5.15mmである。直径は20の7.5mmが最大で、15の5.2mmが最小で、平均6.37mmである。孔径は1.1~2.9mmで、円形や楕円形などかたちはまちまちである。重量は23の0.42gが最大で、15の0.12gが最小で平均0.32gである。色調は藍色系を呈する。

碧玉製管玉 (31~44) 14個出土している。長さは44の21.9mmが最大で、37の15.7mmが最小で、平均18.81mmである。直径は44の7.3mmが最大で、37・40の5.9mmが最小で、平均7.09mmである。穿孔は33・42を除いて片面穿孔であり、両面穿孔の物も一方に偏った両面穿孔である。重量は44の2.26gが最大で、37の0.97gが最小で、平均1.60gである。

(2) 鉄器

大刀1振・刀子2口・鑿1本・鉈1本・錐1本・鏃6本が出土している。

大刀(15)は柄の一部が欠損している。全長79.5cm、刀身長74.6cm、幅4.0cm、背幅0.8cm、関幅4.8cm、現存茎長4.9cmを測る。

刀子(13・14)はいずれも木柄である。13は全長9.6cm、刀身長6.3cm、刃中央部幅1.3cm、背幅0.3cm、関幅1.6cm、茎長3.3cm、茎尻幅0.4cmを測る。茎部には木質が残る。14は全長14.9cm、刀身長10.4cm、刃中央部幅2.2cm、背幅0.5cm、関幅2.3cm、茎長4.5cmを測る。茎部には木質が残る。

鑿(11)は全長17.1cm、刃部長7.5cm、幅1.1cm、厚さ0.6cmを測る。基部は直径2.0cmの円形の袋状を呈し、内側には木質が残る。袋部は厚さ0.25cmに叩き出して造られており、接合部は丁寧な造られている。

鉈(12)は全長16.7cmを測る。刃部は内反りし、鑿をもつ。長さ4.0cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。基部は平造りで、茎部長12.7cm、幅1.0cm、厚さ0.3cmを測り、木質が厚く付着しており、柄の幅は1.4cm、厚さ0.8cmを測る。

錐(10)は現存長9.7cmを測り、先端を欠いている。茎部長2.9cmを測り、木質が厚く付着している。

鏃(1～9)は刃部の形態が判るものが6本ある。長頸式の片刃箭であり、逆刺をもたない形態(1・2)と短頸式の柳葉形のもの(3・8)と無頸式で柳葉形のもの(4・9)とに分けられる。3・8はいずれも逆刺が外反している。4・9は逆刺が外反している。9は木製の茎の痕跡が存在している。5～7は頸部篋被の破片で、5は篋被関部が残り、台形である。

3. 第2号埋葬施設

第2号埋葬施設からは玉類の出土はなく、鉄器のみである。

(1) 鉄器

刀子1口他鉄器片が出土している。

刀子(21)は全長22.1cm、刀身長14.5cm、刃中央部幅2.0cm、背幅0.7cm、関幅2.3cmを測る。片関で、茎長7.6cmを測り、関部には縁金具が残存する。幅2.5cm、厚さ1.4cmの楕円形の柄が想定できる。

他に第2号埋葬施設検出時に、刀子刃部1片(19)・茎部1片(20)、鏃柄部1片(18)、不明鉄片2点(16・17)がある。

4. 第3号埋葬施設

第3号埋葬施設からは玉類と鉄器が出土している。

(1) 玉類

第3号埋葬施設からは大きく分けて2か所から玉が合計115個以上出土した。1か所は頸部周

辺であり、もう1か所は腰部周辺である。前者からはガラス製小玉64個が、後者からはガラス製小玉51個が出土している。

①頭部

ガラス小玉 (201~264)が64個出土している。長さは244の4.0mmが最大で、225の1.1mmが最小で、平均2.4mmである。直径は233の4.5mmが最大で、205の2.2mmが最小で、平均3.5mmである。孔径は0.7~1.8mmで、円形や楕円形などかたちはまちまちである。重量は252の0.061gが最大で、219の0.013gが最小で平均0.034gである。色調は水色系を呈する。

②腹部

ガラス小玉 (265~315)が51個出土している。長さは291の3.0mmが最大で、292・310の1.2mmが最小で、平均2.1mmである。直径は310の4.2mmが最大で、303の2.3mmが最小で、平均3.2mmである。孔径は0.8~2.0mmで、円形や楕円形などかたちはまちまちである。重量は304の0.039gが最大で、303の0.008gが最小で平均0.024gである。色調は水色系を呈する。

(2)鉄器

大刀1振・刀子2口・鎌5本が出土している。

大刀 (29) は鋒部分を欠損しているが、残存している数字を記す。全長98.6cm、刀身長82.5cm、幅3.9cm、背幅0.7cm、関幅4.1cm、茎長16.1cm、茎尻幅2.1cmを測る。撫角の片関で茎部は横方向の木質の付着が著しい。鋒に近い部分が若干内反りしている。

刀子 (27・28) はいずれも両関で、木柄の物(27)と鹿角装の物(28)とがある。27は全長10.7cm、刀身長6.2cm、刃中央部幅1.0cm、背幅0.2cm、関幅1.7cm、茎長4.5cm、茎尻幅0.7cmを測る。刃部は著しく研ぎ減りしており、木質は存在しない。関部には縁金具が遺存しており、木質が残ることから、幅1.7cm、厚さ1.18cmの楕円形の柄を想定できる。28は鋒を破損しており、現在長9.3cmを測る。刃長5.8cm以上、刃部中央幅1.0cm、背幅0.2cm、関幅1.6cmを測る。茎長は3.5cmを測る。

鎌 (22~26) はいずれも長頸式の片刃箭で、逆刺をもたない形態である。箆被関部は台形である。茎部には木質が残存し、桜の皮が残る。

4. 第4号埋葬施設

第4号埋葬施設からは玉類と鉄器が出土している。

(1)玉類

玉類は頸部と考えられる地点から首飾り2連が装着状態で出土し、さらにこの左右にガラス製小玉が出土した。首飾りは外側に碧玉製管玉で構成された1連(首飾りa)、内側に丸玉で構成された1連(首飾りb)がある。首飾りaは碧玉製管玉13個で構成されており、出土状況から推定して紐の長さは40cm程度である。管玉で注意をひくのは、第1号埋葬施設と同様に、全ての管玉が向かって左側に規則的に穿孔の大きい方向を配し、繫いでいることである。首飾り

bはメノウ製の丸玉1個とガラス製の丸玉49個で構成されている。ガラス小玉は出土位置から考えて耳玉であると考えられる。

①首飾り a

碧玉製管玉 (51~63) 13個出土している。長さは59の27.0mmが最大で、53の18.8mmが最小で、平均21.98mmである。直径は59の9.6mmが最大で、54の6.7mmが最小で、平均7.98mmである。穿孔は52・55以外は片面穿孔であり、両面穿孔の物も一方に偏った両面穿孔である。重量は59の4.66gが最大で、53の1.98gが最小で平均2.73gである。

②首飾り b

メノウ製丸玉 (123) 1個出土している。長さは6.5mm、直径7.6mmで重さ0.61gを測る。加工の際の研磨痕が残る。

ガラス製丸玉 (71~119・124※103欠番) 49個出土している。このうち細片および破損が著しい71、80、87、88、97、99、112、115は図示していない。いずれも両端の加工は行っていない。長さは76の8.1mmが最大で、92の3.8mmが最小で、平均6.61mmである。直径は102の10.7cmmが最大で、92の6.0mmが最小で、平均8.90mmである。孔径は1.0~5.0mmで、円形や楕円形などかたちはまちまちである。重量は98の1.02gが最大で、92の0.22gが最小で平均0.69gである。色調は藍色系を呈する。

③南耳玉

ガラス小玉 (401~470) 70個出土している。長さは411・444の4.0mmが最大で、467の1.5mmが最小で、平均2.6mmである。直径は459の5.0mmが最大で、440の2.6mmが最小で、平均3.6mmある。孔径は0.9~2.3mmで、円形や楕円形など形はまちまちである。重量は404の0.080gが最大で、467の0.013gが最小で平均0.038gである。色調は藍色系を呈する。

④北耳玉

ガラス小玉 (471~542) 72個出土している。長さは485・516・529の3.0mmが最大で、538の1.4mmが最小で、平均2.3mmである。直径は531の4.5mmが最大で、506・519の3.0mmが最小で、平均3.7mmである。孔径は0.9~1.9mmで、円形や楕円形など形はまちまちである。重量は487の0.054gが最大で、506の0.014gが最小で平均0.032gである。色調は藍色系を呈する。

(2) 鉄器

刀子が2口出土している。

刀子 (30.31) は、いずれも両関で鹿角装の刀子である。30は全長14.1cm、刃身長9.5cm、刃部中央の幅1.2cm、背幅0.3cm、関幅1.9cmを測る。木質は存在せず、かなり研ぎ減りしている。柄は先端が欠損しているため現存長4.6cm、幅1.9cm、厚さ1.7cmの楕円形を呈する。茎長3.9cm、厚さ0.4cmを測る。31は鋒が外反している。全長17.6cm、刃身長12.2cm、刃部中央の幅1.5cm、背幅0.4cm、関幅2.2cmを測る。木質は存在せず、動物質の痕跡を残す。革の鞘の痕跡か。柄は

先端を欠損しているため現存長5.4cm、直径1.8cmの円形を呈する。莖長5.0cm、厚さ0.4cmを測る。

第5節 小結

下大谷古墳群は2基の円墳から構成されている。第1号墳は直径12.0mの円墳で、1.34mの高さを残す。盛土は大きく上下2層にわかれ、それぞれ2基ずつ、合計4基の埋葬施設をもつ。第2号墳は直径7.0mの円墳で、埋葬施設は残存しない。

副葬品と配置は以下のとおりである。

第4号埋葬施設

首飾り 2連・耳玉 1対
南側 鹿角装刀子 2

第3号埋葬施設

頭部小玉64個・腹部小玉50個
南側 大刀 1・刀子 1
頭部 鹿角装刀子 1
北側 鏃 6

第1号埋葬施設

首飾り 1連
北側 大刀 1・鏃 4
東側小口 刀子 2・鏃 1・鉈1・錐 1・鏃 2

第2号埋葬施設

南側 刀子 2

1. 古墳の年代

古墳の年代は須恵器の特徴から陶器編年によるとTK47～TK10型式併行期まで存在し5世紀末から6世紀中頃までに位置づけられる。これは埋葬施設が複数存在する事とも合致する。また円筒埴輪の特徴も2次調整の横ハケを施すものと横ハケを省略するものも存在する事からも矛盾しない。ガラス玉は第1・4号の丸玉、第4号の小玉が藍色系で、第3号の小玉が一部黄色系も混じるがほとんど水色系であり時期的に矛盾しない。碧玉の管玉は一部両面穿孔を行っているが基本的に片面穿孔であり新しい要素を持っている。鉄器は武器類と工具類の組合せを主とし、刀は撫関でありこの時期に一般的である。鏃は第1・3号に長頸式の片刃箭で、逆刺をもたない形態のものがあり、筥被関部の造りも台形であり矛盾しない。

つまり5世紀末に第1号墳第4号埋葬施設が設けられた後、6世紀中頃まで他の第3・1・2号の埋葬施設や第2号墳が順次構築されたことになる。

第4章 印路台状墓の調査

第1節 位置と立地

前回の確認調査において古墳もしくは弥生時代の墓であると考えられたため全面調査を実施した地点である。明石川右岸の高位段丘から派生する尾根の先端に位置する。この尾根は痩せながら南方に続く。台状墓の南西方向は比較的緩斜面であり、南東・北東方向は急な斜面であり、一部地滑りにより地形が改変されている。台状墓の北西方向は尾根が続き、印路古墳群C第1・2・3号墳が位置する。

明石川が形成する沖積平野と台状墓は比高差60mを測り、眺望は素晴らしい。明石川対岸の丘陵上の遺跡をはじめ、流域に所在する遺跡の多くが見渡せる。

第2節 墳丘の構造

調査の結果、弥生時代の台状墓を検出した。台状墓は尾根の先端に位置し、尾根に直交する溝を掘削し、この溝の掘削土を利用して盛土している。溝は幅4.1m、長さ13.5m、最大深さ0.8mの規模をもつ。台状墓は尾根に沿って長い長方形で、長軸20.0m、短軸14.0mを測る。高さは1.6mを測る。墳頂部は東西16.6m、南北7.4mの平坦面を構成している。東・北側は崩壊により崩れているが墳丘の基底部は標高87.0mと考えられ、南側には比較的傾斜の緩やかな場所が幅2.0~3.0m前後存在し、テラスとなっている。

第3節 埋葬施設

印路台状墓の墳丘上には3基の埋葬施設が見られる。2基（第1号・2号）は墳丘最高所に所在する埋葬施設であり、1基（第3号）は北西よりに所在する埋葬施設である。いずれも主軸の方向が平行もしくは、直交している。

1. 第1号埋葬施設

第1号は、墳丘東端に主軸を墳丘及び尾根に直交させて設けられた埋葬施設である。木棺を直葬する埋葬施設であり、主軸をN26°Eにとる。墓壙は南北2.72m、幅は0.92mの長方形を呈している。深さは検出面から0.25mを測り、棺底は標高88.26mを測る。断面形及び棺底の形態から考えて割竹形の本棺と考えられる。

第1号埋葬施設に関連する遺物としては、埋土から弥生時代中期後半の壺が出土している。

2. 第2号埋葬施設

第1号から西側に0.9m離れた最高所に位置する。墳丘中央部より東にあたり、主軸を墳丘及

第4章 印路台状墓の調査

び尾根に並行させて設けられた埋葬施設である。木棺を直葬する埋葬施設であり、主軸をN60°Wにとる。記述の便宜上東西軸とよび、方位を東・西と簡称することにする。墓壙は東西1.92m、幅は0.8mの長方形を呈している。深さは検出面から0.20mを測り、棺底は標高88.30mを測る。断面形及び棺底の形態から考えて箱形木棺であると考えられる。

第2号埋葬施設に関連する遺物としては、埋土から弥生時代中期後半の甕の破片が出土している。

3. 第3号埋葬施設

第3号は第1・2号と離れ、西側の溝に近い場所に位置する。主軸を墳丘及び尾根に直交させて設けられた埋葬施設であり、主軸をN28°Eにとる。墓壙は南北1.98m、幅は0.94mの長方形を呈している。深さは検出面から0.26mを測り、棺底は標高88.06mを測る。断面形及び棺底の形態から考えて箱形木棺であると考えられる。

第3号埋葬施設に関連する遺物はない。

第4節 出土遺物

印路台状墓からの出土遺物は①埋葬施設から出土したもの、②南側テラスから出土したもの、③北側斜面および墳丘盛土から出土したもの、④南側斜面から出土した古墳時代の遺物に分けられる。

1. 埋葬施設出土の遺物

埋葬施設からは弥生土器のみ出土している。

第1号埋葬施設からは壺(35)が出土している。底部を欠いているがほぼ完形である。口径14.2cm、現在高20.4cm、胴部最大径20.8cmを測る。頸部は直立し、斜め上方へ外反する口縁部をもち、端部はやや下方に拡張する。口縁内面には櫛状工具による列点紋が見られる。頸部は3条の凹線紋を施している。胴部上半は縦方向の刷毛目調整を行った後、12本の櫛状工具により、凹線紋直下から胴部最大径にかけて直線紋・波状紋・直線紋・波状紋・直線紋・波状紋を施紋している。波状紋は上下の幅が少ない、細かな施紋である。胴部下半は一部刷毛目調整が見られるが、残りが悪く不明である。胴部内面上半は横方向の刷毛目調整を行っている。

第2号埋葬施設からは甕(31~33)が出土している。31・33は口縁部の破片で31は口径17.3cm、33は口径18.0cmを測る。31は口縁端部をつまみ上げている。

2. 南側テラス出土の遺物

南側テラスからは弥生土器壺(34)が出土している。頸部より上を欠いた壺であり、胴部最大径21.4cm、底径6.4cm、現在高20.3cmを測る。胴部上半には10本の櫛状工具により、胴部最大径にかけて直線紋・波状紋・直線紋・波状紋・直線紋・列点紋を施紋している。胴下半部は底部から縦方向に篋磨き調整を行った後、胴中位を横方向に篋磨きを行っている。

3. 南側斜面

南側斜面からは古墳時代の須恵器が出土している。須恵器は坏・坏蓋・提瓶・有蓋短頸壺・無蓋短頸壺・壺蓋・椀・甕が出土している。

坏(36～38)は口径14cm前後と大きい。口縁端部は丸く納めている。たちあがりが高い37とやや低い36・38に分けられる。

坏蓋(39～41) 39は口径13.9cm、高さ4.1cmを測る。天井部から口縁部にかけて丸くならかなカーブを描いている。口縁端部は丸く納めている。40・41は天井部から口縁にかけての稜はなく丸く仕上げている。口縁端部内面には内傾する段を有している。

有蓋短頸壺(44・45)は頸部が短く直立し、肩にやや張りを認める。44は口径6.7cm、最大径13.6cmを測り、丸底である。37は口径9.0cmを測る。

無蓋短頸壺(46)はやや開き気味の直立した口縁部に、球形の体部が付く。

壺蓋(43)は短頸壺(36)に伴うと考えられ、口縁端部は外反している。口径8.9cmを測る。

椀(42)は体部からやや内彎しながら直立する口縁部が付く。体部には櫛状工具による2段の列点紋を施紋している。

砥石(47)は破片である。4面ともよく使用しており、著しく研ぎ減りしている。

第5節 小結

今回の調査において、尾根の先端に位置する長方形の墓を検出した。尾根に直交する溝を掘り、盛土した長辺20.0m、短辺14.0m、高さ1.6mの規模をもつ。墳頂部には3基の木棺を直葬する埋葬施設を確認した。遺物は弥生時代中期後半の土器と古墳時代後期の須恵器が出土した。

遺物の出土状況は、埋葬施設からあたかも墓に供えた状況で弥生土器が出土しており、南側テラスで墓から転がり落ちた状況で弥生土器が出土している事からも弥生時代中期の方形台状墓である事は疑いないであろう。弥生土器の時期は第1号埋葬施設から出土している28の壺が頸部に凹線紋をもつことから中期でも後半(IV期)に位置づけられる。したがって印路台状墓の時期は弥生時代中期後半に位置づけられる。

須恵器は6世紀中頃から後半(TK10～TK43)に位置づけられる。一部の調査地点からのみしか出土していないことから、この時期に何らかの行動があったものと考えておきたい。

明石川流域において、弥生時代の集落及び墓地は、中期後半になると、以前までの低地とちがって、この地点のような丘陵上に立地するようになる。したがって、この地点でもその集落の可能性を検討したが住居跡をはじめ他の遺構の存在も確認されなかった。また高地性集落で多く見られる石器も確認されなかった。したがって、この地点は方形台状墓が単独で存在し、出土している弥生土器は墓に供えられた土器であると理解できる。

第5章 印路古墳群C第1号墳の調査

第1節 古墳の位置と立地

本墳は明石川中流右岸の印南野丘陵東端から南東へ延びる小尾根の最高所、標高92.2mに位置しており、眼下には明石川下流の平野部から淡路島にかけての眺望が開けている。同じ尾根の北西奥には印路古墳群C第2・3号墳、東側には印路台状墓が存在する。本墳の周囲は地滑りのため地形が著しく変化しており、古墳築造当時の景観を復元することは困難である。墳丘の北半分が、地滑りによって消失しているが、小尾根鞍部の比較的傾斜の緩やかな地点を利用して築造されている。

第2節 墳丘の構造

今回の調査では表土と流出した盛土を除去したのち、アゼを残して地山まで掘り下げ墳丘の構造を観察した。墳丘の規模は東西約12m、南北推定約14m、テラス状平坦面からの残存高約1.5mの楕円形を呈する円墳である。

墳丘の北西側はコンタ・ラインと直交して弧状に掘削され、断面がやや偏平な「U」字形を呈する堀切によって区画されている。堀切は最大幅約1.8m、最大深度約0.4mを測るが、南に向かうにつれて浅くなり、墳丘南東裾で消滅する。墳丘裾部は明白な立ち上がりを持ち、墳丘の南から東にかけては幅約5mのテラス状平坦面を形成する。

古墳の築造は以下の段階を経て行われている。旧表土面と考えられる黄褐色細砂上面に灰層が認められることから、最初に地表面を焼き払い、簡単な整地を行っている。次に墳丘周囲の地山整形によって堀切とテラス状平坦面を作りだし、その際生じた旧表土と地山の掘削土（明赤褐色シルト）を利用して旧表土上に盛土を行っている。現存する墳丘は地滑りと経年変化のため外形が著しく損なわれており、盛土層はもっとも厚い部分で約25cmが残存しているに過ぎない。そして、墳丘裾部の角度と流出した盛土の量からみて、盛土層の厚さは60cm以上あつともと考えられる。したがって、木棺直葬であったと思われる内部主体はすでに流失している。

第3節 出土遺物

1. 出土状況

1号墳から出土した遺物には須恵器、土師器がある。そのほとんどは墳丘南裾部および西側堀切内の流出盛土層から出土している。土師器は全て細片であるが、須恵器は完形品の坏身・坏蓋各1点と接合の結果ほぼ完形となる甕1点が堀切の埋土から出土している。また細片と化

しているものが墳丘裾部で検出された。出土状況から考えて、墳頂部周辺に並べられていたものが、墳丘の崩落に従って落下したものと考えられる。

2. 土器

須恵器には坏身・坏蓋・甕・壺、土師器には甕が認められる。土師器については細片であるため図示できなかった。以下、図示できたものについて器種ごとにその概要を記述する。

坏身 (51~53)

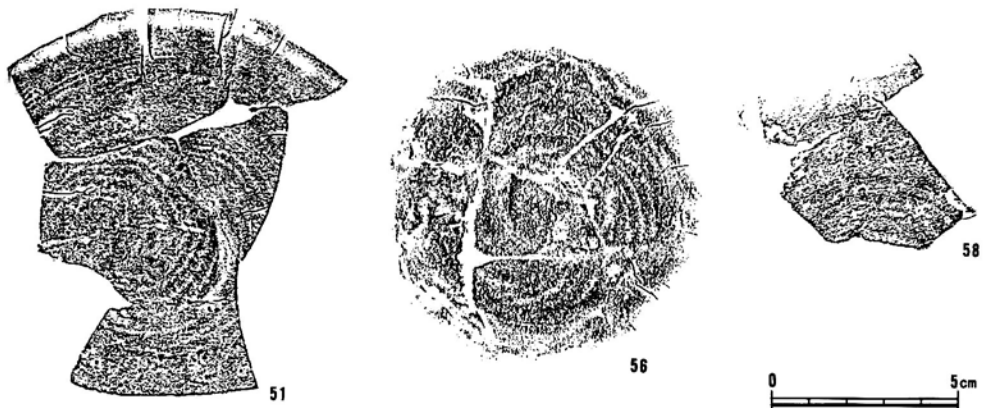
口径が9.4cmのもの(53)と10.2cm~10.6cmのもの(51・52)の2形態がある。たちあがりはやや内傾する。受け部はほぼ水平に延び、端部の稜は鈍い。口縁端部は内傾し、52・53では浅くくぼんでいる。51・52の底部は丸みを帯び、約2分の1にヘラケズリが認められるが、53はやや偏平な底部を持ち、ヘラケズリが施された範囲が若干少なくなる。いずれの底部内面にも同心円状を呈する当て具の痕跡が認められる。51は墳丘斜面、52・53は堀切内から出土している。

坏蓋 (54~58)

口径は11.5cm~12.7cmで、天井部が丸みを帯びるもの(54)とやや扁平なもの(55~58)の2形態がある。天井部と口縁部間の稜線は一般的に鈍いが、微かに外方に向かって突出するもの(57)も認められる。口縁部は内傾し、端部が僅かにくぼむ。天井部外面の約3分の2にヘラケズリが施され、56・58には内面に同心円状を呈する当て具の痕跡が認められる。54~56は墳丘斜面、57・58は堀切内から出土している。

壺 (59・60)

大きく外反し、明瞭な段をなして端部に続くもの(59)とやや直線的に斜め上方に延びる口頸部を持つもの(60)がある。成形はいずれも回転ナデによる。59は口径11.05cmで、口縁端部



第2図 第1号墳出土須恵器坏・蓋内面拓影

内面に浅いくぼみが認められる。頸部に波状文を施す。60は口径10.4cmで、口縁端部は丸みを帯び、球形の体部を持つ。口縁部と頸部の境界に2条の突帯をめぐらせ、突帯直下と体部の沈線で界された部分に波状文を施している。59は墳丘北崩落部、60は墳丘斜面から出土した。

甕 (61~64)

口径が14.1cm~15cmの中型のもの(61・62)と口径23.6cm~24.1cmのやや大型のもの(63・64)の2形態が出土した。いずれも口頸部が緩やかに外反し、僅かではあるが口縁部端面を上下に拡張し、端部は丸く納めている。ただ、63は口縁部上端にやや外傾する面を持つ。体部は丸みを持ち、あまり肩の張らない形態であると考えられる。ほぼ完形に復元できた64はやや長円形を呈する体部の上部3分の1に最大径を持ち、底部は丸みを帯びており、焼成時に置き台として利用したと思われる変形した坏身が融着している。口縁部の成形は回転ナデ技法で、体部の成形は平行たたき技法によって行われているが、62では内面の当て具痕をナデ消そうとしているのに対し、61・63・64では当て具の痕跡が明瞭に残る。62・64では口頸部外面にカキ目調整が施され、64ではさらに体部に平行カキ目による15単位の文様帯を持つ。62・63は墳丘斜面、61・64は堀切内から出土している。

第4節 小結

第1号墳は東西約12m、南北約14m、テラス状平坦面からの推定高約2mの楕円形を呈する円墳である。また、出土した須恵器は形態からみて、坏身・坏蓋がやや小型ではあるが、田辺編年のMT15型式にほぼ併行すると考えられる。ただし、部分的にTK47型式的な様相を若干残すものも含まれている。これらは焼成が充分でないために内面・断面が赤褐色を呈したり、かなり軟質のものが多く含まれる。そして、作りの比較的粗い個体が多くを占めることから、在地産である可能性も考えておくべきであろう。築造時期は、墳丘裾部・堀切から出土した須恵器の年代を上限として考えれば、5世紀末から6世紀前葉に位置づけられ、今回調査した印路古墳群Cの中ではいちばん新しい時期のものとなる。そして埋葬施設に関しては、古墳の残存状況が悪く、すでに流失しているものと考えますが、同時期の周辺地域の古墳のあり方と同様であると考えれば、木棺直葬であった可能性が高い。本墳の存在によって、この尾根が弥生時代以降継続的に墓域として使用されたことが明らかになった。問題点としては、いちばん最後に築造された本墳が尾根の最高所を占めていることが挙げられる。

第6章 印路古墳群C第2・3号墳の調査

第1節 古墳の位置と立地

印路古墳群C第2・3号墳は明石川中流右岸の丘陵上に位置する。この丘陵は印南野台地の東端にあたり、古墳は北東から南西に延びる尾根の最高部、標高90m付近に築かれている。

古墳が築かれている尾根は、鞍部の幅が10～20mのほどであり、北東と南西は古墳築造以後に生じた地滑りによって急な崖になっている。眺望は西と南に開けており、明石川流域平野を一望でき、晴天の日には遠く淡路の島影も望むことができる。

印路古墳群C第2号墳と3号墳は相接して築かれており、両古墳の間は地山を掘削した幅約3mの溝で区画されている。また第3号墳の北西側にも幅約3mの溝が掘削されており、これにより墳丘が区画されている。第2号墳の南東側および第2・3号墳の南西側はテラス状の平坦地になっているが、北東側は墳丘がそのまま斜面に続いており、明確な区画は認められない。

第2節 墳丘の構造

印路古墳群C第2号墳、第3号墳は、ともに方墳である。第2号墳は盛土が大部分流失しているため、正確な規模は計り難いが、一辺10mほどであったと推定できる。墳丘の高さは現存高で溝の底から1m、南東側のテラスからは0.9mある。墳丘は地山を削り出して基底部分を整形したのちに盛土を施したものと推定できる。墳頂部には黄橙色のシルトが堆積していたが、この土は墓壙埋土と同質の土であり、本来の盛土ではなく、盛土流失後に墓壙内から流れ出た土であると判断する。

第3号墳は東隅の盛土が流失している以外は、遺存状態が良好である。規模は南西辺で14m、北西辺で12mである。高さは南東側の溝の底から2.2m、北西側の溝から1.8m、南西側のテラスから1.8mである。これも墳丘は地山を削り出して方台状の基底部分を整形しており、そののちに盛土を施している。盛土の最下層は炭を含んでおり、整地に先立って山を焼き払ったと推定できる。盛土は20cmほどの厚さで積み上げているが、下層は旧土壌層を削って盛った土であり、上層は地山を削った土である。盛土の1単位は墳丘の外側から内側に向かって傾斜するように積まれており、方台状の基底部分の周縁部にまず土を盛り上げた後に、中央部にできた窪みの中を埋めるように土を盛ったと推定できる。また墓壙は盛土後に墳丘を掘り込んでおり、埋葬施設を構築し、棺を納めたのちに墓壙を埋め、更に盛土を施している。なお第2・3号墳とも葺石、埴輪等の外表施設は全く見られなかった。

第3節 埋葬施設

第2号墳、第3号墳ともに、墓壇底に構築された粘土床を埋葬施設とし、断面U字形の割竹形木棺の痕跡が残っていた。第2号墳は盛土が流失してしまっているため、墓壇の底の部分しか残っていなかったが、長軸を北東-南西にむけた長さ3.4m、幅1.4mの長楕円形の墓壇を墳丘に掘り込んでいる。粘土床はこの墓壇の長軸両脇に黄橙色のシルトを置いたのちに、黄橙色の粘土を置いて構築している。粘土は床面では厚さ5~10cm程であるが、棺の両小口部では厚さ30cm程に盛り上げられている。

この粘土床には割竹形木棺の痕跡が残り、長さ2.55m、幅北東側小口で0.5m、南西側小口で0.4mである。粘土床の床面が北東側の方に傾斜していることと、小口の幅を考えあわせると北東側が頭側であった可能性が高い。また、粘土床の上には、墓壇埋土と同質のシルト（棺内流入土）を挟んで粘土ブロックを多量に含む土が堆積しており、棺の側面及び上面も粘土で被覆していた可能性が考えられる。しかし、粘土郭と呼べるほどの構造をしていたかどうかは不明である。

第3号墳は長軸を第2号墳の埋葬施設から90度ふった方向、すなわち北西-南東にむけた長さ5.6m、幅2.0m、深さ1.0mの隅丸長方形の墓壇を墳丘に掘り込んでいる。粘土床は墓壇底を断面U字形に20cm掘り込んだ後に、黄橙色の粘土を置いて構築している。ただし、南東側の小口部のみは、橙色の極細砂を置いた上に粘土を置く。粘土の厚さは床面では5~10cmほどであるが、両小口では20~30cm、両側縁で10cmほどに盛り上げている。

この粘土床には割竹形木棺の痕跡が残るが、長さは4.6m、幅は北西側小口、南東側小口とも0.5mである。粘土床の床面は南東側にむかって傾斜しており、また粘土の盛り上げが南東側に顕著であることから、南東側が頭であった可能性が高い。なお、粘土床には赤色の顔料が塗布されていたが、分析の結果、ベンガラであることが判明している。

第4節 その他の施設

第2号墳、第3号墳の墳丘を区画する溝の底、両古墳の墳丘中軸ライン上に、長軸を北東に向けた隅丸長方形の土坑がある。大きさは長辺1.15m、短辺0.85m、深さ0.25mである。溝の埋土を観察した結果、この土坑は溝が埋没し始める以前に埋没しており、古墳築造とほとんど時間を隔てることなく掘られたものと考えられる。埋土の最下層には、炭・灰を含んだシルトが堆積しており、埋葬施設であったとは考えられない。また炭・灰を含むものの、焼土は認められず、この土坑の中で火を焚いたとも考えがたい。用途は不明であるが、古墳の墓前祭祀に関係する土坑であった可能性も考えられる。

第5節 出土遺物

第2号墳、第3号墳の埋葬施設からはそれぞれ鉄製工具が1点ずつ出土している。第2号墳の粘土床上、棺内にあたる位置の南東側、中央よりやや北西側で鉄製刀子(41)が出土している。鋒を北東に、刃を南東にむけた状態で出土した。鋒と柄の先が欠失しているが、現存長さ9.85cm、刃部の最大幅1.5cm、厚さ0.3cmである。両関のものであるが、背関の方が刃関よりも鋒に近い位置にあり、抉り込みが小さい。茎には木製の柄が遺存している。

第3号墳の棺外、棺と墓壙壁の隙間の南西側から鉄製鉞(51)が出土している。頭部を西側に向けた状態で出土した。頭部の先端が欠失しているが、法量は全長27.8cm、幅0.95cm、厚さ0.35cmである。頭部は先端から2cmほどの範囲に刃がつけられており、鑄も認められる。先端から6cmほどの所から反りがある。柄部に木や布の痕跡は認められない。

この他の出土遺物としては、少量の土器片がある。第2・3号墳間の溝の埋土中、第2・3号墳間の溝底の土坑の埋土中、第3号墳の盛土中から出土している。いずれも土師器であるが、細片であるため、器種は特定できない。

第6節 小結

第2号墳、第3号墳ともに粘土床に割竹形木棺を納めた方墳であり、埋葬施設の構造、出土遺物から、ほぼ同時期に継起的に築かれた古墳であると考えられる。埋葬施設は、竪穴式石室を簡略化したものであり、古墳時代前期後半以降のものである。副葬品は、第2・第3号墳とも鉄製工具のみであるが、第3号墳の鉞が細身のものであるなど、古墳時代前期のものと考えてもよい特徴を備えている。また出土遺物に須恵器が無く、土器は土師器のみである点も、これらの古墳が古墳時代前期のものであることを裏付ける。出土遺物が少ないために、これ以上時期を限定することは困難であるが、古墳時代前期後半の内におさまるものと考えてさしつかえないであろう。

次に、第2号墳、第3号墳の先後関係であるが、古墳の構造や、出土遺物からは決めがたい。ただし、古墳の占地からは推測可能である。第2・3号墳のうち第3号墳のほうが尾根の最も幅の広い部分に占地しており、また基底部のレベルも第3号墳の方が高いところにある。このような薄弱な根拠ではあるが第3号墳の方が第2号墳に先立つ可能性があるのではないだろうか。ただし二つの古墳は間の溝を共有しており、その築造には計画性がうかがえ、同時期に築造が行われた可能性も否定できない。

最後に、両古墳の関係について述べておく。墳丘の規模、埋葬施設の規模ともに第3号墳が第2号墳にやや優越している。ただし、出土遺物はともに鉄製工具のみであり、優劣はつけがたい。全体的にみれば、第3号墳が主で第2号墳が従の関係にあるとは言えるだろう。

第7章 自然科学的方法による調査

第7章は公開していません

第8章 考察

第1節 下大谷古墳の復原

今回の調査では墳丘及び埋葬施設が良好であったため、築造工程の復原が可能である。

1. 下大谷古墳築造工程の復原

古墳築造に際しては、古墳築造地の占地を決定し、伐採を行い、山焼きを行う。調査の際に検出された墳丘基底面上の炭や灰はこの山焼きの痕跡を残したものと見えよう。また木の株の痕跡が直径30cm前後の穴となっていることが考えられる。この後、縄張りを行い地山の削り出しを行っている。この地山を削り出した平坦面が古墳周囲のテラスとなり、これによって生じた土が墳丘の盛土として利用されている。中心よりやや南に寄った場所の盛土面上に埋葬施設の掘形を掘削し、別に準備した木棺を据え付け（第4号）埋め戻しを行う。そして更に盛土を行い須恵器など供え、葬送の儀式が行われて、古墳が完成する。

埋葬後、時が余り経たないうち、つまり前の棺を埋めた場所を覚えている間、もしくは前の棺が残っている間に前埋葬者の非常に近い関係者が亡くなったため、新たに埋葬することになる。したがって、前木棺を避けて同一レベルで南側に並列して掘形を掘削し、木棺を据え付け（第3号）で、埋め戻しを行っている。

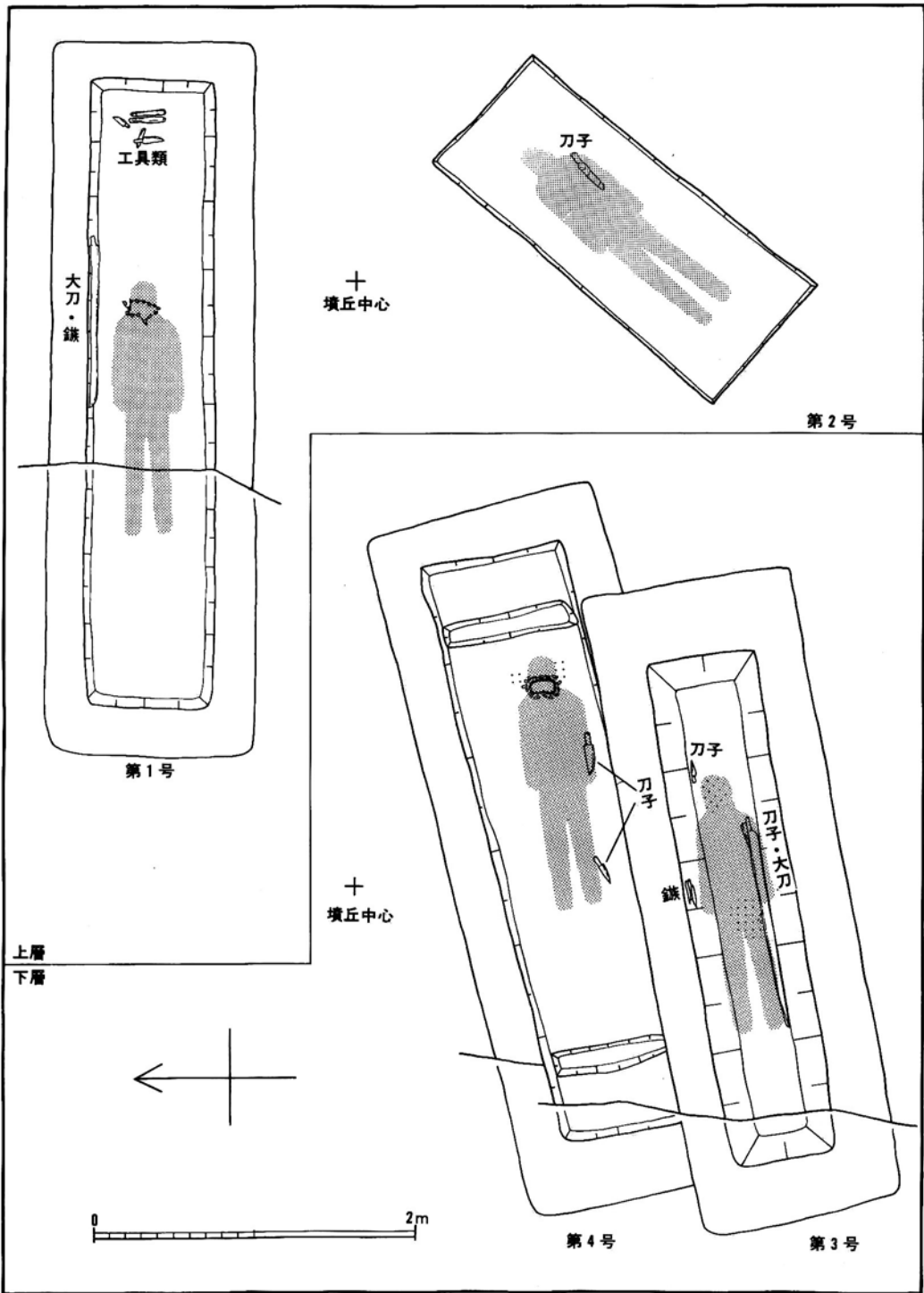
その後、時の経過が大きいのか、隔世のためか新たな埋葬面を形成している。ただ前二棺が墳丘中央より南側に寄ると異なって、北側に寄って掘形を掘削し、木棺を据え付け（第1号）で、埋め戻しを行っている。更に埋葬方位も前二棺に近い。このため前二棺を埋葬した位置、方向が覚えられていた可能性が高い。最後に第3・4号埋葬施設の上面に方向を異にして埋葬施設が設けられている。第1号木棺を避けているが、埋葬方位が異なるため、非常に近い関係者であるが、時間の隔たりが大きいことを窺わせる。なお第2号墳の築造時期は現段階では言及不能である。

2. 下大谷古墳の埋葬状況の復原

下大谷古墳では埋葬施設の遺存状況が良好であった事や、副葬品が原位置を保っていた事などから埋葬状況と副葬品の配置を考えてみる。

遺体の埋葬状況は福永伸哉の研究¹⁾によると古墳時代になると例外なく伸展葬で埋葬されている。したがって、ここでは伸展葬で埋葬されていると仮定する。また、第3号埋葬施設で成人と判明したとおり、他の埋葬施設でも成人と考える。この場合、身長は160cmと仮定する。以上の仮定に基づいて論を進める。

なお、埋葬頭位は歯の出土位置、玉の出土状況・出土位置、大刀の柄の方向から考えて、第



第3図 下大谷古墳群第1号墳埋葬位置の復原

1号から第4号までいずれも東であると考えられる。

第1号埋葬施設は、西半分が崖で削られているため、中央部に葬られたと仮定して木棺を復原すれば、玉の出土位置から考えて3.0mの棺長が考えられる。遺体の首には青銅の勾玉・丸玉、碧玉の管玉で構成される首飾り1連が着けられていた。副葬品は左肩の左側に鍔身を足方向に向けて鍔4本副え、その上に頭部右側から上腕部にかけて鋒を足方向に向けた大刀を副えている。また東側小口部分には木棺に直交する形で鉞、鑿それぞれ1本づつ、刀子2口が置かれていた。鉞、鑿は刃部は右向きに、刀子は刃部を遺体と反対方向に向けていた。

第2号埋葬施設は、1.7mの木棺一杯に遺体が置かれていた。副葬品は左胸部あるいは左上腕部に、刀が鋒を足方向に向け副えられていた。

第3号埋葬施設は、西半分が崖で削られているため、中央部に葬られたと仮定して木棺を復原すれば、歯の出土位置から考えて2.7mの棺長が考えられる。遺体にはガラス小玉の首飾りが着けられていた。副葬品は左肩部に鋒を足方向に向けた刀子を副え、その上に大腿部まで達する太刀を鋒を足方向に向けて置いている。右上腕部には鍔身を足方向に向けて6本副えられている。頭部東側には鹿角柄の刀子が鋒を体とは反対方向に向けて置かれていた。

第4号埋葬施設は、木棺の構造から考えて2.7mの棺長が考えられる。遺体は玉の出土位置から考えて、やや木棺の東よりに納められている。首には碧玉の管玉1連、ガラスの丸玉1連の合計2連の首飾りが着けられていた。また左右の耳にはガラス小玉の耳飾りが着けられていた。副葬品は左上腕部に鋒を足方向に向けて鹿角柄の刀子と、左大腿部に鹿角柄の刀子が副えられていた。

第2節 下大谷古墳の被葬者像の復原

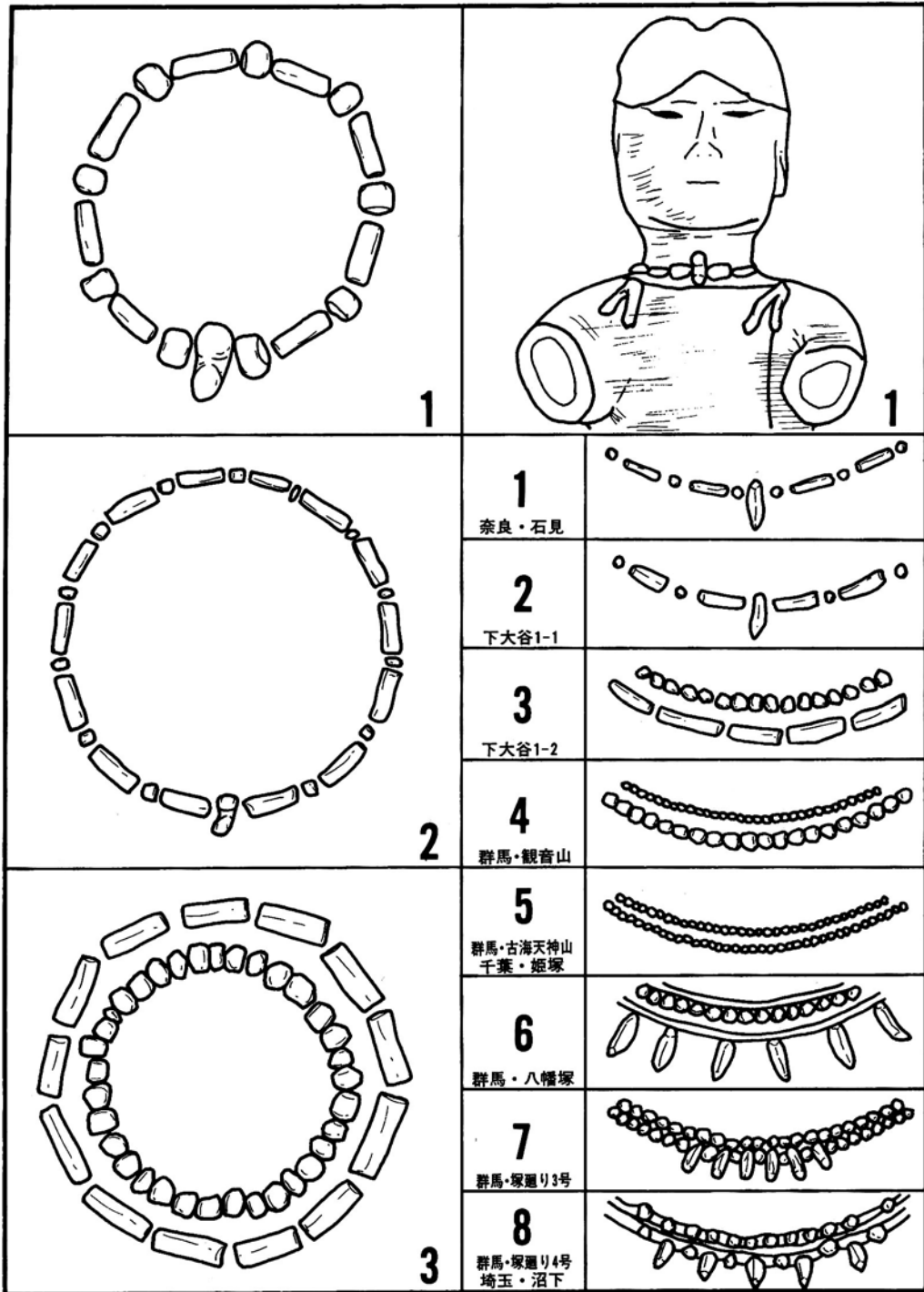
今回調査した第1号墳は複数の埋葬施設が存在し、しかも明らかに上下2層に分かれており、各被葬者の間柄・性別を推測する事は社会学的に重要であると考えられる。木棺・遺体及び有機質の物は残存していなかったが、僅かに残った第3号の被葬者の歯や鉄器・玉類などの出土遺物の検討により、性別を明らかにし、被葬者の間柄を推測してみたい。

1. 被葬者像の復原

まず第3号の被葬者は、第7章第2節の宮川氏による鑑定で性別ははっきりしないが、10歳代中頃の若者であることが判明した。この被葬者は大刀をもち、小玉の首飾りを着けていた。

第4号の被葬者は首飾りを2連装着しており、さらにガラス小玉による耳玉を装着していた様子である。首飾りは、③のように碧玉製の管玉1連とガラスを中心とする丸玉1連の計2連装着していた。

そこで首飾りの構成が判明していることから埴輪に類例を求め、比較を行い検討してみたい。第4号の被葬者のように管玉1連と丸玉1連の計2連で構成される首飾り③を装着している埴



第4図 下大谷古墳群首飾りの復原と壙輪にみる首飾り

輪は存在しない。ただ石塚久則²⁾や橋本博文³⁾の検討によれば、④の群馬・観音山古墳の小玉1連と丸玉1連の計2連や⑤の群馬・古海天神山古墳や千葉・姫塚古墳の小玉2連や⑥の群馬・八幡塚古墳の丸玉1連と勾玉1連の計2連や⑦・⑧の群馬・塚廻り3号墳や塚廻り4号墳の丸玉1連と勾玉・丸玉で構成されている1連の計2連など、2連の首飾りを着けているものは女性に限られることが結論付けられている。これらはいずれも関東の例であり、地域的に離れているが、時期は6世紀前半から末までの長期にわたって存在しており首飾り2連の装着例は女性であると理解できる。したがって、第4号の被葬者は女性が埋葬されている可能性が高い。更に耳玉を装着している埴輪は女性に限られる⁴⁾ことから肯首できる。鉄器からみても刀子2口のみで、大刀を持っていないことから女性の可能性が高い。

以上の事から下層の第3号は性別不明の10歳代中頃の若者、第4号の被葬者は女性であると考えられる。

第1号の被葬者は青銅製の勾玉・碧玉製の管玉・ガラスの丸玉で構成されている首飾りを装着している。埴輪に類例を求めれば全く同じ構成のものは出土していない。ただ非常によく似た埴輪の首飾り表現が①の奈良・石見遺跡⁵⁾に存在する。石見遺跡は地域的にも近く、また時期的にもほぼ同様である。稚拙な表現ながら明らかに、男子像の首に勾玉1個と管玉、丸玉が交互に装着されている。関東の埴輪例をみれば勾玉を含むものは女性像が多いようであるが、鉄器からみれば大刀を持っており、男性である可能性が高い。

第2号の被葬者は鉄器からみれば大刀を持っておらず、刀子のみであるが副葬品などが少なく不明な点が多い。

以上の事から上層の第1号の被葬者は男性であり、第2号の被葬者は不明であると考えられる。

2. 被葬者の間柄

これまでの検討により性別・年齢がある程度判明してきた。そこでこの下大谷古墳群第1号墳に葬られた被葬者の関係を考えてみる事にする。

下大谷古墳群第1号墳は、第4号被葬者の死に際して築造されたものである。この事は最初に葬られた第4号の被葬者が墳丘の中央を避けて墳丘中心の南側に埋置され、層は異なるもののあたかも対を成すかの様に第1号の被葬者が墳丘中心を挟んで北側に埋置されている。つまり古墳築造時に1つの古墳に2棺埋葬する計画で築かれたものと考えられる。第1号の被葬者が男性、第4号が女性と推定される事から夫妻とみることが常識的である。この事から夫妻墓として築造されたのである。ただ第4号の被葬者である妻の死後あまり年月の経たないうちに、予期せぬことに10歳代半ばで未婚のまま死に至った子息のあったことが窺える。これが第3号の被葬者として母である第4号の被葬者の南側つまり墳丘中心とは反対側に埋置されたのである。その後、夫である第1号の被葬者が亡くなったため、新たに整地しなおして当初予定して

第8章 考察

いた墳丘中心の北側にほぼ平行して埋置されたのである。その後、第2号の被葬者の埋葬なり、第2号墳の築造が行われている事が考えられる。

〔註〕

1. 福永伸哉 「原始古代埋葬姿勢の研究」『日本古代葬制の考古学的研究』大阪大学文学部考古学研究室 1990年
2. 石塚久則 「塚廻り古墳群調査の意義」『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会 1980年
3. 橋本博文 「梶山古墳出土玉類をめぐって」『常陸梶山古墳』大洋村教育委員会 1981年
4. 高橋健自 「埴輪及装身具」考古学講座12 雄山閣 1929年
5. 末永雅雄 「磯城郡三宅村石見遺跡出土埴輪報告」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』13 1935年

第9章 まとめ

第1節 調査の要約

国営農地開発事業（平野団地 印路・中村工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査において、下大谷古墳群と印路台状墓、印路古墳群Cの調査を行った。

下大谷古墳群は谷八木川流域に位置する2基の円墳からなる古墳群である。第1号墳は直径12.0m、第2号墳は7.0mである。第1号墳からは4基の木棺を直葬する埋葬施設を検出したが、第2号墳は墳丘および埋葬施設が流失していた。時期は5世紀末に築造され6世紀中頃まで埋葬を行っている。墳丘からは須恵器・土師器・埴輪が、埋葬施設からは鉄器や玉類が多量に出土した。

印路台状墓と印路古墳群Cはともに明石川と谷八木川の分水界の尾根上に位置している。

印路台状墓は長辺20.0m、短辺14.0mの長方形の台状墓である。3基の木棺を直葬する埋葬施設を検出した。

印路古墳群Cは後期の第1号墳と前期の第2・3号墳がある。第1号墳は直径12～14mの円墳である。5世紀末の古墳であるが、地滑りと盛土の流失により埋葬施設は確認されなかった。

第2・3号墳は一部溝を共有する古墳である。第2号墳が一辺10mの方墳、第3号墳が長辺14m、短辺12mの長方形墳である。いずれも粘土床に割竹形木棺を置き、直葬した埋葬施設である。出土遺物は少ない。

第2節 地域的位置づけ

各章の小結において時期的な位置づけを行っているため、ここでは明石川流域を中心に地域的な位置づけを行ってみたい。

印路台状墓

明石川流域では集落・墓ともに弥生時代中期中頃までは主として沖積地に展開してきている。中期後半になると、突如として丘陵上に立地を移す。この原因は倭国乱による緊張に伴うものか、自然災害にともなう地形変化によるものか、あるいは両者が関係する複数の要因によるものか現状では明らかにされていない。いずれにしても中期後半の集落は調査件数が多いためか明石川左岸の丘陵上を中心に分布しており、明石川右岸の丘陵上では未発見である。

墓に関しては、弥生時代中期中頃は集落に接して営まれており、中期後半は発見例が少ないが同様に集落の近接地あるいは隣接する尾根に営まれている。西神ニュータウン第42遺跡では2基の方形台状墓が調査されており、1号は一辺約9m、2号は一辺約6mの規模を測り、印

路よりひとまわり小さい。埋葬施設はそれぞれ3基の箱形木棺が検出されている。埋葬施設が複数発見されているのは印路と共通する点である。

印路では埋葬施設が3基存在しているが、第2・3号は箱形木棺を埋置するもので他の例からしても問題はない。第1号は痕跡からみると割竹状の木棺の可能性が高いが、中期後半では他に例を見ない構造である。後期前葉には大阪巨摩廃寺遺跡¹⁾から発見されており、以後、大阪加美遺跡などで発見されており系譜上存在してもおかしくない。ただこれが割竹形木棺と呼べるものであるかは別問題である。いずれにしても今後の類例を待つて検討したい。

印路古墳群C第2・3号墳

古墳時代前期としては印路古墳群C第2・3号墳の2基を調査した。第6章で述べたように遺物が少ないが諸要素から見て古墳時代前期に位置づけられる。

明石川流域の類例をみると、天王山4・5号墳、養田中の池があり、いずれも方墳で、割竹形木棺を直葬する。北神ニュータウン第9号地点でも存在する。天王山古墳を除いてはいずれも同様に副葬品が少ない。明石川流域における前期の一時期の特徴として捕らえることができる。

埋葬頭位は真北に規制されていないが、古墳が尾根の方向に規制されたため、これに伴い、また方墳であるため結果的に埋葬頭位が規制されている。つまり第3号墳では尾根に平行して棺を配置し、第2号墳では尾根に直行して棺を配置している。

下大谷古墳群・印路古墳群C第1号墳

古墳時代後期は下大谷古墳群、印路古墳群C第1号墳の3基を調査した。明石川流域ではこの時期に木棺を直葬する埋葬施設をもつ円墳の類例が多い²⁾。この時期は横穴式石室墳採用前後の時期として位置づけられ政治的、社会的意義付けが問題となろう。

遺物の中で注目されるものは、下大谷古墳の玉類である。第1・3・4号埋葬施設から合計349点が出土しており、その出土状況とともに注目される。中でも第1号埋葬施設出土の青銅製勾玉は類例をきかず、今後類例を待つとともに、その製作地も解明する必要がある。

第3節 集落との関係

今回調査を実施した古墳の被葬者が基盤とした集落について考えてみたい。

下大谷古墳は谷八木水系に属している。明石川右岸に広がる中段段丘面上は明石川流域の沖積平野に比べて集落遺跡の分布密度は格段に低い。これは沖積平野の開発に比べて段丘上の開発の難しさによるものと考えられる。同様に古墳の分布密度も低く、集落の分布に対応している。この中であって下大谷古墳の在り方は傑出したものとなっている。したがって、明石川水系を基盤とする集落も考えられよう。しかし、明石川流域を基盤とした集落に生活していた者が尾根一つ隔てた別水系に葬られる事は余程の事情がないかぎり有り得ないことである。それ

よりも高岡で大規模な窯跡群が存在するのにもかかわらず、それに関する工房なり集落が未発見であることを考慮すれば、今後谷八木川水系での集落の発見を期待したい。

つまり、下大谷古墳群の被葬者は谷八木川水系に基盤を置いていたと考えられる。

印路台状墓・印路古墳群Cは明石川水系と谷八木川水系の分水界に位置する。谷八木川水系を考えれば、支流の最上流であり、谷八木川水系の眺望は悪い。明石川水系を考えれば、眺望もすばらしいし、生産の基盤となる平野も開けている。集落を墓の近くに考えるとすれば、丘陵直下の印路遺跡を考えたい。印路遺跡は一部しか調査されていないが、古墳前期から後期の遺跡で竪穴住居跡や溝が検出されている。

弥生中期後半の遺跡は近くでは調査されていないが、西神ニュータウンの例からすればそれほど遠くない所に形成されていたと考えられる。

〔註〕

1. 大阪文化財センター編『巨摩・瓜生堂』1982年
2. 渡辺伸行「木棺直葬墳の終焉—明石川流域の古墳の調査から」『神戸の歴史』15 1986年

別 表

別表1 下大谷古墳第1号墳第1号棺 管玉一覧表

(本文P.14・図版24)

No.	全長(mm)	直径(mm)		孔径(mm)		重量(g)
31	21.1	6.8	6.7	2.0	1.0	1.84
32	18.9	6.7	6.7	2.0	1.0	1.64
33	18.8	6.5	6.4	2.4	1.5	1.50
34	20.5	7.2	7.4	2.0	0.5	2.10
35	17.6	6.8	6.7	2.0	1.0	1.59
36	19.7	6.7	6.7	2.5	1.0	1.77
37	15.7	5.9	5.9	2.5	0.8	0.97
38	16.0	6.3	6.1	2.4	1.0	1.18
39	18.5	6.3	6.3	2.0	1.0	1.38
40	16.5	5.9	5.9	2.0	1.0	1.14
41	18.0	6.7	6.6	2.3	0.8	1.50
42	19.5	6.4	6.5	2.6	2.0	1.59
43	20.7	6.9	6.9	2.2	1.0	1.92
44	21.9	7.3	7.3	3.0	1.0	2.26

別表2 下大谷古墳第1号墳第4号棺 管玉一覧表

(本文P.17・図版24)

No.	全長(mm)	直径(mm)		孔径(mm)		重量(g)
51	20.0	7.3	6.9	2.3	1.0	2.04
52	23.0	7.4	7.3	2.0	1.6	2.50
53	18.8	7.5	7.6	3.2	0.4	1.98
54	24.7	7.0	6.7	2.5	1.0	2.19
55	22.8	7.2	7.2	2.2	1.5	2.28
56	22.5	7.5	7.7	3.0	1.0	2.50
57	19.6	8.2	8.2	2.2	1.0	2.53
58	20.5	8.5	8.3	2.0	1.0	2.78
59	27.0	9.4	9.5	2.2	1.0	4.66
60	23.3	8.8	8.8	2.3	1.8	3.41
61	21.9	8.7	8.7	2.7	1.3	3.15
62	21.6	8.5	8.6	2.0	0.9	3.03
63	20.0	8.0	7.9	2.0	1.0	2.48

別表3 下大谷古墳第1号墳第1号棺 丸玉一覧表

(本文P.14・図版24)

No.	全長(mm)	直径(mm)	孔径(mm)		重量(g)	色	
11	5.0	7.1	2.9	2.9	0.36	藍	
12	5.2	6.2	1.5	1.5	0.27	藍	
14	4.4	6.9	2.0	1.8	0.32	濃い藍	
15	3.0	5.2	1.1	1.1	0.12	濃い藍	
16							細片
17	5.6	5.7	2.0	1.7	0.28	藍	
18	6.2	5.6	1.8	1.8	0.32	淡い藍	
19	6.3	5.9	1.8	1.8	0.34	淡い藍	
20	5.0	7.5	2.1	2.0	0.39	藍	
21	5.2	7.7	2.0	2.0	0.38	藍	
22	5.2	6.1	1.1	1.1	0.33	淡い藍	つやなくにふい色
23	5.5	6.2	1.5	1.2	0.42	藍	つやなくにふい色
25							細片
26							細片

別表4 下大谷古墳第1号墳第4号棺丸玉一覧表

(本文P.17・図版25)

No.	全長(mm)	直径(mm)	孔径(mm)		重量(g)	色	
71	7.5	9.4	5.0	3.5	0.69	淡い藍	
72							細片
73	6.0	9.1	3.0	3.0	0.60	藍	
74	5.5	8.4	3.7	2.8	0.53	淡い藍	
75	7.2	9.8	3.3	3.3	0.83	淡い藍	
76	8.1	9.6	4.0	3.5	0.88	淡い藍	
77	17.1	9.1	3.6		1.70	淡い藍	連玉
78		9.3		3.2			
79	7.0	9.7	2.2	1.9	0.79	淡い藍	欠損あり
80							破損
81	6.1	8.1	2.0	2.0	0.60	藍	
82	6.9	8.1	2.5	2.0	0.60	藍	
83	6.8	8.8	1.8	1.8	0.59	藍	
84	6.9	9.5	5.0	3.9	0.63	淡い藍	
85	13.3	9.2	1.8		1.48	藍	連玉
86		9.6		1.5			
87							細片
88							細片
89	7.1	8.6	4.0	2.0	0.66	淡い藍	
90							破損
91	7.2	9.2	2.0	1.5	0.79	藍	
92	3.8	6.0	1.0	1.0	0.22	藍	
93	7.0	9.2	2.0	1.5	0.74	藍	
94	4.8	8.6	2.1	1.7	0.49	藍	
95	5.7	7.5	2.5	2.5	0.43	鮮やかな水	
96	6.2	9.2	3.2	2.4	0.70	淡い藍	
97							細片
98	8.3	9.7	2.0	1.5	1.02	藍	
99							
100							
101	7.0	9.7	4.5	4.8	0.76	淡い藍	
102	6.5	10.7	5.0	(4.0)	0.82	藍	
104	13.5	8.5	4.5		1.36	淡い藍	連玉
105		8.5		1.8			
106	5.4	8.5	2.0	2.0	0.56	藍	
107	7.4	9.5	3.3	3.0	0.87	淡い藍	
108	7.1	9.6	2.1	2.9	0.79	藍	
109							細片
110	7.4	8.0	2.7	2.4	0.64	藍	
111	6.5	9.1	3.8	3.2	0.69	淡い藍	
112							細片
113	6.7	8.9	1.9	1.9	0.70	藍	
114	7.8	9.5	5.0	3.2	0.75	淡い藍	
115							細片
116	5.3	9.5	3.9	3.0	0.58	藍	
117	6.8	8.2	3.0	2.8	0.71	淡い藍	
118	6.3	9.3	2.0	1.8	0.69		
119	6.4	8.4	1.0	1.0	0.63	藍	
123	6.5	7.6	1.3	0.8	0.61	あめ	メノウ
124	7.9	8.9	4.3	3.0	0.83	淡い藍	

別表5 下大谷古墳群第1号墳第3号木棺頭部小玉一覧表

(本文P.16・図版26)

No.	全長	直径	孔径	重量	色調	No.	全長	直径	孔径	重量	色調
201	2.1	4.3	1.8	0.052	水	233	2.1	4.5	1.1	0.056	淡い青緑
202	3.9	3.2	1.1	0.053	水	234	2.8	4.2	1.1	0.053	水
203	1.9	4.1	1.6	0.032	水	235	2.9	4.0	1.1	0.047	淡い水
204	2.9	3.1	1.0	0.046	水	236	2.2	3.9	1.3	0.032	淡い水
205	3.0	2.2	0.9	0.025	水	237	2.2	3.3	1.2	0.026	黄緑
206	2.3	3.2	1.1	0.031	鮮やかな水	238	2.0	3.5	1.0	0.023	明るい緑
207	3.0	3.1	1.0	0.043	くすんだ水	239	2.1	4.0	1.2	0.040	黄緑
208	2.8	3.0	1.0	0.032	くすんだ水	240	2.0	3.3	1.1	0.020	明るい緑
209	1.9	3.0	1.0	0.019	淡い水	241	2.2	3.5	1.1	0.026	明るい緑
210	2.5	4.0	1.1	0.050	黄緑	242	2.9	2.9	1.0 0.9	0.029	淡い水
211	2.9	3.8	1.2	0.041	黄緑	243	2.6	3.5	1.0	0.036	くすんだ水
212	2.0	2.9	1.0	0.027	黄緑	244	4.0	3.8	1.1	0.058	くすんだ水
213	2.0	3.0	1.0	0.028	黄緑	245	2.1	3.9	1.2	0.044	水
214	2.6	3.1	0.8 0.7	0.015	鮮やかな水	246	2.3	4.1	1.5 0.9	0.039	淡い水
215	2.6	4.0	1.0	0.041	水	247	1.3	3.9	1.3	0.022	水
216	2.9	3.2	1.0 0.9	0.043	にふい黄緑	248	2.8	3.2	1.0	0.035	くすんだ水
217	2.7	3.2	1.0	0.028	緑	249	(2.5)	3.5	1.2	0.033	水
218	2.4	3.2	1.1 0.8	0.030	淡い水	250	2.0	3.1	1.1	0.030	くすんだ水
219	1.8	3.0	1.0	0.013	青緑	251	2.1	3.6	1.5	0.045	水
220	3.4	3.0	1.0 0.9	0.045	くすんだ水	252	3.0	4.0	1.0	0.061	緑
221	2.1	3.1	1.1	0.021	青緑	253	3.0	3.8	1.0	0.049	黄緑
222	3.1	3.2	1.0	0.050	水	254	2.0	3.4	1.0	0.030	黄緑
223	2.2	3.5	1.8	0.036	鮮やかな水	255	2.1	3.1	1.0	0.024	明るい緑
224	2.1	3.5	1.5	0.030	鮮やかな水	256	2.2	2.9	0.9	0.020	黄緑
225	1.1	4.0	1.2	0.018	鮮やかな水	257	2.8	3.0	1.0	0.033	水
226	1.9	3.3	1.1 1.0	0.030	鮮やかな水	258	2.0	3.0	1.0	0.021	淡い水
227	2.1	3.0	1.1	0.023	水	259	2.0	4.0	1.5	0.048	青緑
228	2.6	3.8	1.3	0.034	くすんだ水	260	2.2	3.0	1.1	0.020	黄緑
229	1.9	3.0	1.0 0.8	0.015	淡い水	261	2.0	3.3	1.0	0.022	ふか緑
230	2.0	3.2	1.1	0.023	鮮やかな水	262	1.9	3.7	1.1	0.020	淡い緑
231	2.7	4.3	1.1	0.065	黄緑	263	1.9	3.4	1.1	0.021	明るい緑
232	2.0	4.0	1.2	0.036	黄緑	264	1.4	3.5	1.2	0.026	黄緑

別表 6 下大谷古墳群第 1 号墳第 3 号木棺腹部小玉一覧表

(本文P.16・図版26)

No.	全長	直径	孔径	重量	色調	No.	全長	直径	孔径	重量	色調
265	1.9	3.0	1.1	0.025	水	291	3.0	4.0	1.0	0.037	淡い水
266	2.0	3.0	1.0	0.022	水	292	1.2	2.8	1.2	0.010	淡い水
267	1.3	3.3	1.4	0.017	淡い水	293	2.9	3.0	1.3	0.020	水
268	1.9	3.8	1.5	0.028	水	294	2.1	3.4	1.0	0.020	水
269	1.9	3.2	1.0	0.021	淡い水	295	3.1	2.5	1.0	0.026	くすんだ水
270	2.2	3.1	1.1	0.022	水	296	1.9	3.2	1.1	0.018	くすんだ水
271	2.0	3.0	1.0	0.022	鮮やかな水	297	1.8	3.0	1.3	0.018	鮮やかな水
272	2.0	3.0	1.0	0.022	淡い水	298	2.5	3.0	1.2	0.022	水
273	2.1	3.1	1.0	0.024	鮮やかな水	299	2.2	2.9	1.0	0.019	鮮やかな水
274	2.1	3.0	1.2	0.025	淡い水	300	1.7	3.0	1.7	0.014	淡い水
275	2.2	3.0	1.2	0.022	鮮やかな水	301	2.0	3.4	1.1	0.029	くすんだ水
276	2.5	3.2	1.4	0.029	鮮やかな水	302	1.5	3.8	1.2	0.024	淡い水
277	1.6	3.0	1.0	0.010	鮮やかな水	303	1.4	2.3	1.0 0.8	0.008	淡い水
278	2.1	2.9	1.0	0.017	水	304	2.9	3.1	1.2	0.039	明るい緑
279	2.8	4.0	1.0	0.036	黄緑	305	2.9	3.5	1.1	0.029	水
280	2.0	3.0	0.9	0.024	明るい緑	306	2.0	3.0	1.2	0.019	鮮やかな水
281	1.7	3.3	1.0	0.019	淡い緑	307	2.8	2.9	1.0 0.9	0.025	鮮やかな水
282	2.0	3.0	1.5	0.027	水	308	1.8	3.0	1.2	0.021	青緑
283	2.9	3.0	1.0	0.030	鮮やかな水	309	2.0	2.6	0.9	0.018	緑
284	1.7	3.0	1.2	0.019	水	310	1.2	4.2	2.0	0.028	くすんだ青緑
285	2.0	4.1	1.7	0.030	くすんだ水	311	2.0	3.6	1.2	0.024	水
286	2.0	4.0	1.2	0.027	くすんだ水	312	2.9	3.0	1.1	0.036	水
287	2.0	4.0	0.9	0.030	くすんだ水	313	(2.0)	3.0	1.0	(0.015)	緑
288	2.1	4.0	0.9	0.026	水	314	2.0	3.5	1.2	0.026	淡い緑
289	2.9	4.0	1.2	0.034	淡い水	315	1.6	3.5	1.0	0.015	黄
290	2.2	3.2	1.1	0.032	くすんだ水						

別表7 下大谷古墳群第1号墳第4号木棺頭部南側小五一覧表

(本文P.17・図版27)

No.	全長	直径	孔径	重量	色調	No.	全長	直径	孔径	重量	色調
401	2.2	4.1	1.0	0.047	藍	436	2.6	4.0	1.2 1.0	0.056	濃い藍
402	3.3	3.2	1.0	0.047	藍	437	1.9	3.2	1.0	0.021	藍
403	2.4	3.4	1.1	0.034	藍	438	2.7	3.0	1.1	0.034	藍
404	3.1	4.7	1.8	0.080	淡い藍	439	2.0	4.2	1.1	0.036	濃い藍
405	2.9	3.9	1.5	0.040	藍	440	3.0	2.6	1.0	0.033	淡い藍
406	2.3	3.5	1.0	0.027	藍	441	2.9	4.0	1.5	0.042	濃い藍
407	2.1	4.8	1.8 1.1	0.045	藍	442	2.0	4.5	2.3	0.035	淡い藍
408	3.0	4.2	1.1	0.060	濃い藍	443	2.2	3.5	1.2	0.031	淡い藍
409	2.2	4.0	1.3	0.044	濃い藍	444	4.0	4.0	1.0	0.063	濃い藍
410	2.9	3.2	1.2	0.046	濃い藍	445	2.3	3.7	1.0	0.035	濁った藍
411	4.0	3.1	0.9	0.051	藍	446	3.1	4.0	1.5	0.051	藍
412	2.8	3.3	1.1	0.039	淡い藍	447	2.9	4.0	1.6	0.039	藍
413	3.1	3.2	1.2	0.048	淡い藍	448	3.8	3.5	1.7 1.5	0.037	淡い藍
414	3.0	4.0	1.0	0.046	藍	449	2.2	3.6	1.7	0.038	藍
415	2.1	4.0	1.1	0.033	藍	450	3.0	3.3	1.2 1.0	0.029	淡い藍
416	2.4	3.8	1.0	0.034	藍	451	3.0	3.0	1.0	0.041	淡い藍
417	2.5	3.1	1.1	0.036	藍	452	2.3	3.9	1.5	0.042	濃い藍
418	2.0	3.2	1.0	0.029	藍	453	2.0	3.2	1.1	0.030	濁った藍
419	2.9	3.9	1.1 1.0	0.041	藍	454	2.2	3.5	1.2	0.033	藍
420	2.1	3.8	1.0 0.9	0.031	藍	455	2.9	3.8	1.2 1.4	0.042	藍
421	2.8	3.5	1.2	0.044	淡い藍	456	3.0	3.8	1.3	0.048	淡い藍
422	2.0	3.3	0.9	0.028	藍	457	2.6	3.7	1.3	0.034	藍
423	3.0	3.0	1.0	0.037	淡い藍	458	2.4	3.0	1.1	0.030	藍
424	2.8	3.3	1.0	0.045	藍	459	2.9	5.0	2.0 1.9	0.081	濃い藍
425	2.3	3.4	1.1	0.026	淡い藍	460	2.0	4.0	1.7	0.032	藍
426	1.9	3.0	1.1	0.020	藍	461	2.8	3.8	1.1	0.043	濃い藍
427	2.5	3.0	1.0	0.027	淡い藍	462	3.3	3.3	1.5 1.6	0.047	藍
428	1.9	3.5	1.0	0.019	藍	463	3.0	3.9	1.3	0.040	藍
429	2.3	4.0	1.8 1.0	0.036	深い青緑	464	3.1	3.4	1.1 1.0	0.044	藍
430	2.0	4.0	1.8	0.032	藍	465	2.0	3.4	1.1 1.0	0.030	淡い藍
431	2.9	3.0	1.0	0.031	淡い藍	466	1.9	3.0	1.0	0.020	淡い藍
432	2.3	3.8	1.2	0.034	藍	467	1.5	3.0	1.0	0.013	藍
433	2.2	3.2	1.1 1.0	0.032	藍	468	2.7	4.0	1.1	0.041	藍
434	2.2	4.0	1.3 1.0	0.030	濃い藍	469	2.9	4.2	1.2	0.050	濁った藍
435	2.0	3.6	1.0	0.028	濃い藍	470	2.3	3.9	1.0	0.044	藍

別表 8 下大谷古墳群第1号墳第4号木棺頭部北側小玉一覧表

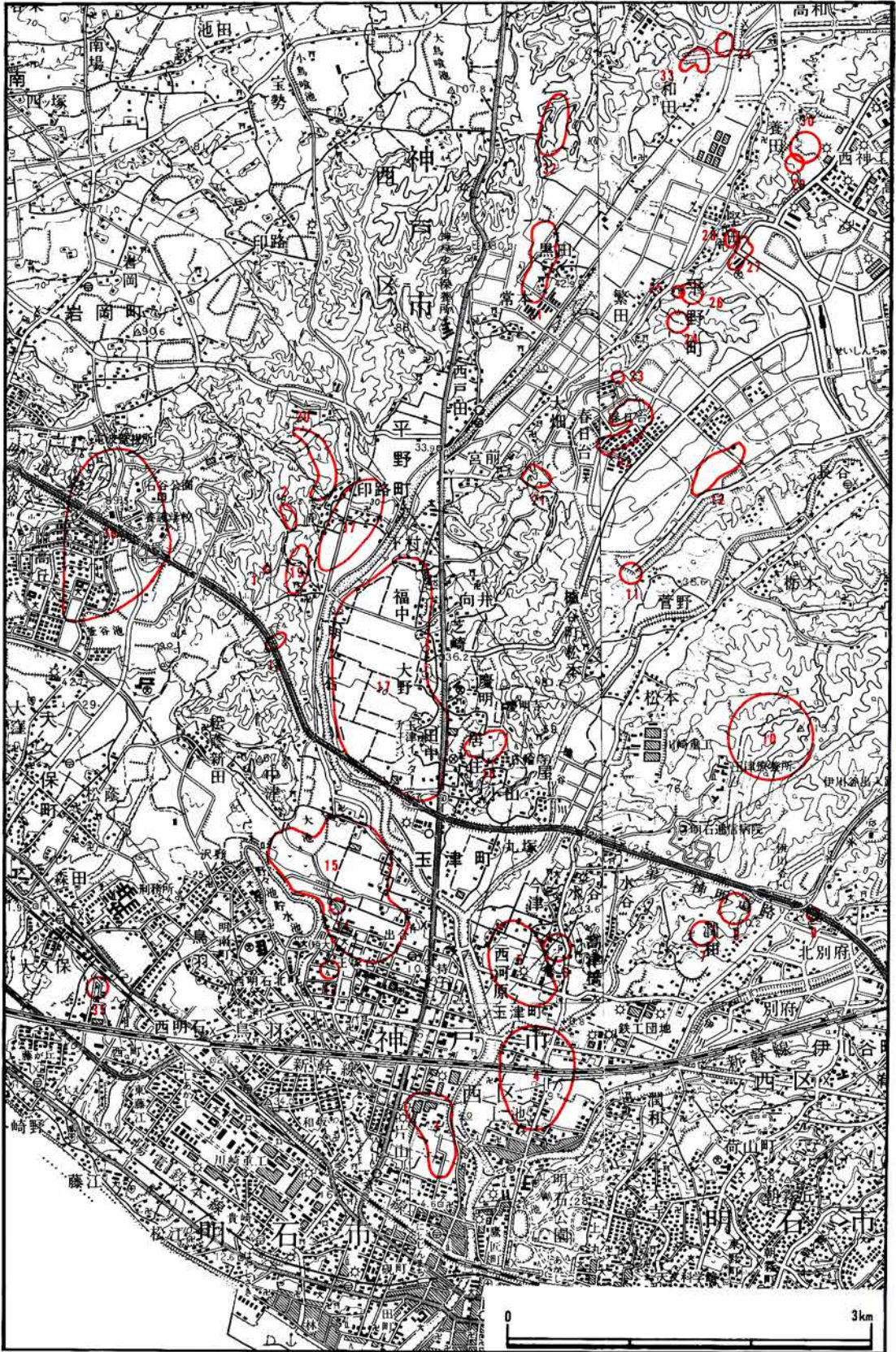
(本文P.17・図版27)

No.	全長	直径	孔径	重量	色調	No.	全長	直径	孔径	重量	色調
471	2.5	3.8	1.2	0.039	藍	507	2.3	3.5	1.0	0.031	濁った藍
472	2.0	4.2	1.5	0.039	濃い藍	508	2.8	3.8	1.3	0.044	淡い藍
473	2.3	4.0	1.1	0.041	藍	509	1.9	3.9	1.2	0.027	青緑
474	2.9	4.0	1.2 1.4	0.047	藍	510	2.1	(4.0)	1.0	(0.021)	藍
475	2.8	4.6	1.5	0.037	藍	511	2.1	4.0	1.5	(0.026)	青緑
476	2.2	4.0	1.2	0.029	藍	512	3.0	3.0	1.0	0.034	藍
477	3.0	4.0	1.1	0.042	濃い藍	513	2.0	3.8	1.2 1.0	0.032	藍
478	2.1	4.0	1.1	0.036	藍	514	2.0	3.9	1.1 1.0	0.035	藍
479	2.0	4.0	1.2	0.035	藍	515	2.9	3.5	1.1	0.038	藍
480	2.2	4.0	1.0	0.038	藍	516	3.0	3.2	1.2 1.0	0.034	淡い藍
481	1.8	3.8	1.6	0.032	藍	517	1.8	3.1	1.3	0.020	淡い藍
482	2.0	3.5	1.4	0.030	藍	518	2.2	3.1	1.1 1.0	0.027	藍
483	2.0	4.0	1.1	0.037	淡い藍	519	1.9	3.0	1.2	0.019	藍
484	2.8	3.0	1.0	0.027	濃い藍	520	2.8	3.6	1.0 0.9	0.034	藍
485	3.0	3.5	1.0	0.047	藍	521	2.7	3.8	1.1 1.0	0.036	淡い藍
486	2.1	4.3	1.2	0.040	藍	522	1.9	3.9	1.0	0.022	藍
487	2.9	4.0	1.5	0.054	淡い藍	523	2.0	3.8	1.0	0.025	淡い藍
488	2.5	3.8	0.9	0.036	藍	524	1.9	3.2	1.0	0.026	藍
489	2.0	3.9	1.4	0.021	淡い藍	525	2.0	3.1	1.0	0.026	藍
490	2.0	3.0	1.1	0.023	藍	526	2.0	3.4	1.1	0.023	藍
491	2.6	3.5	1.5	0.033	淡い藍	527	1.7	3.3	1.0	(0.018)	藍
492	2.7	3.5	1.0	0.030	濃い藍	528	2.2	3.5	1.0	0.033	淡い青緑
493	2.3	3.4	1.1	0.038	藍	529	3.0	3.8	1.1	0.053	藍
494	2.6	3.0	1.0	0.029	藍	530	2.3	4.0	1.1	0.043	藍
495	2.9	3.0	1.0 1.1	0.029	淡い藍	531	2.1	4.5	1.5	0.030	藍
496	1.7	3.6	1.2	0.020	藍	532	2.2	4.1	1.0	0.034	藍
497	2.0	3.2	1.3	0.028	藍	533	1.9	3.5	1.1	0.031	藍
498	2.0	3.6	1.1	0.033	藍	534	2.1	4.0	1.0	0.034	藍
499	2.2	4.0	1.9	0.034	淡い藍	535	2.9	4.0	1.5	0.027	藍
500	1.7	3.1	1.1	0.019	藍	536	2.2	3.7	1.2	0.034	淡い藍
501	2.0	4.1	1.2	0.037	淡い藍	537	1.9	3.7	1.2	0.024	淡い藍
502	2.0	4.0	1.3	0.027	淡い藍	538	1.4	3.5	1.1	0.020	淡い藍
503	2.6	3.8	1.0	0.044	淡い藍	539	2.1	3.0	1.0	0.030	濁った藍
504	2.1	3.8	1.1	0.031	濁った藍	540	2.0	3.1	1.3 1.0	0.029	濁った藍
505	1.8	3.4	1.2	0.016	淡い藍	541	2.1	3.8	1.2	(0.041)	藍
506	1.9	3.0	1.3 1.1	0.014	淡い藍	542	3.0	3.9	1.0	(0.039)	濃い藍

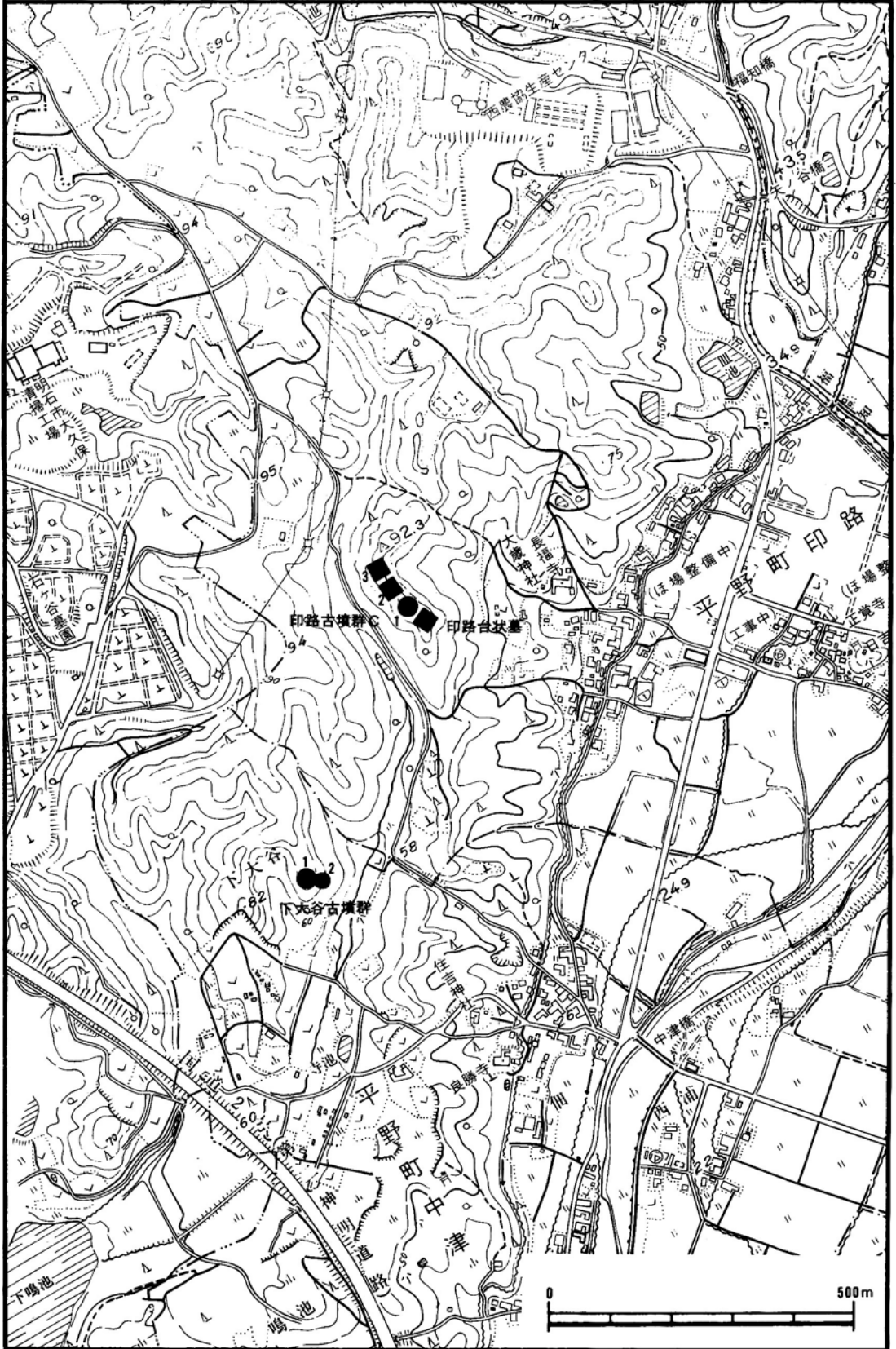
版 圖

遺跡一覧

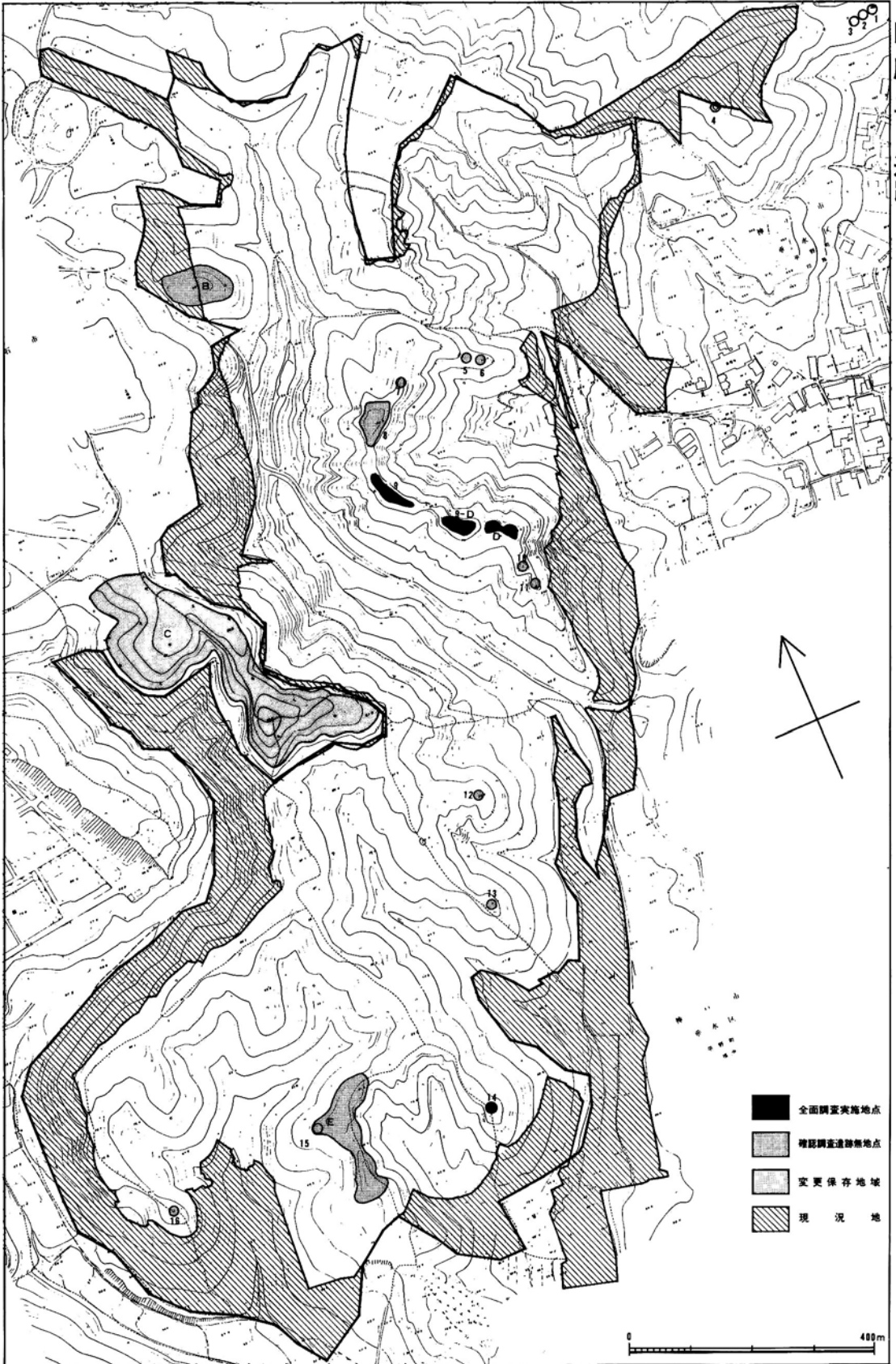
1. 下大谷古墳群
2. 印路台状墓・印路古墳群C
3. 吉田南遺跡
4. 新方遺跡
5. 今津遺跡
6. 高津橋岡遺跡
7. 瓢塚古墳
8. 天王山古墳群
9. 鬼神山古墳群
10. 青谷遺跡
11. 西神N.T.第62遺跡
12. 西神N.T.第65遺跡
13. 王塚古墳
14. 亀塚古墳
15. 出合遺跡
16. 居住小山遺跡
17. 玉津田中遺跡
18. 中村古墳群
19. 印路古墳群D
20. 印路古墳群A・B
21. 西神N.T.第55遺跡
22. 西神N.T.第50遺跡
23. 西神N.T.第47遺跡
24. 西神N.T.第41・42遺跡
25. 西神N.T.第40遺跡
26. 西神N.T.第38遺跡
27. 西神N.T.第30・32・33遺跡
28. 堅田神社境内古墳群
29. 西神N.T.第11遺跡
30. 養田中の池遺跡
31. 黒田遺跡
32. 鍋谷池遺跡
33. 七曲り古墳群
34. 藤原橋古窯跡
35. カゲユ池古墳群
36. 高丘古窯跡群
37. 印路遺跡



遺跡分布図

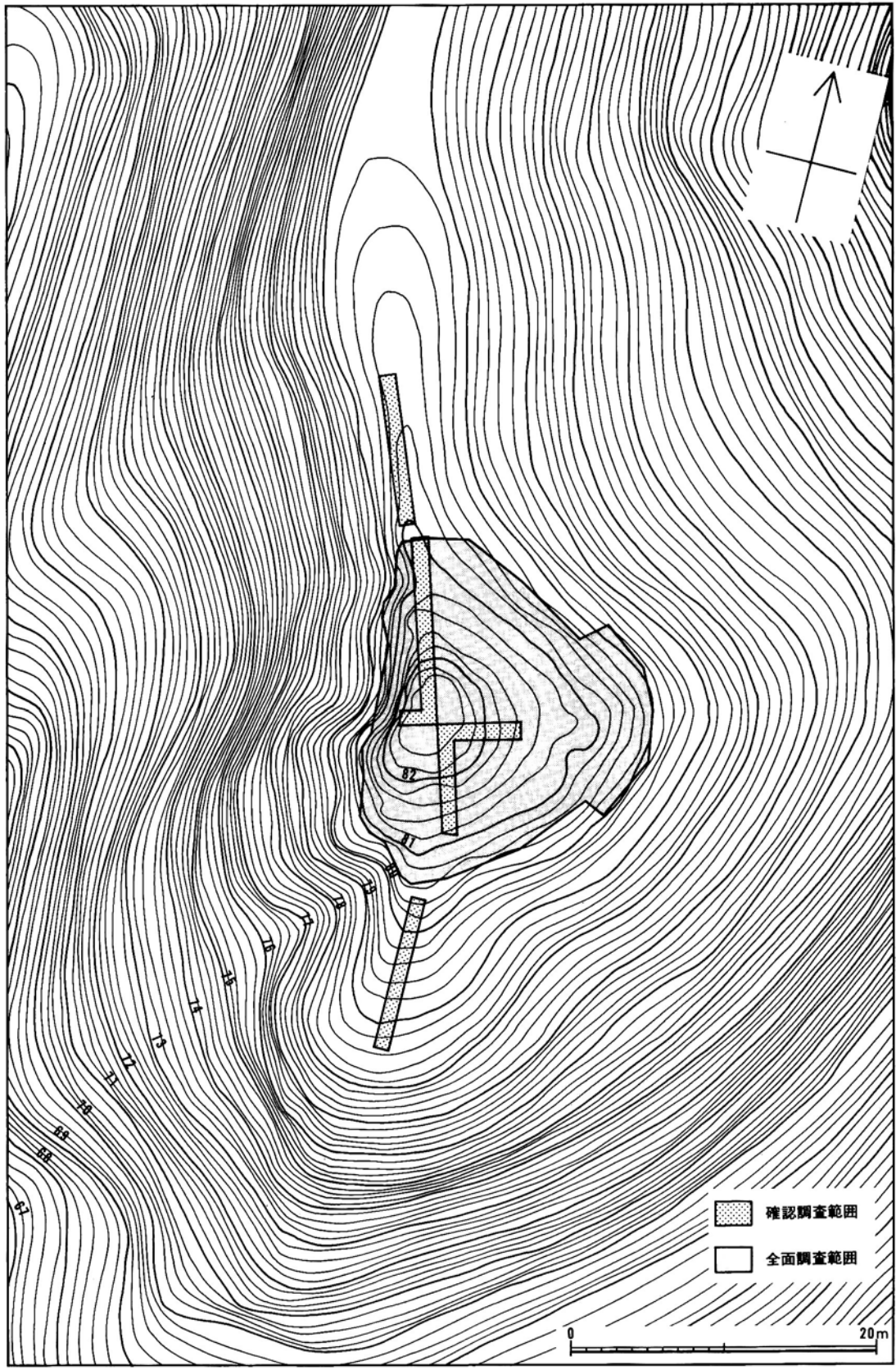


調査の位置

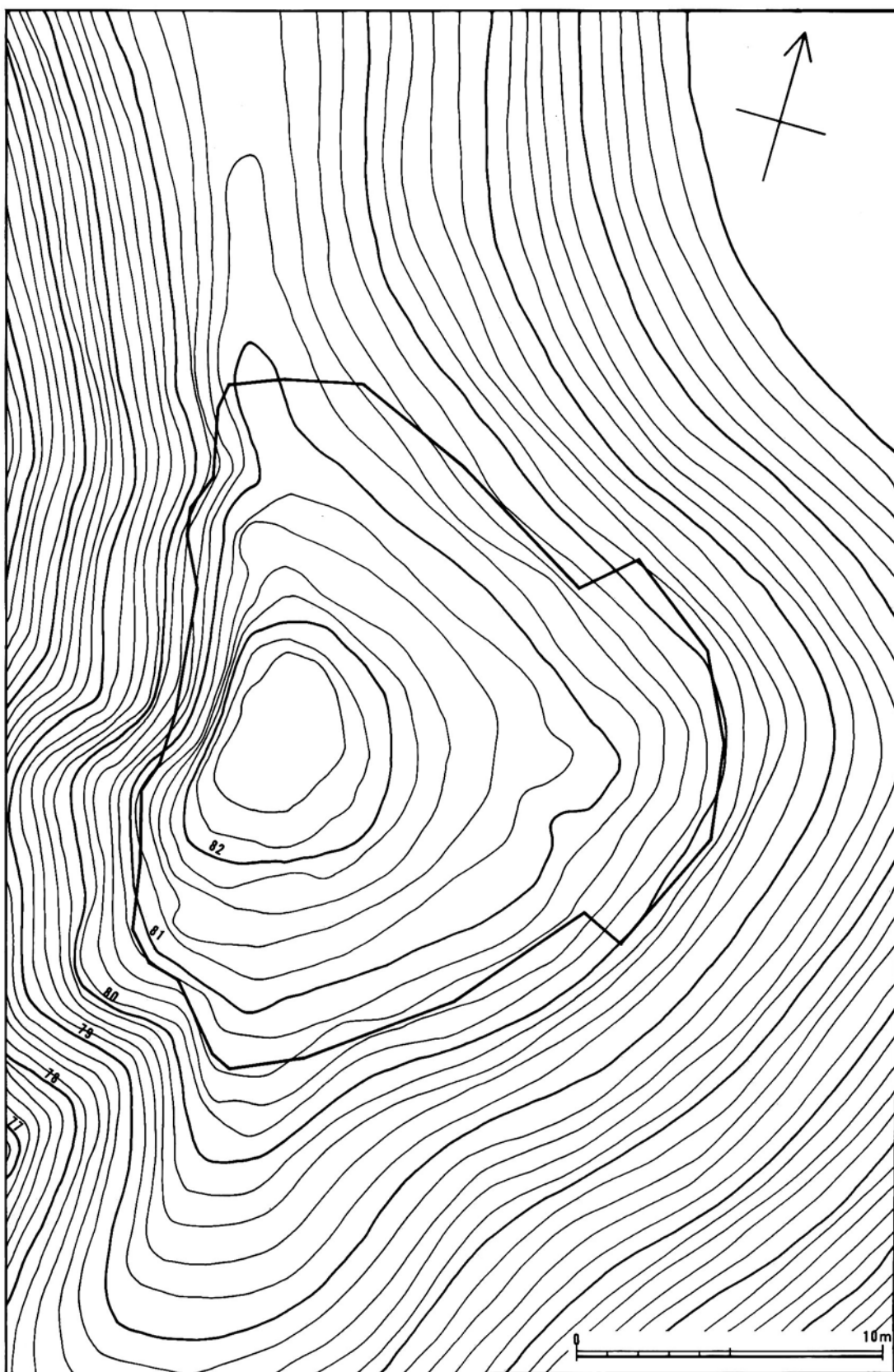


工事計画と調査地点

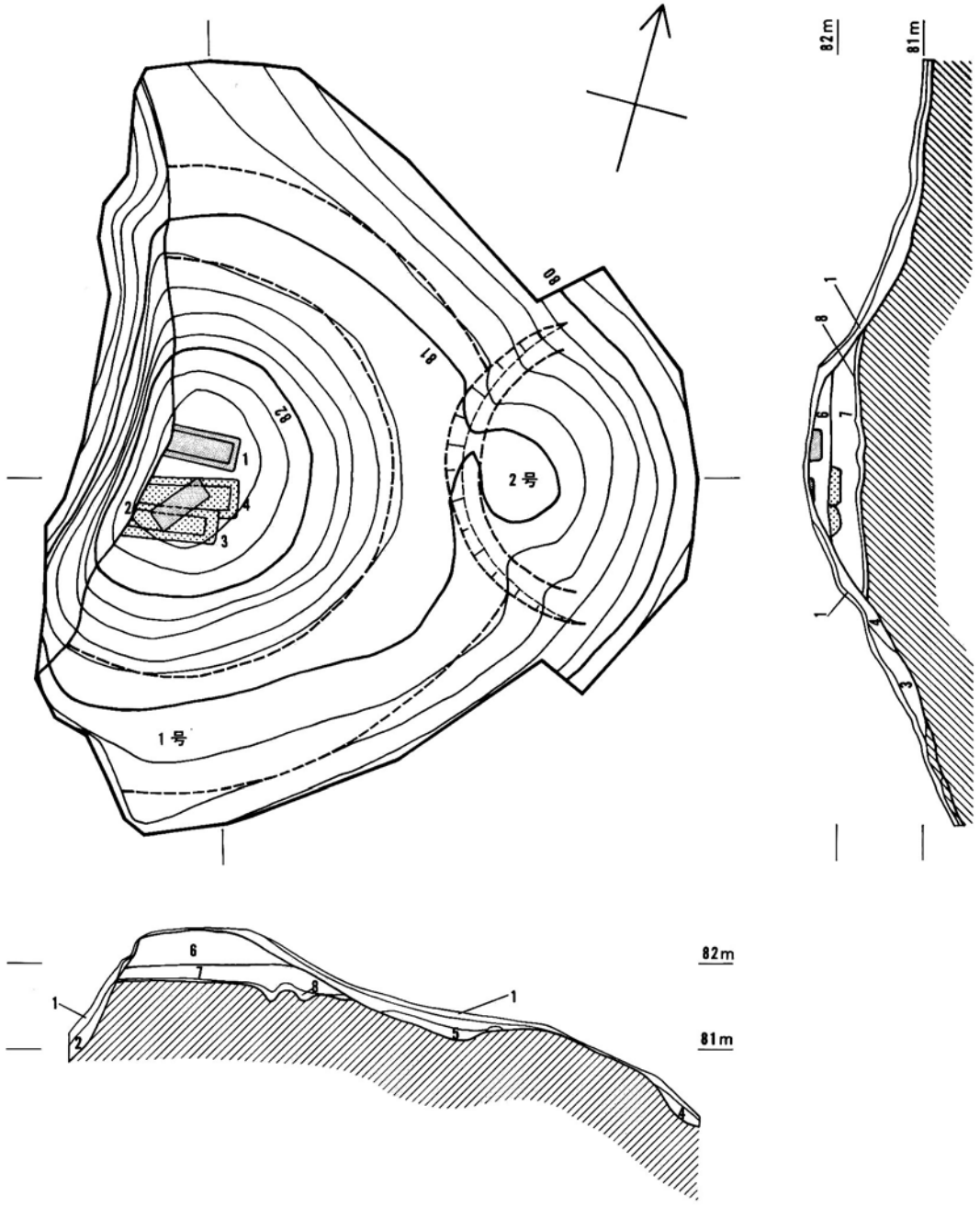
下大谷古墳群



位置図



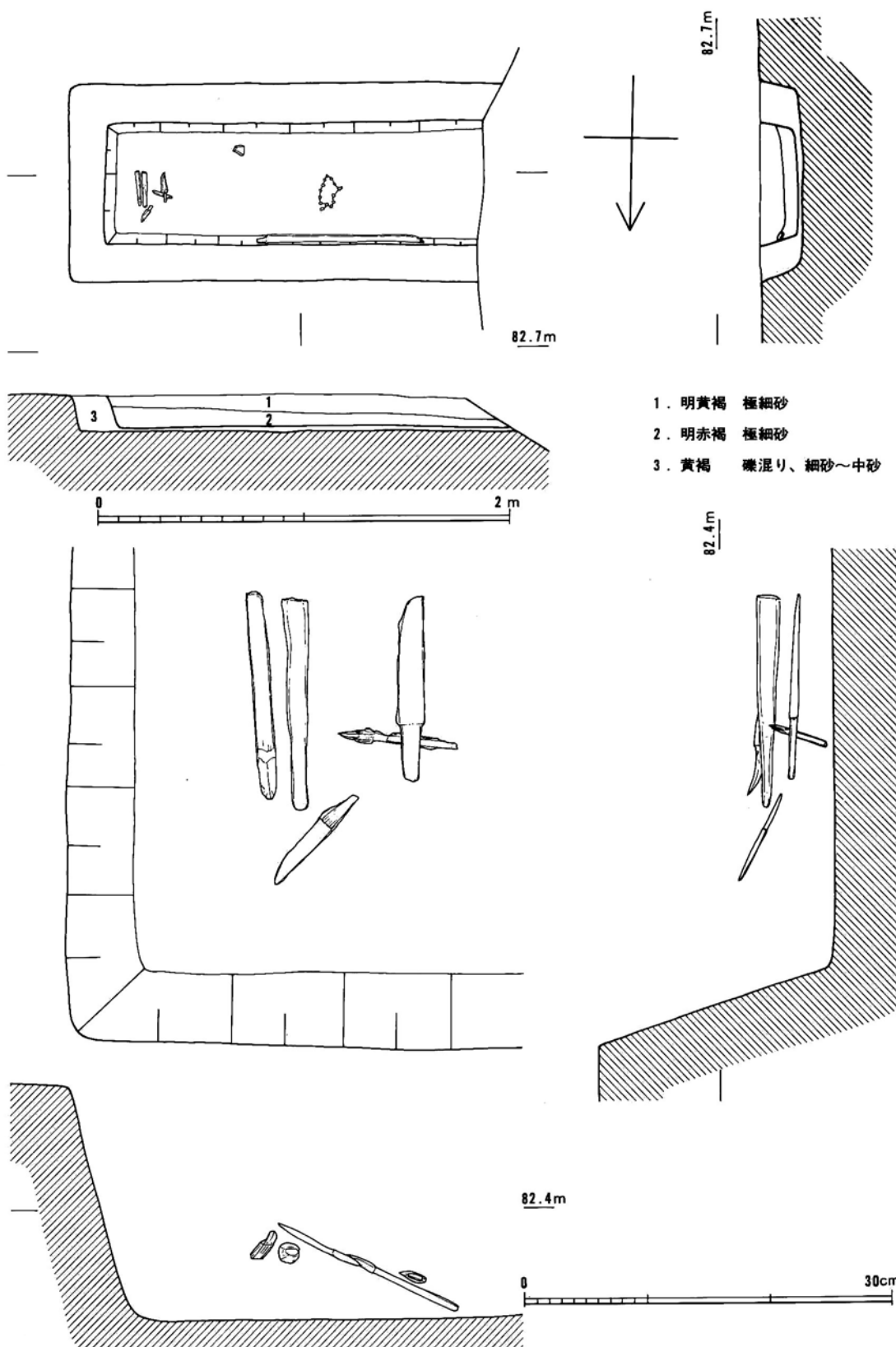
調査前地形測量図



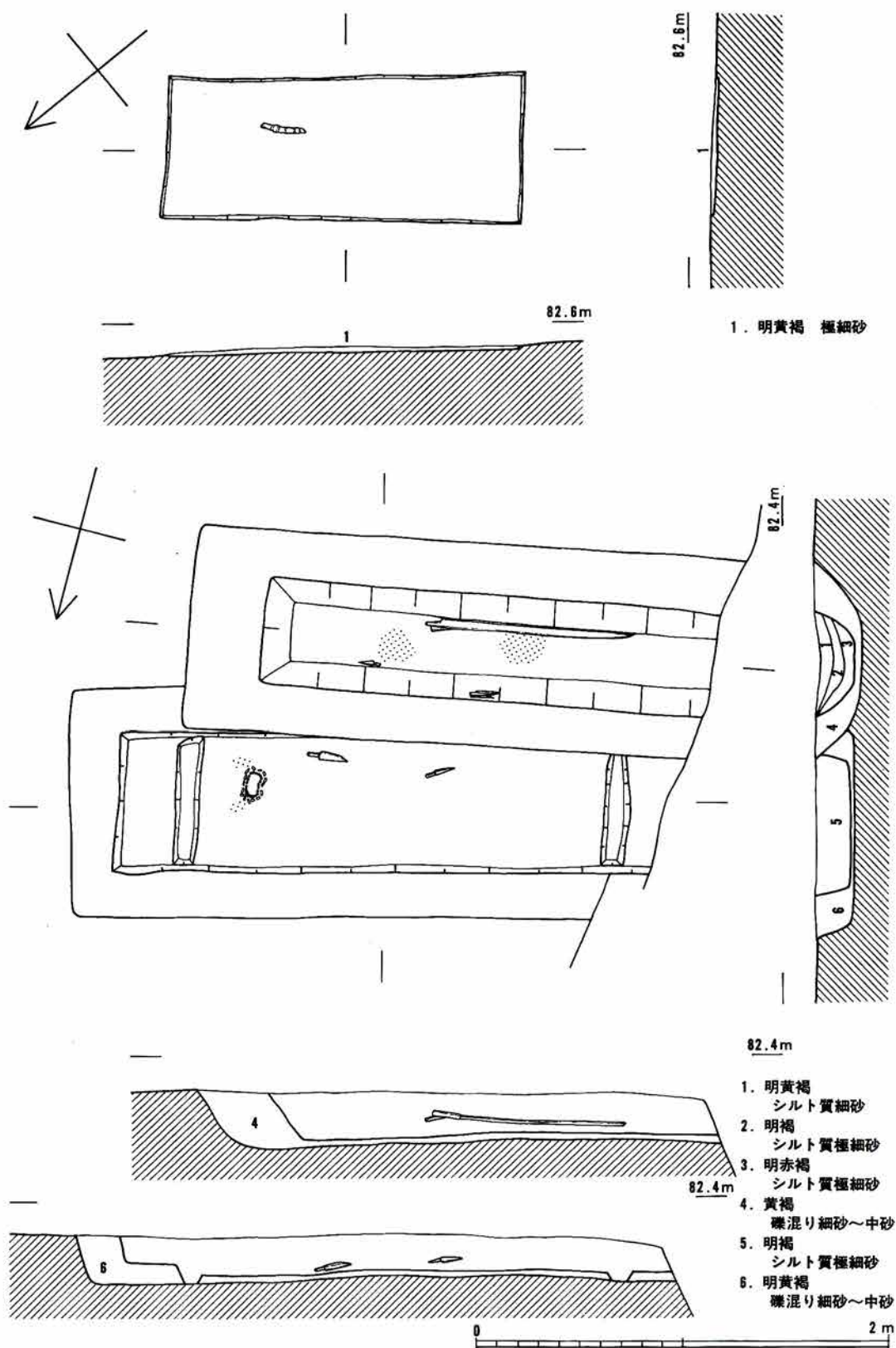
- | | |
|--------------|--------------|
| 1. 表土 | 5. 黄褐 極細砂 |
| 2. 地すべり土 | 6. 明褐 礫混り |
| 3. 明黄褐 細砂～中砂 | 7. 褐 炭混り、礫混り |
| 4. 黄橙 細砂～中砂 | 8. 灰 炭・灰 |



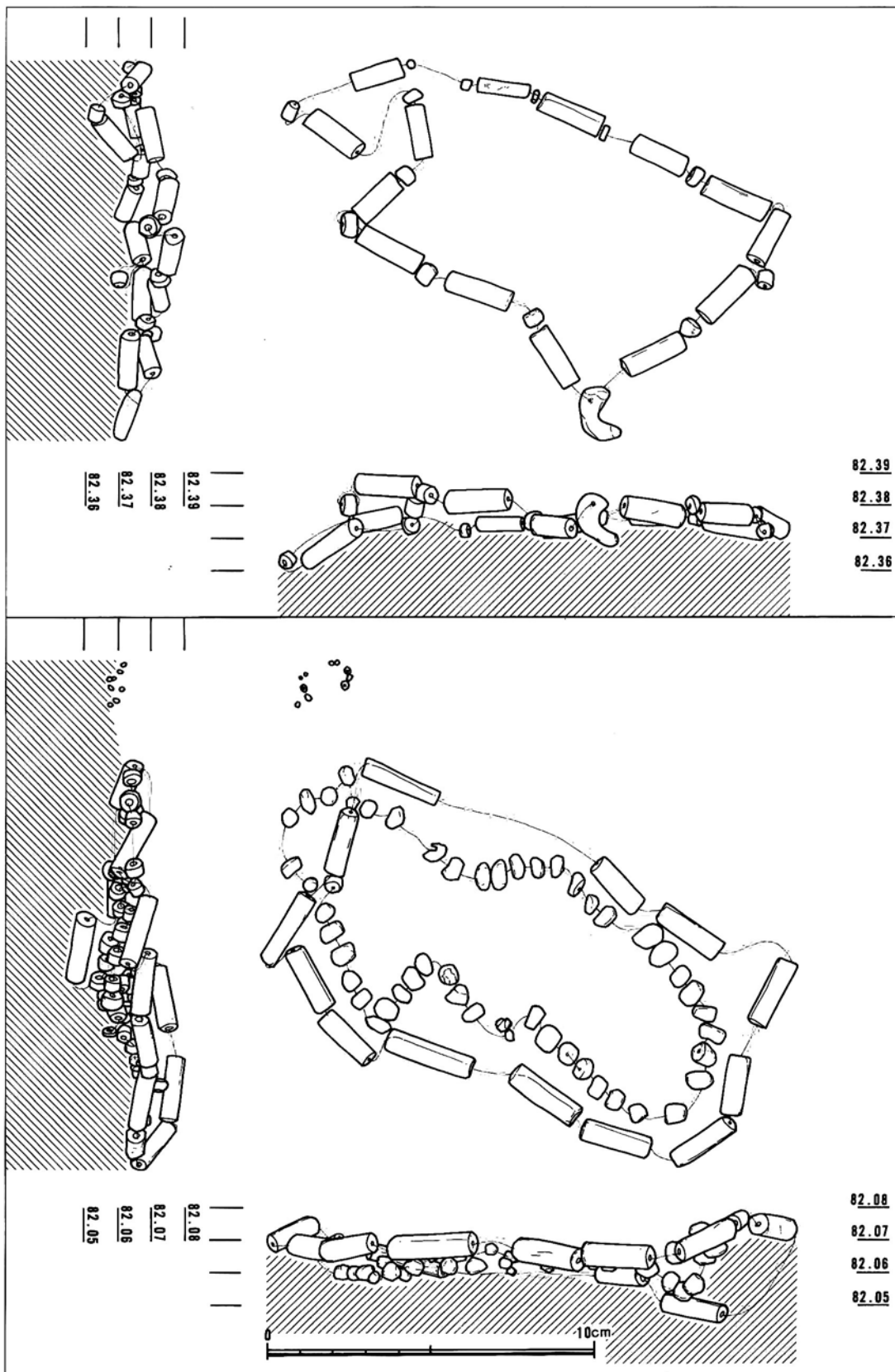
調査後地形測量図・墳丘断面図



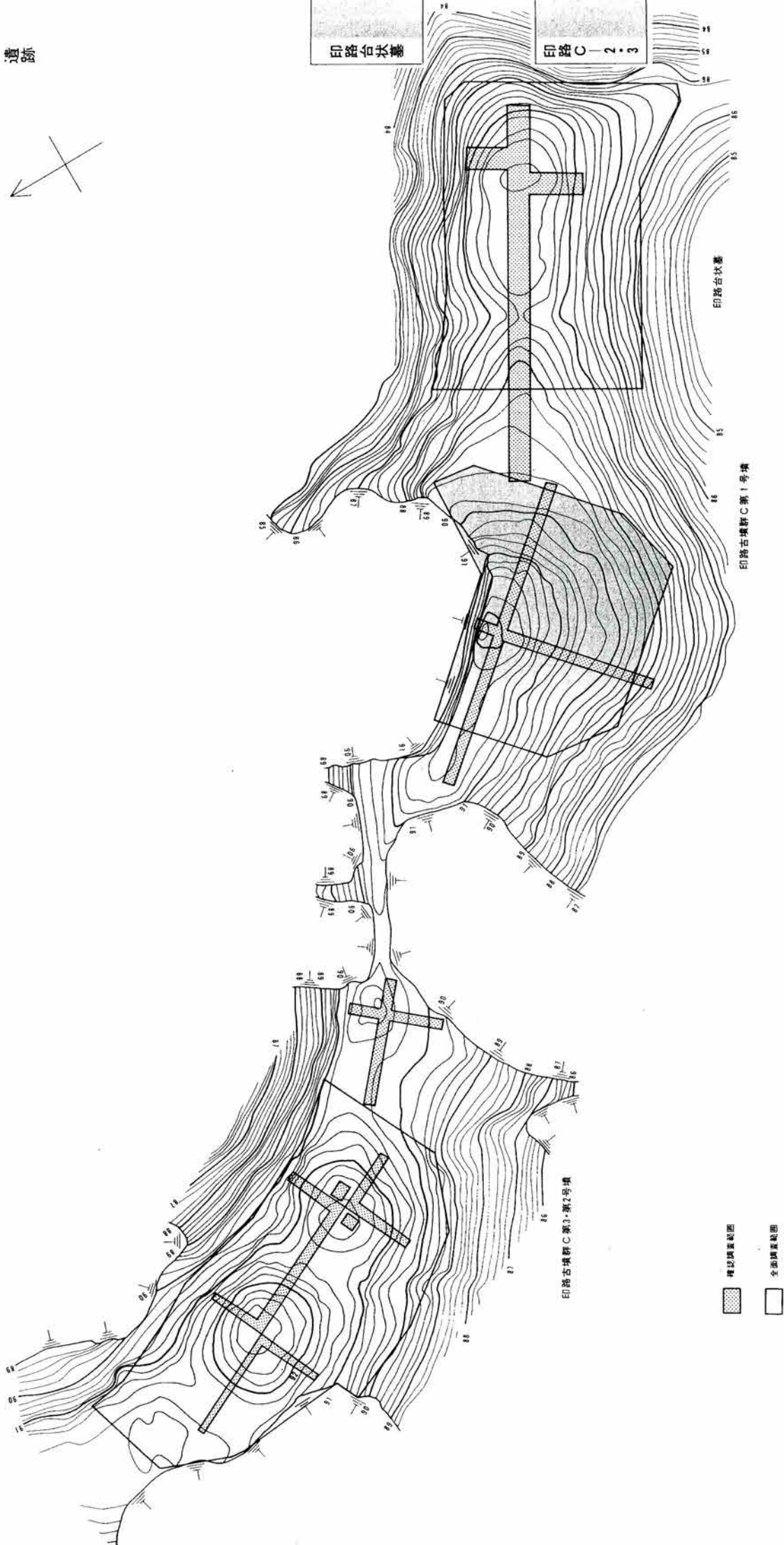
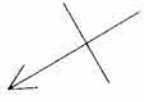
上 第1号墳第1号埋葬施設平面・断面図
下 第1号墳第1号埋葬施設鉄器出土状況

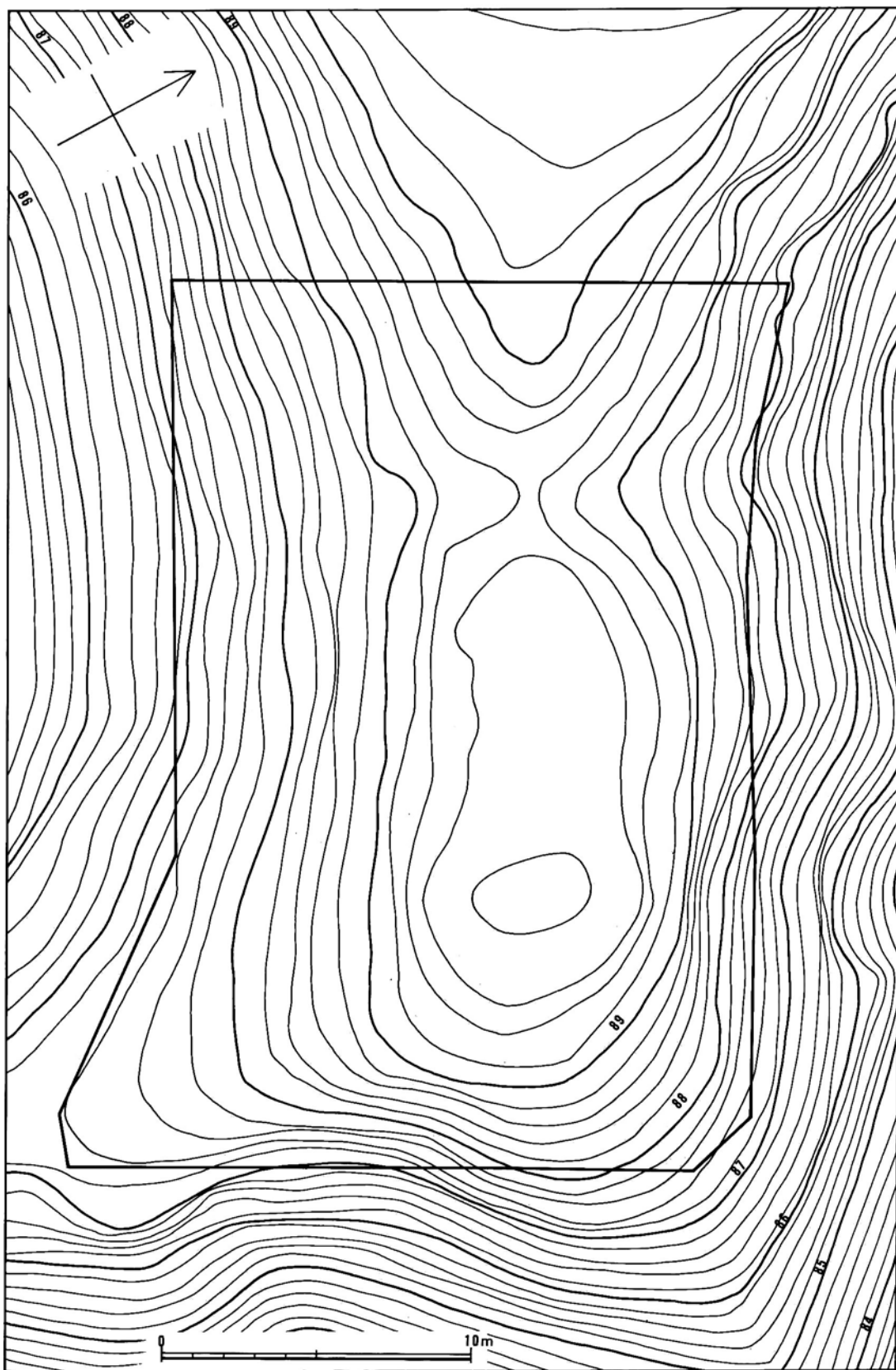


上 第1号墳第2号埋葬施設平面・断面図
 下 第1号墳第3・4号埋葬施設平面・断面図

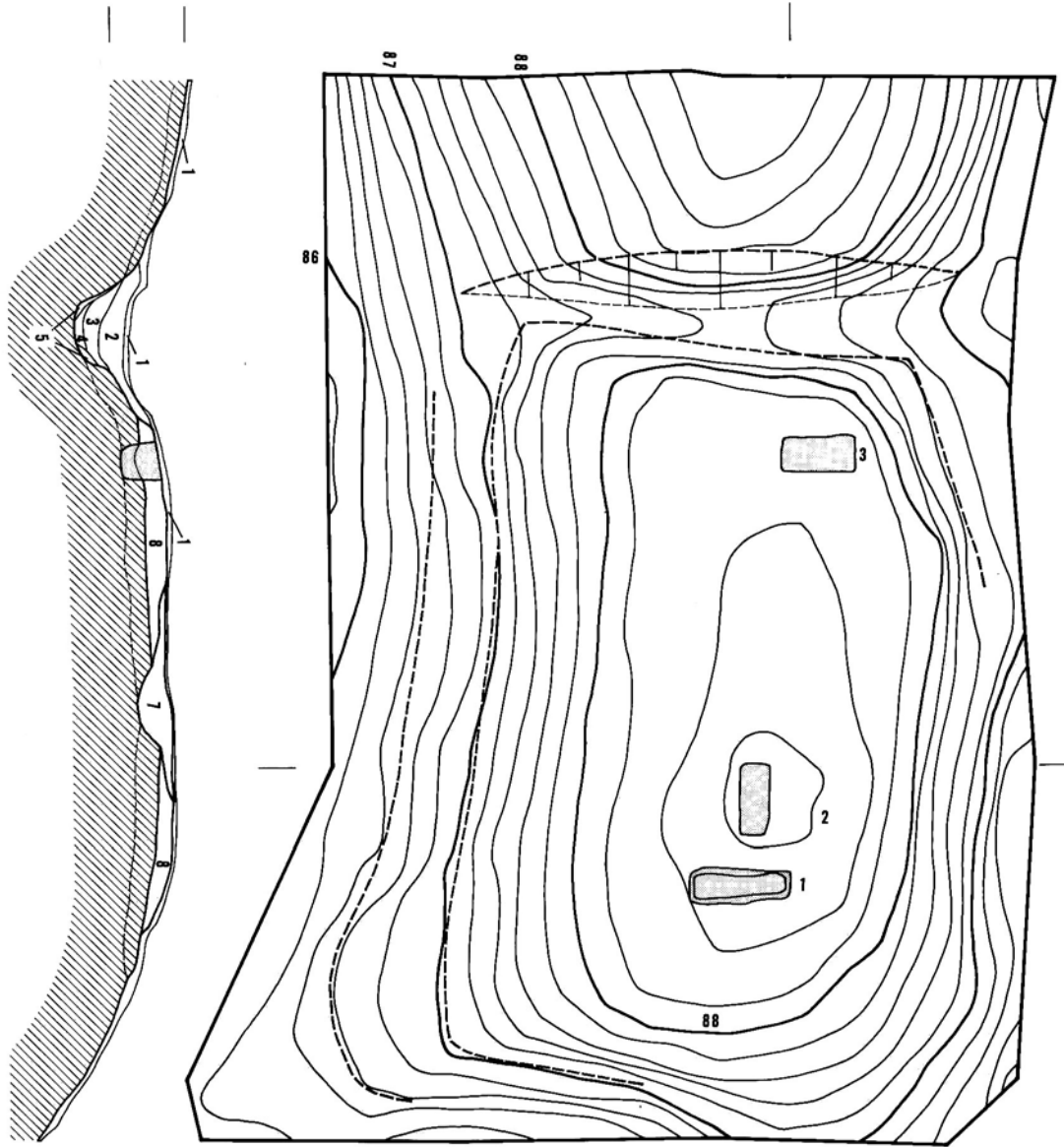


上 第1号埋葬施設玉出土状況
下 第4号埋葬施設玉出土状況

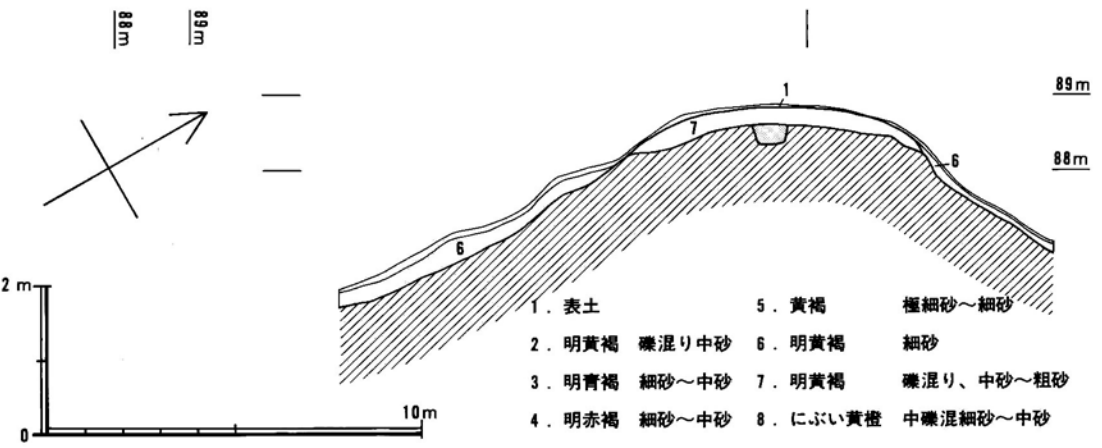




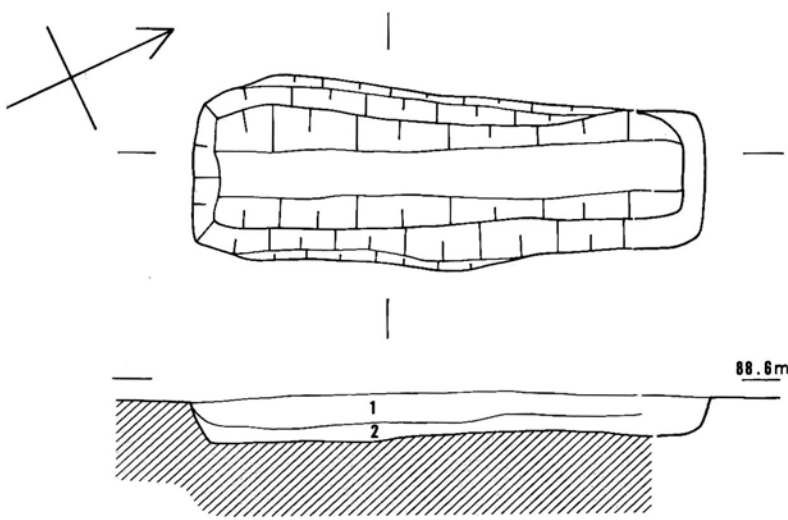
調査前地形測量図



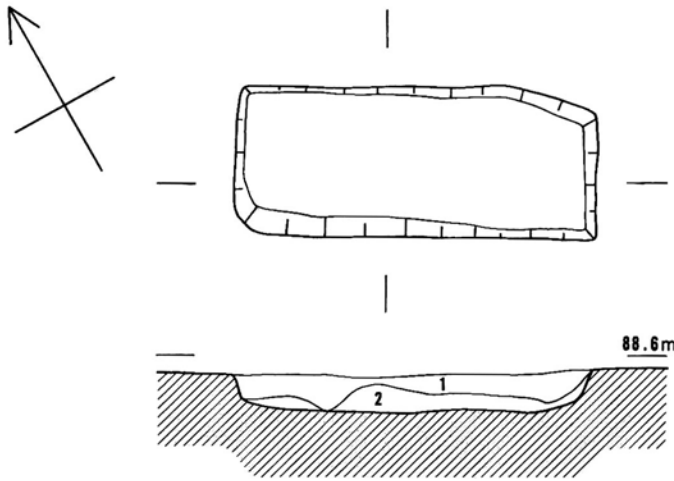
印路台状墓



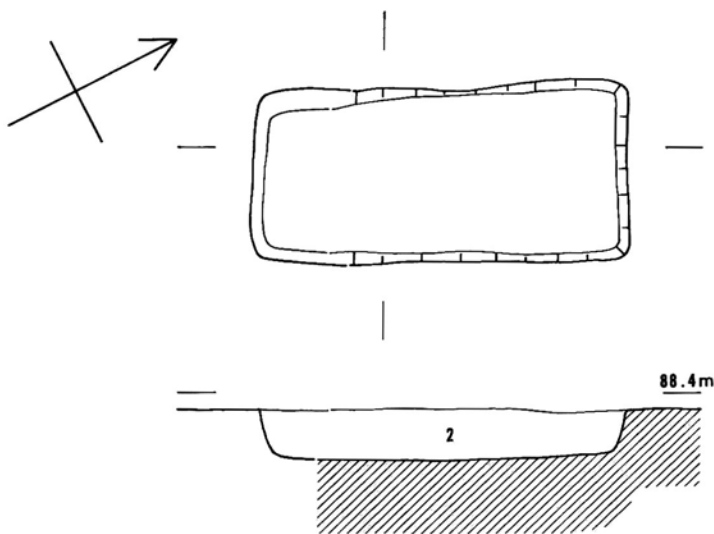
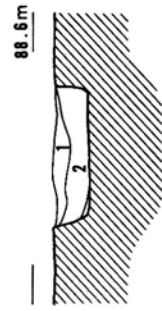
調査後地形測量図・断面図



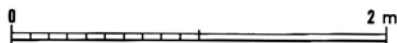
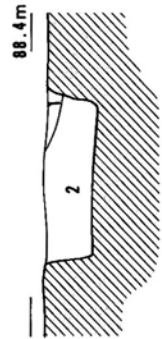
- 1. にぶい褐 中礫混り細砂
- 2. にぶい褐 シルト質細砂



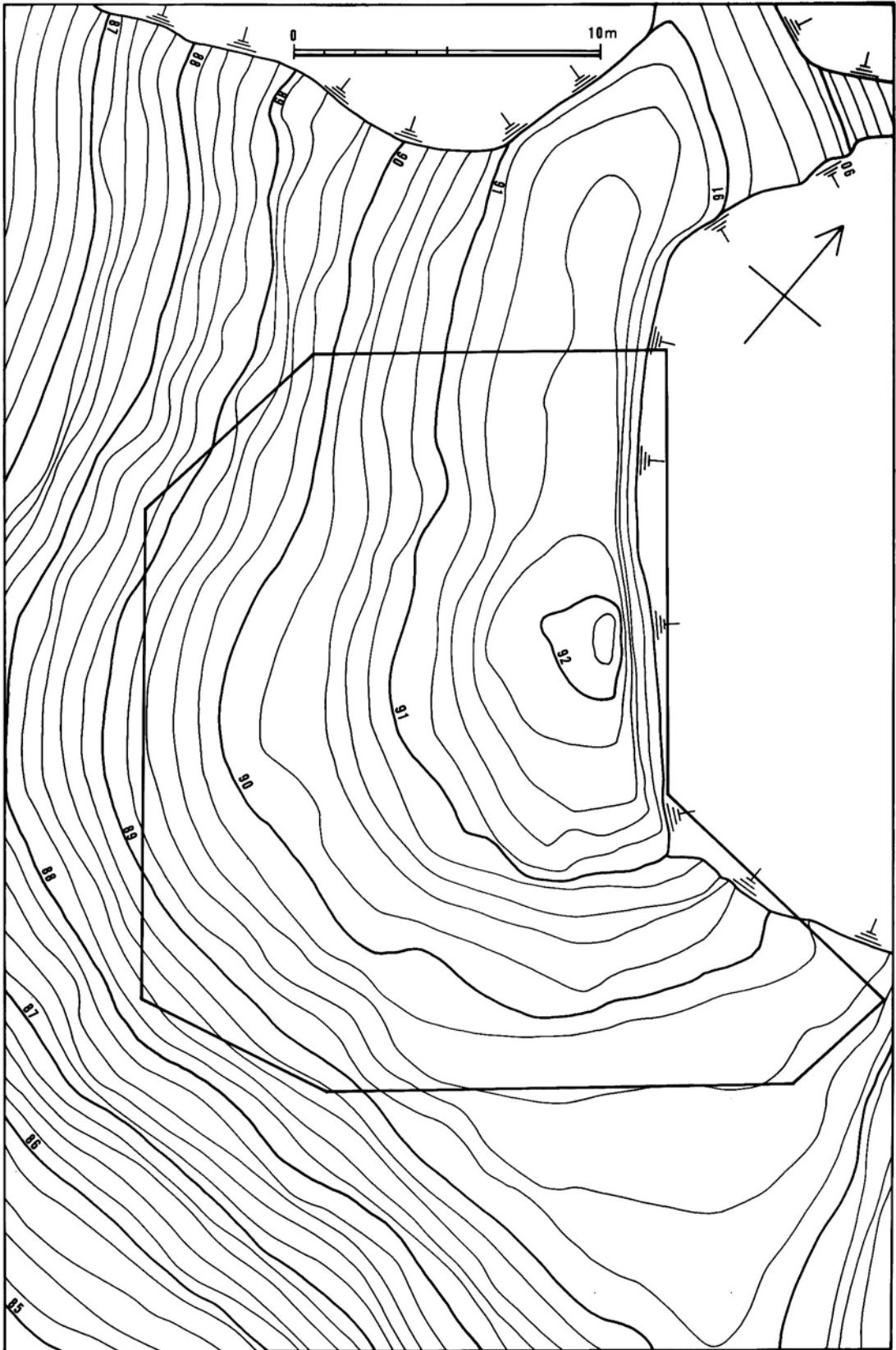
- 1. 橙 中礫混り細砂
- 2. 明黄褐 中砂



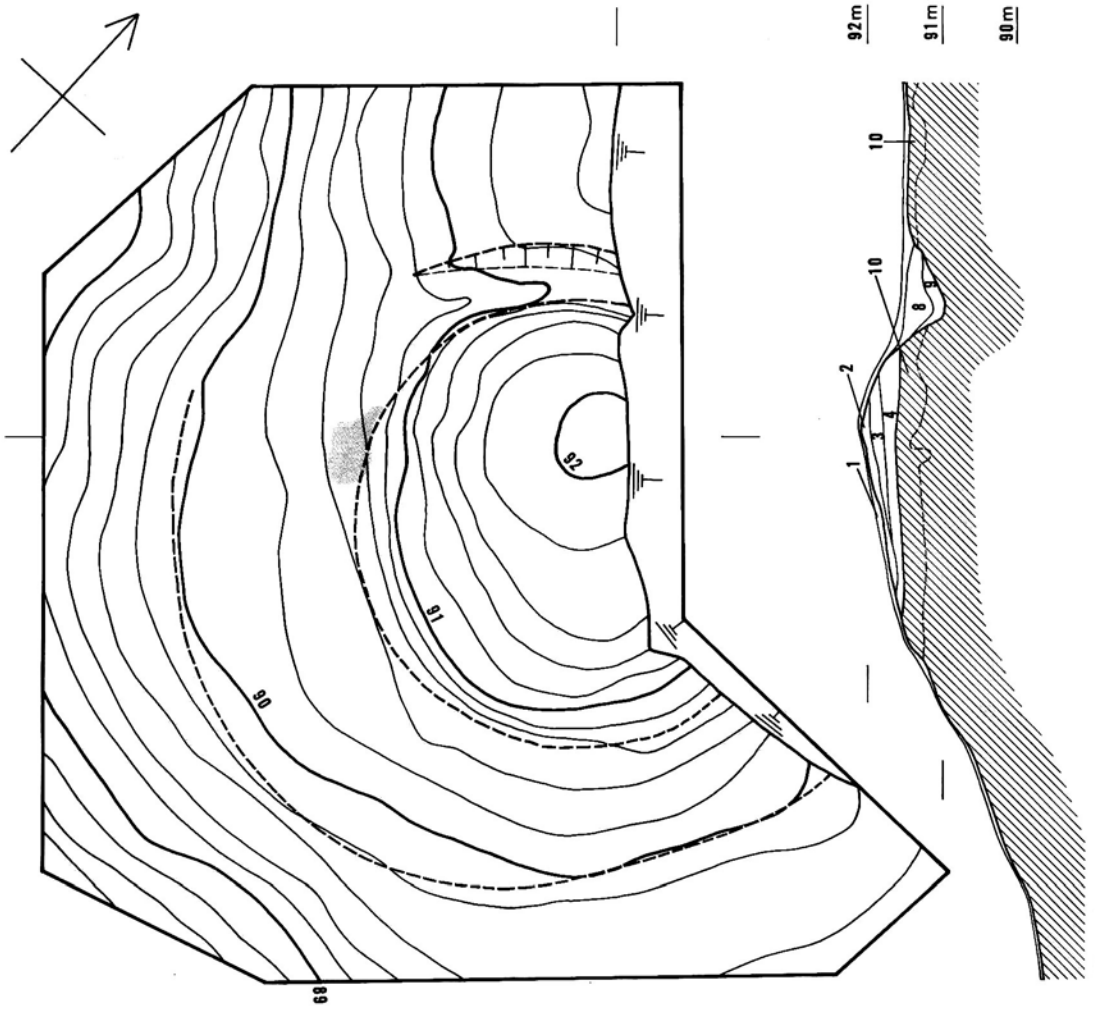
- 1. 橙 中礫混り細砂
- 2. 橙 シルト質細砂



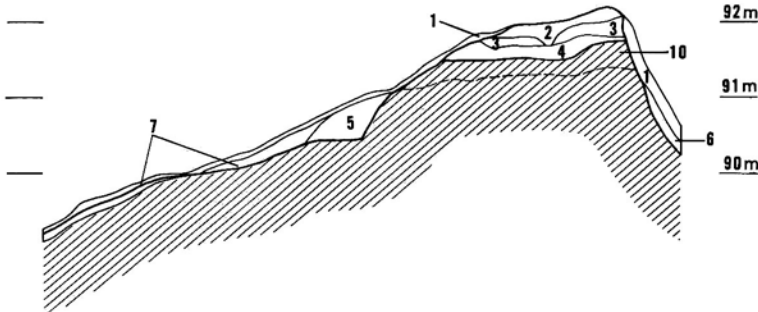
上 第1号埋葬施設平面・断面図
 中 第2号埋葬施設平面・断面図
 下 第3号埋葬施設平面・断面図



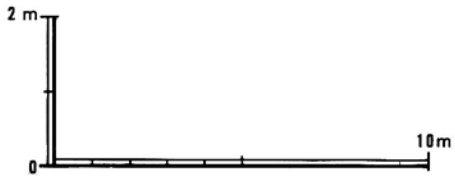
調査前地形測量図



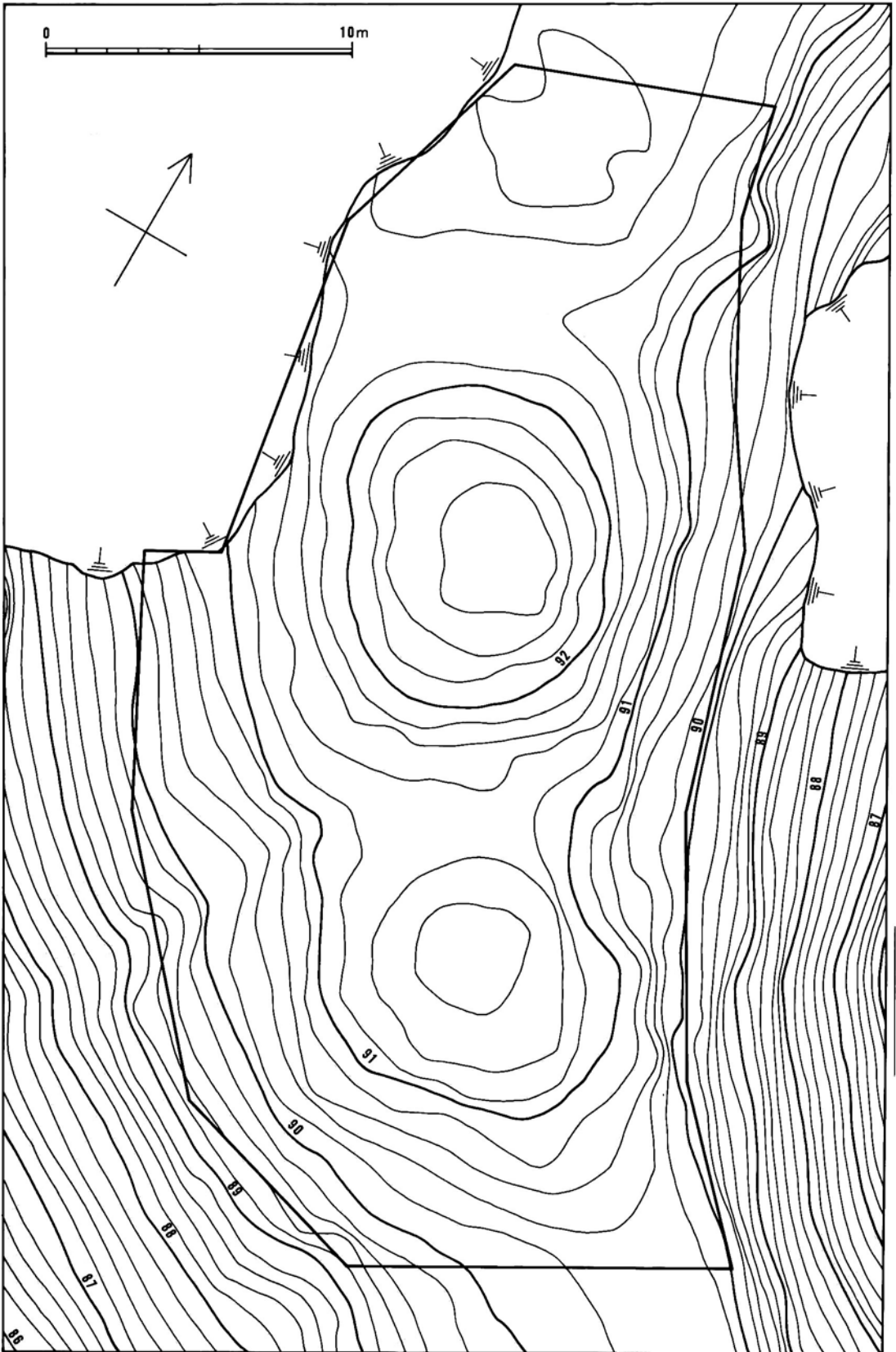
印路C-1



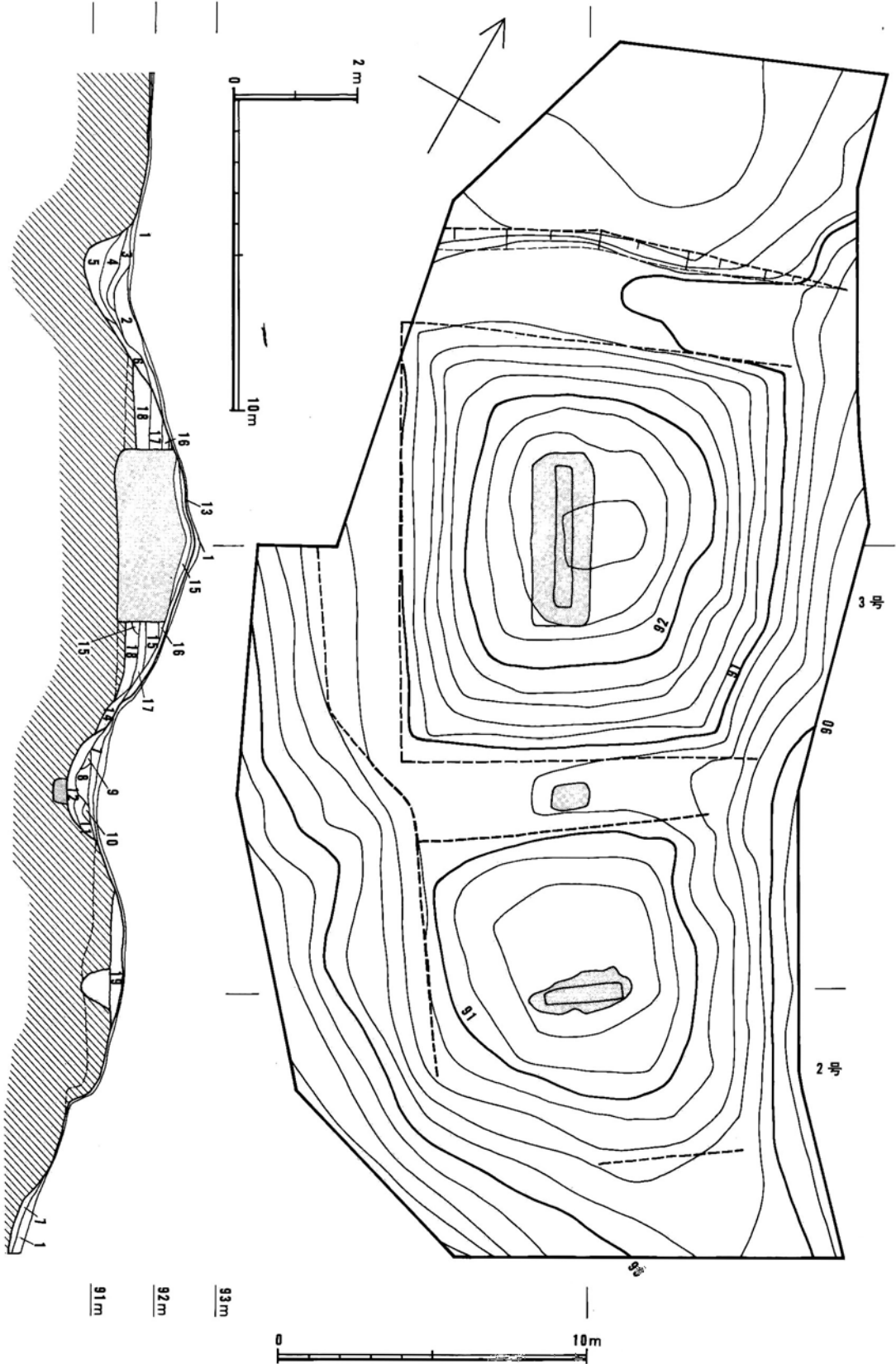
- 1. 衛食土
- 2. 明赤褐色 シルト
- 3. 黄褐色 細砂
- 4. 黄褐色 シルト
- 5. 赤褐色 シルト(焼土混じり)
- 6. 橙色 シルト(礫混じり)
- 7. 黄褐色 細砂(粗砂・礫混じり)
- 8. 明黄褐色 細砂
- 9. 黄褐色 シルト
- 10. 黄褐色 細砂
- 焼土



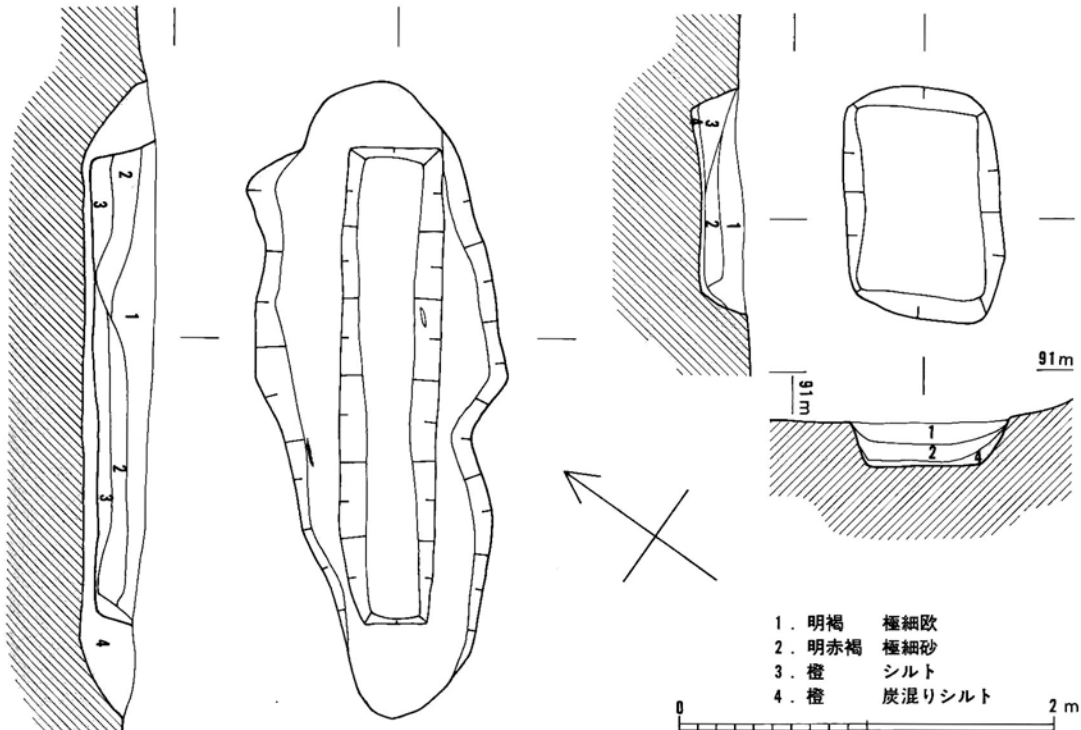
調査後地形測量図・墳丘断面図



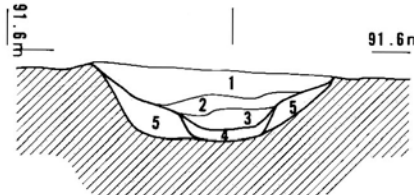
調査前地形測量図



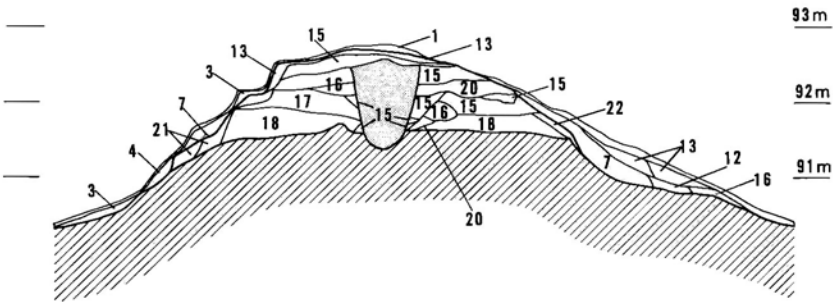
調査後地形測量図・墳丘断面図



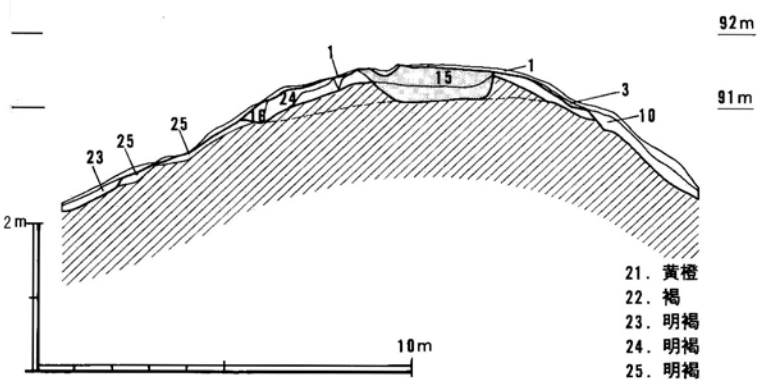
- 1. 明褐 極細砂
- 2. 明赤褐 極細砂
- 3. 橙 シルト
- 4. 橙 炭混りシルト



- 1. 黄橙 シルト
- 2. 黄橙 細砂まじりシルト (粘土ブロック含む)
- 3. 橙 シルト
- 4. 黄橙 粘土
- 5. 黄橙 シルト



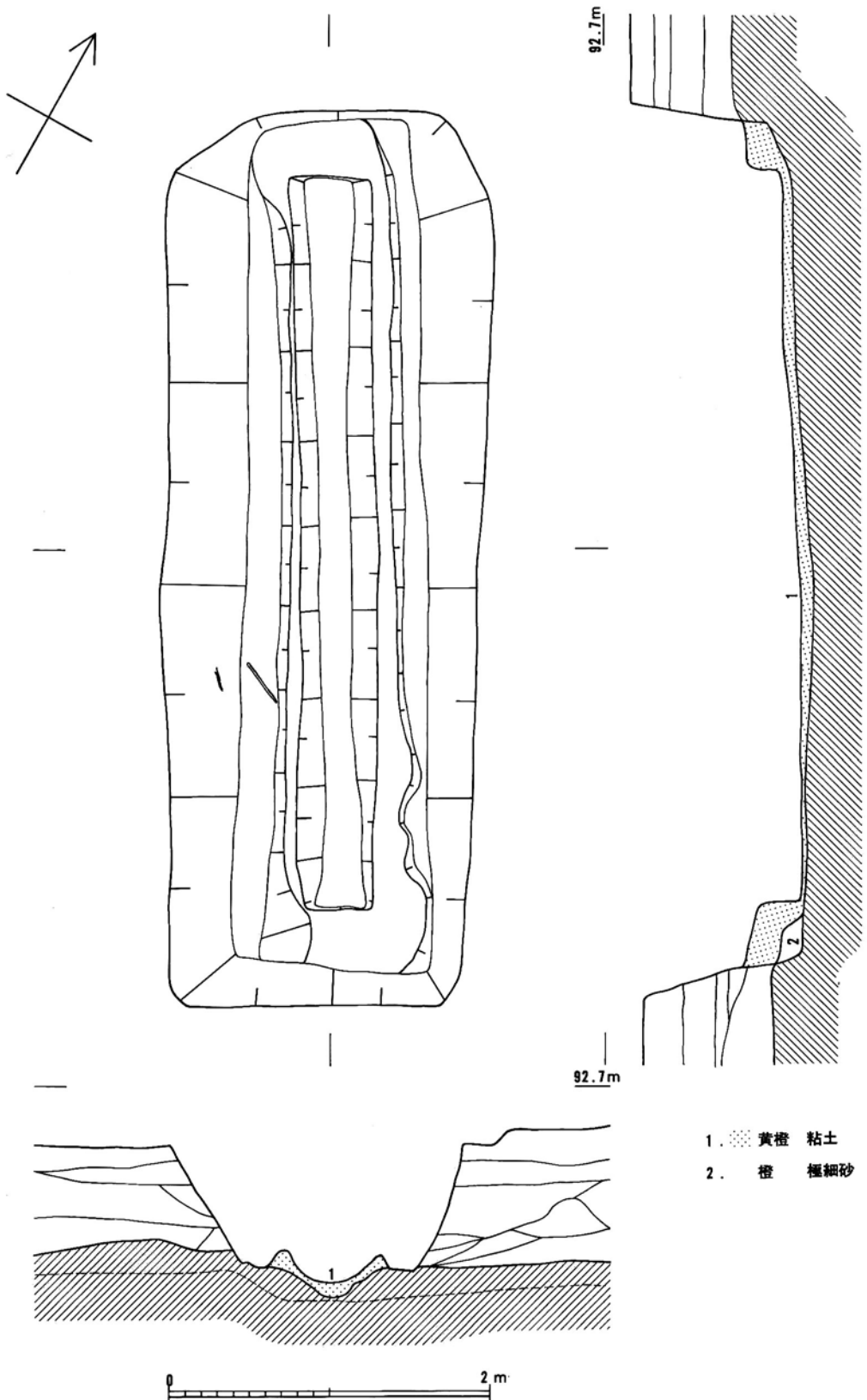
- 1. 表土
- 2. にぶい黄橙 細砂～中砂
- 3. 橙 細砂～中砂
- 4. 明褐 極細砂～細砂
- 5. 明褐 極細砂～細砂
- 6. 褐 極細砂～細砂
- 7. 褐 極細砂
- 8. 明褐 極細砂～細砂
- 9. 明黄褐 細砂～中砂
- 10. 明赤褐 極細砂
- 11. 明褐 細砂混りシルト
- 12. 明褐 礫混りシルト
- 13. 黄橙 極細砂
- 14. 黄橙 極細砂
- 15. 橙 シルト
- 16. 橙 極細砂
- 17. 明黄褐 極細砂
- 18. 明黄褐 炭混り極細砂
- 19. 黄橙 シルト
- 20. にぶい黄橙 シルト



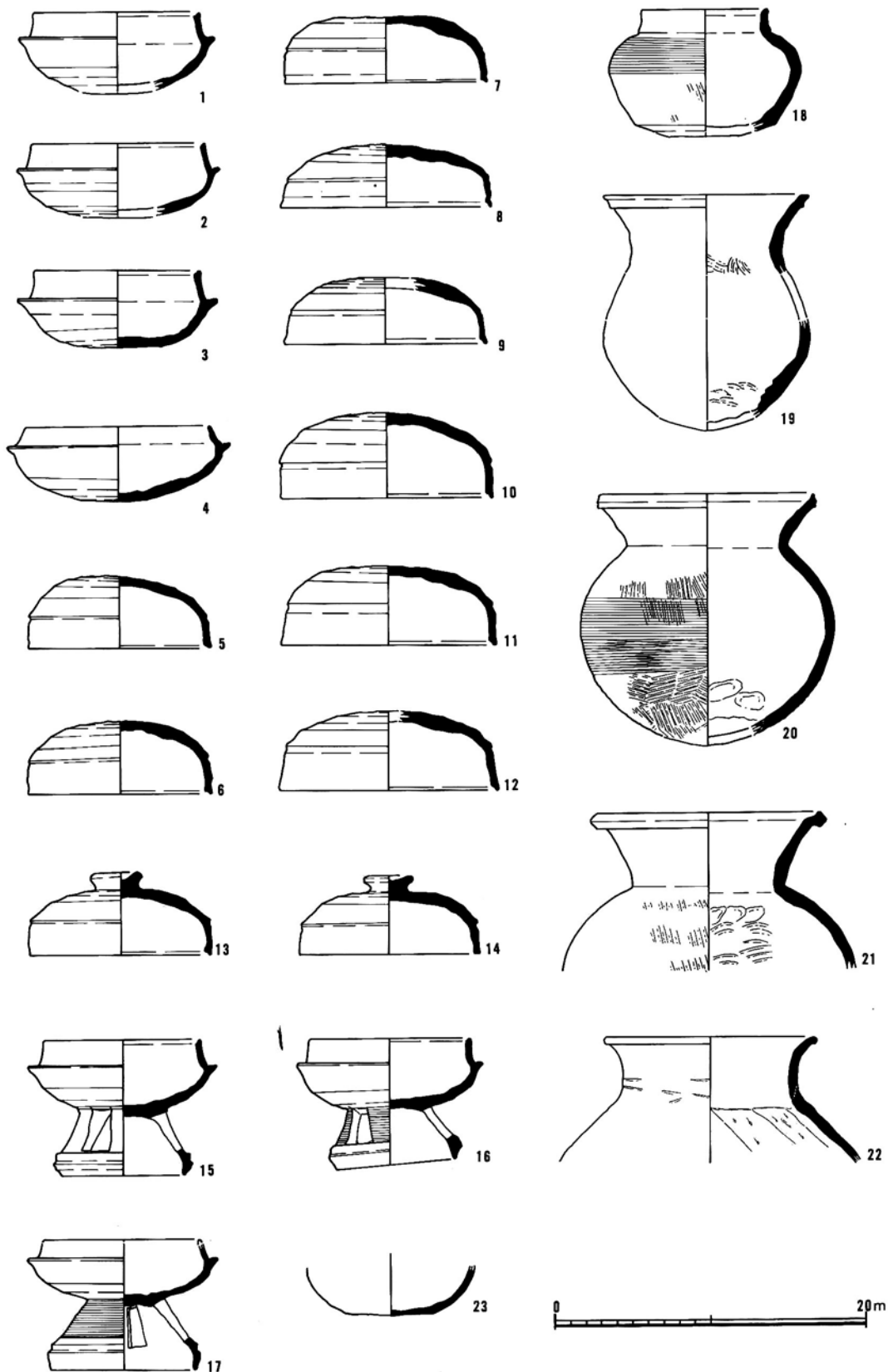
- 21. 黄橙 極細砂
- 22. 褐 極細砂
- 23. 明褐 細砂
- 24. 明褐 細砂
- 25. 明褐 シルト

印路 C
2・3

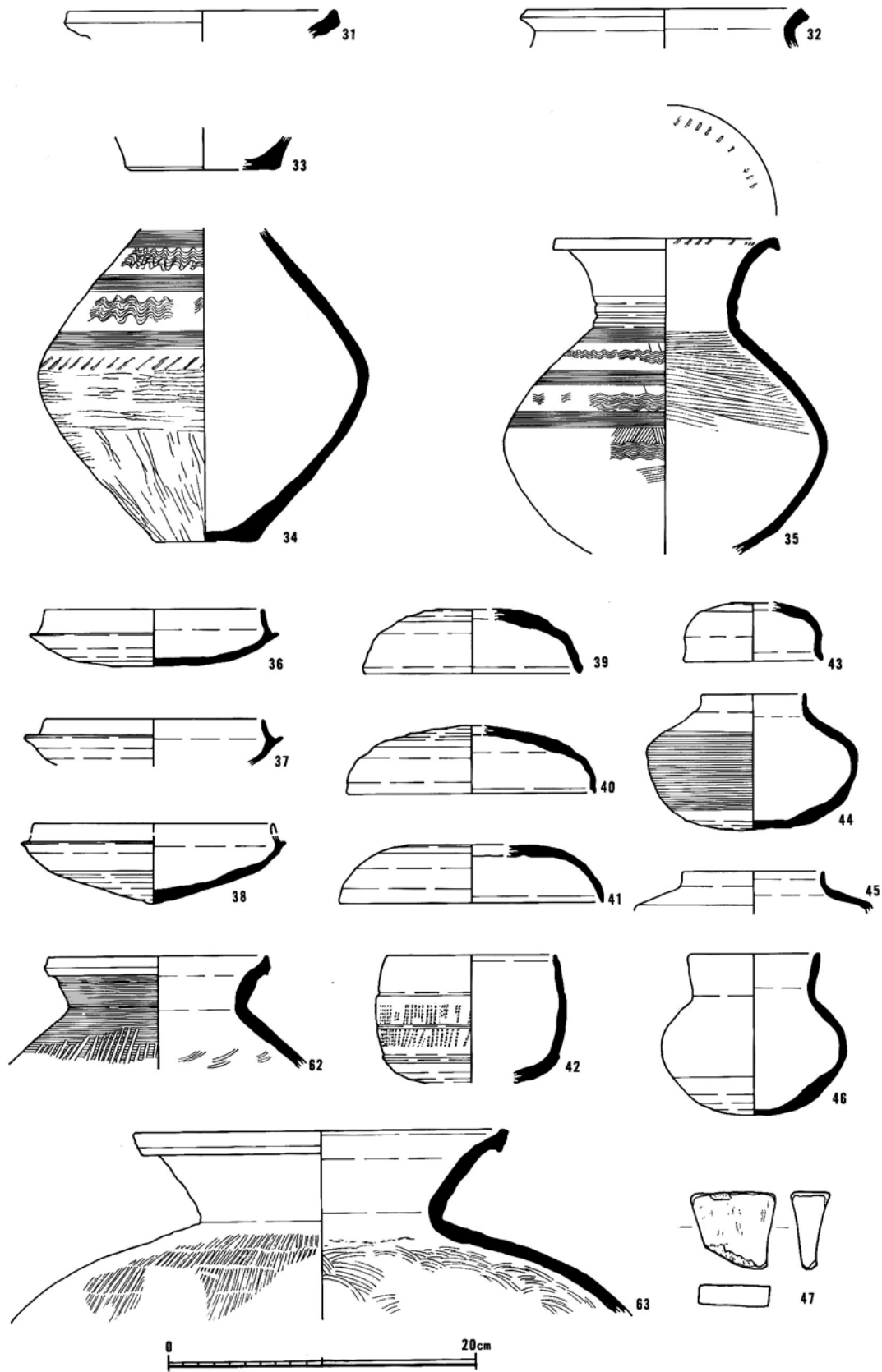
右 C-2号墳 埋葬施設平面・断面図
 左 C-2・3号墳 土坑平面・断面図
 下 C-2・3号墳 墳丘断面図平面・断面図



C-3号墳 埋葬施設平面図・断面図



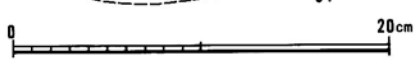
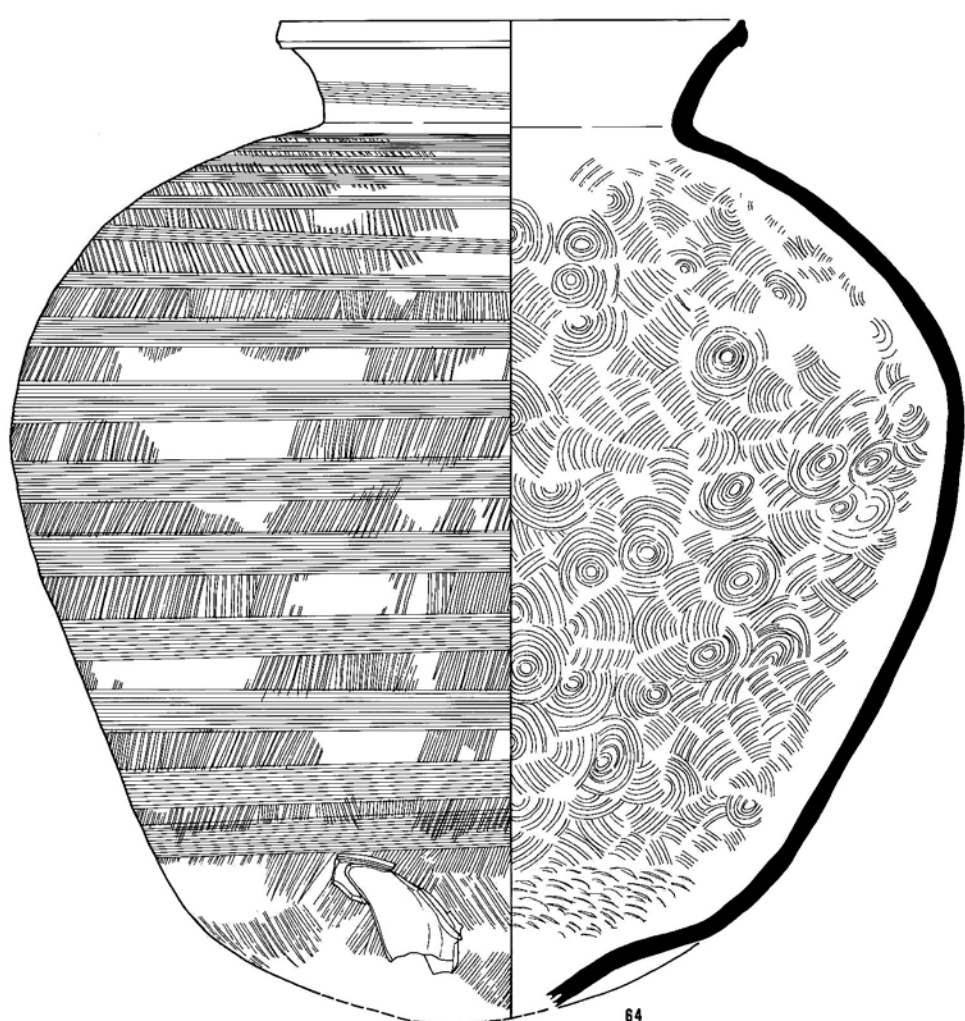
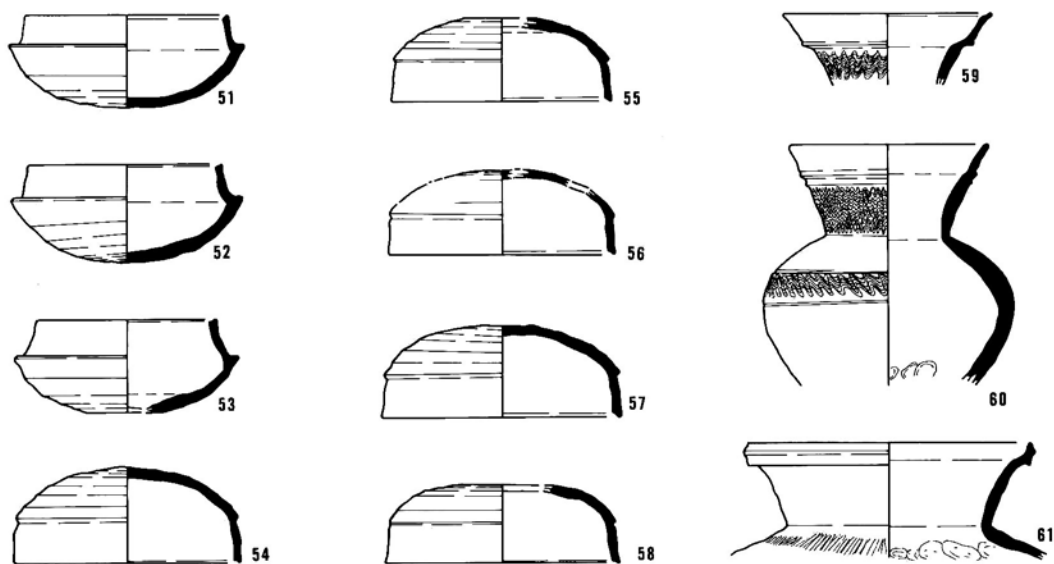
土器類



印路台状墓

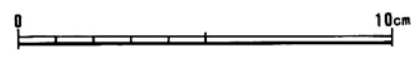
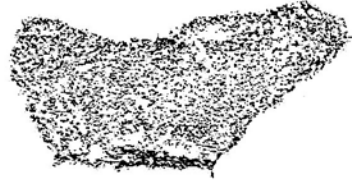
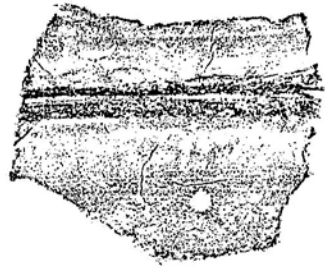
印路C-1

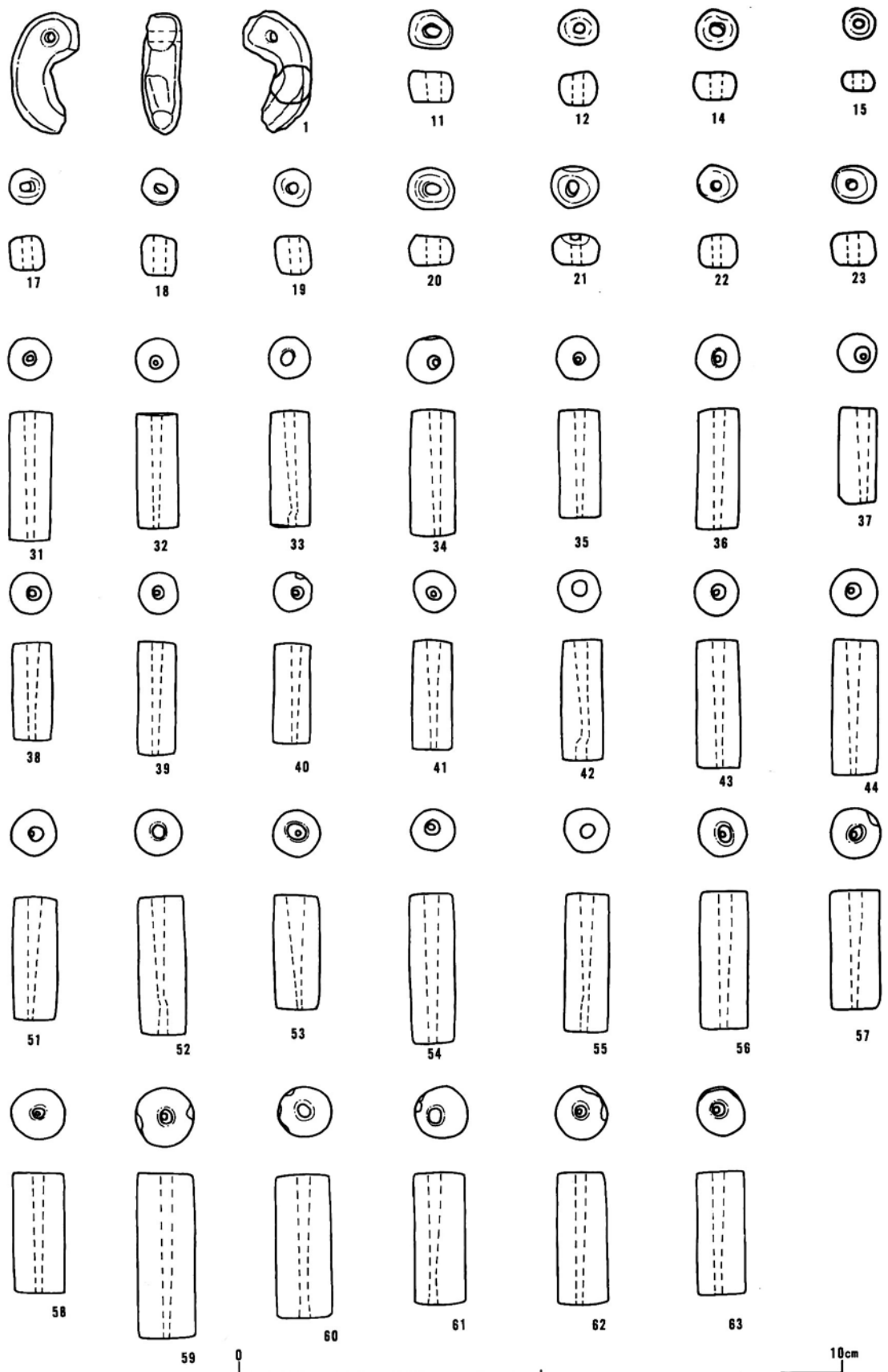
印路台状墓 土器類・砥石(31~47)
 印路C-1 土器類(62・63)



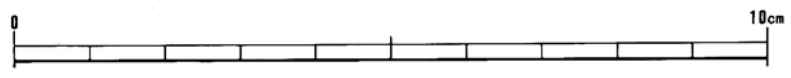
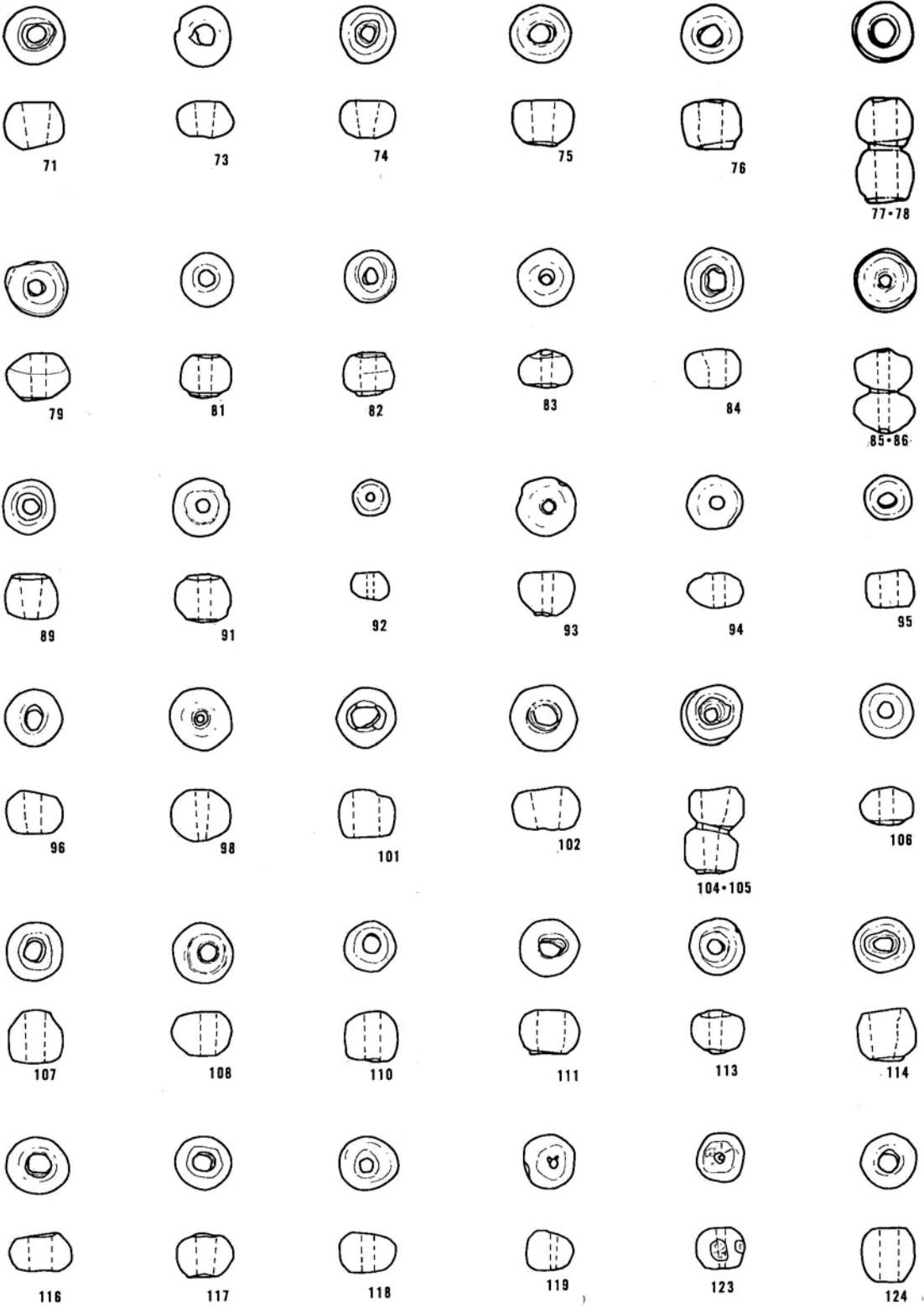
土器類

印路C-1

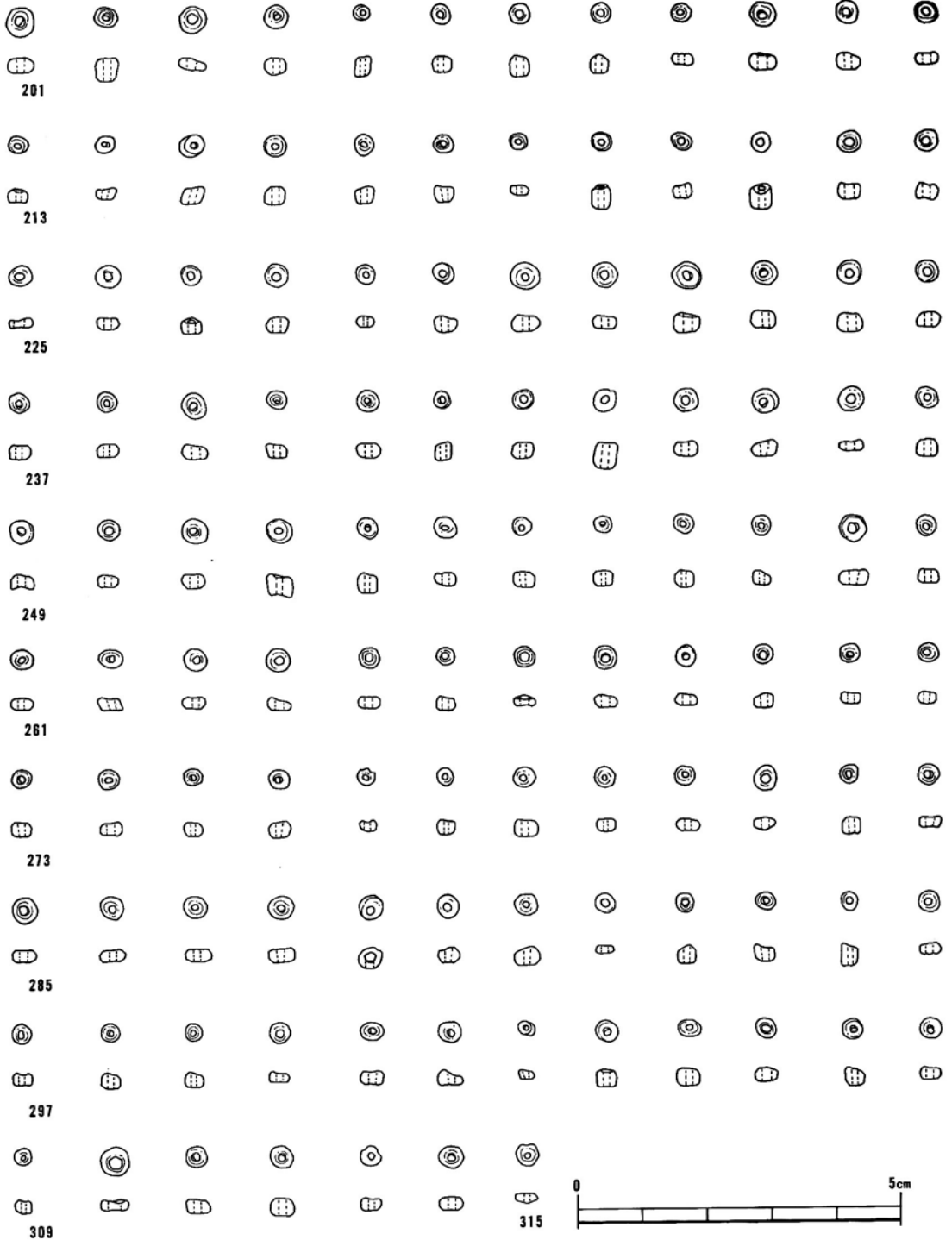


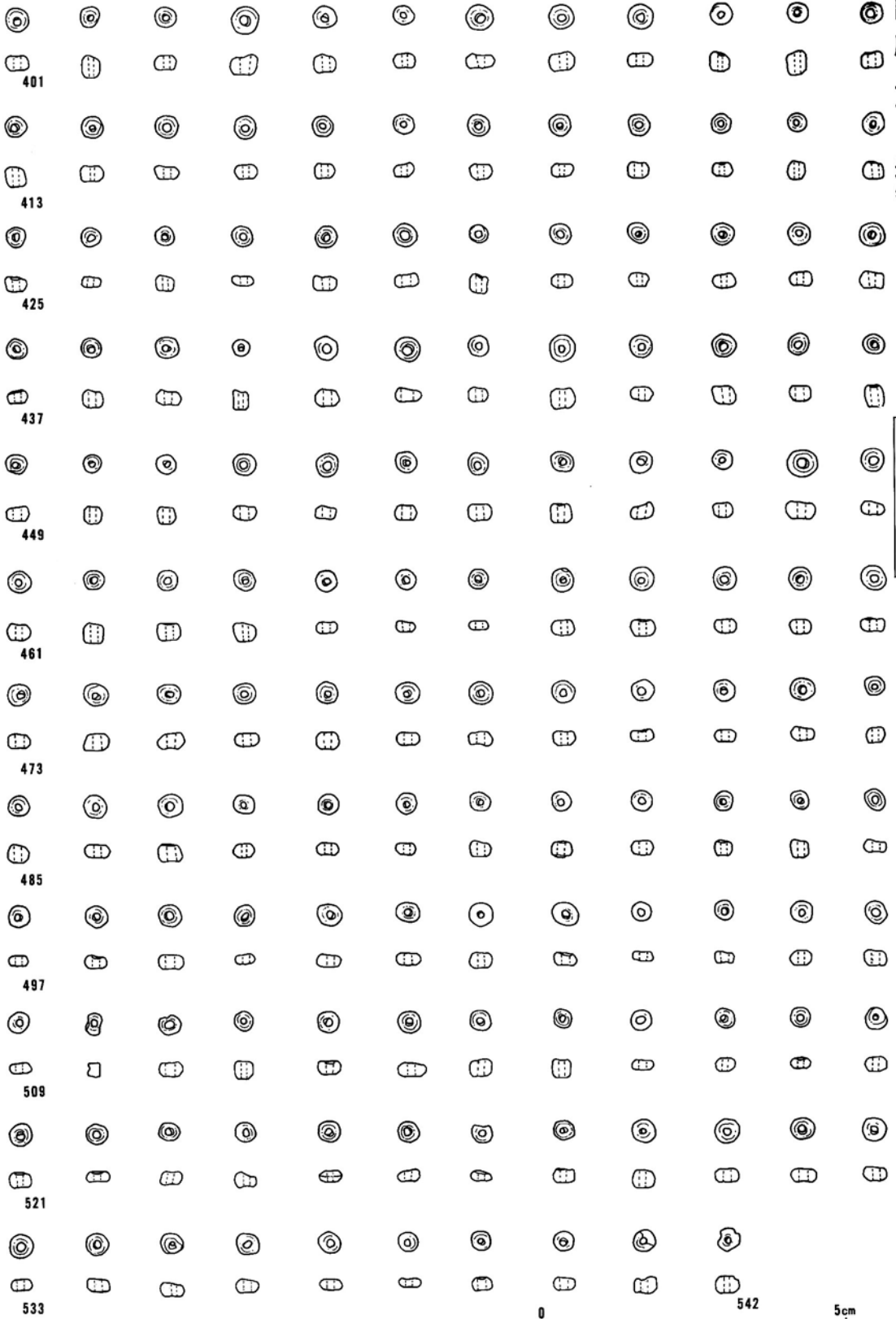


第1号墳第1・4号埋葬施設玉類



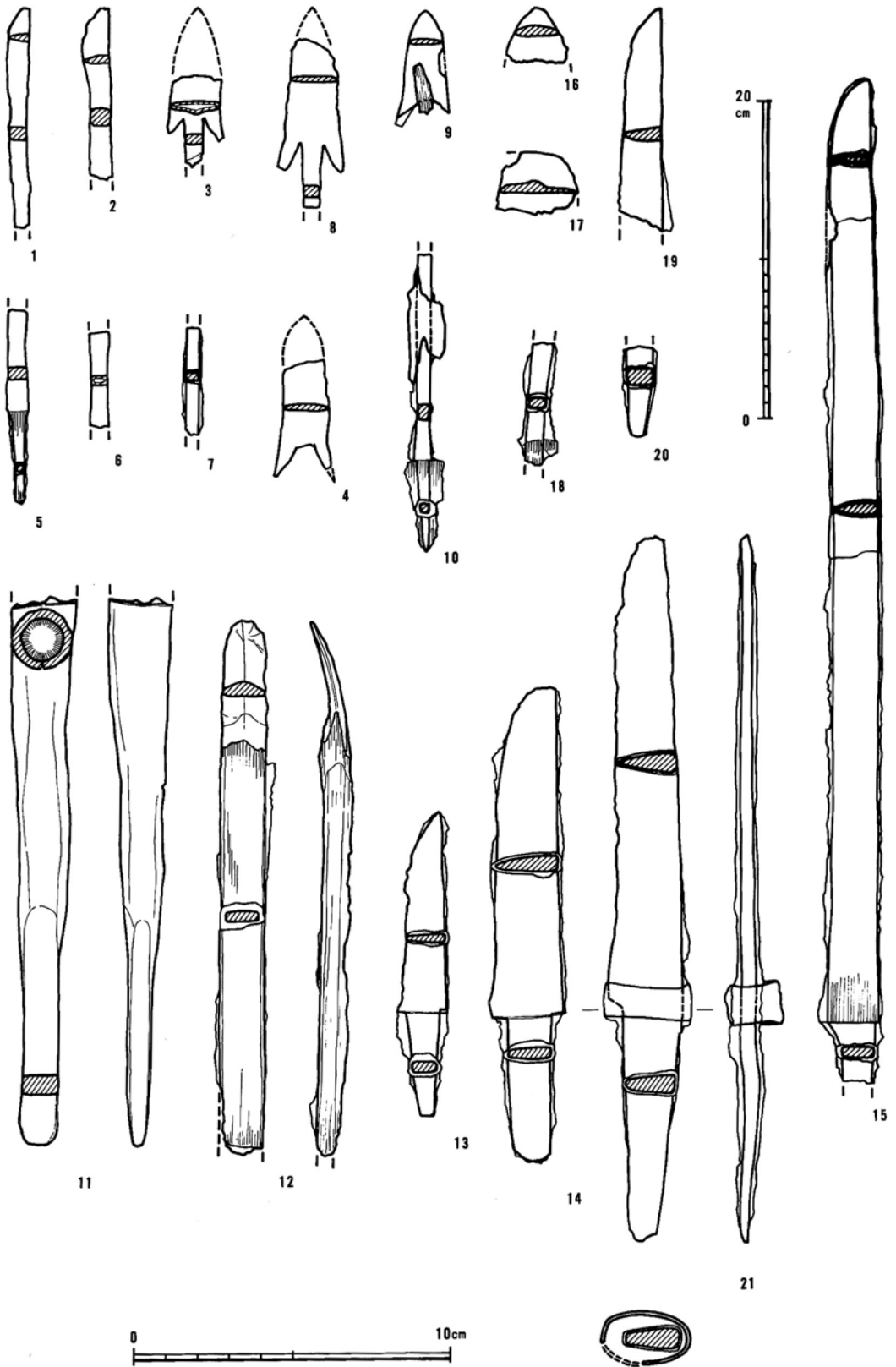
第4号埋葬施設丸玉



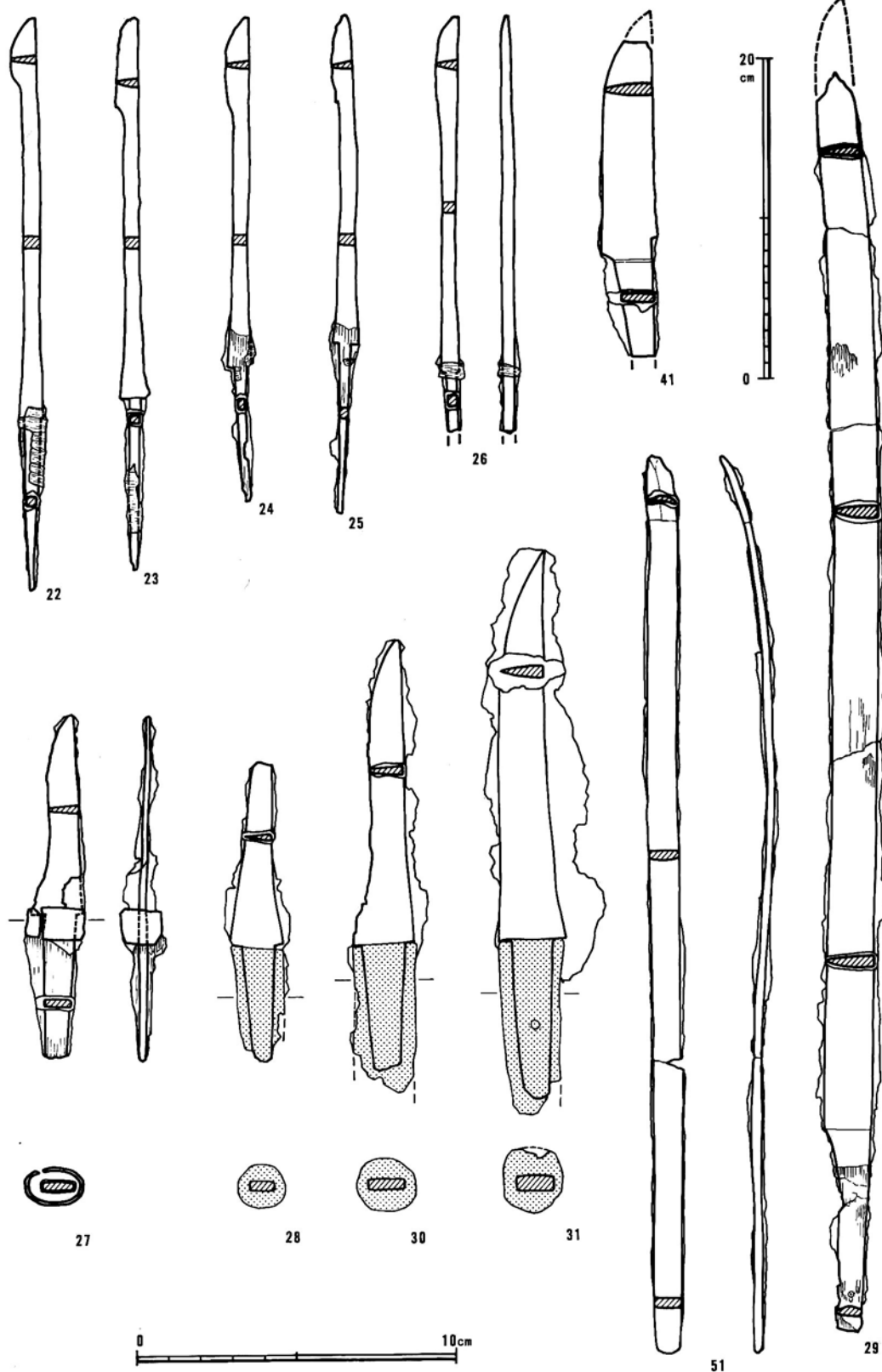


下大谷古墳群

第4号埋葬施設小玉



第1号墳第1・2号埋葬施設鉄製品



第1号墳第3・4号埋葬施設鉄製品
C-第2・3号墳 鉄製品(41・51)



1. 古墳群全景(南東から)



2. 下大谷古墳群全景(北西から)



1. 印路台状墓・印路古墳群C全景(北から)



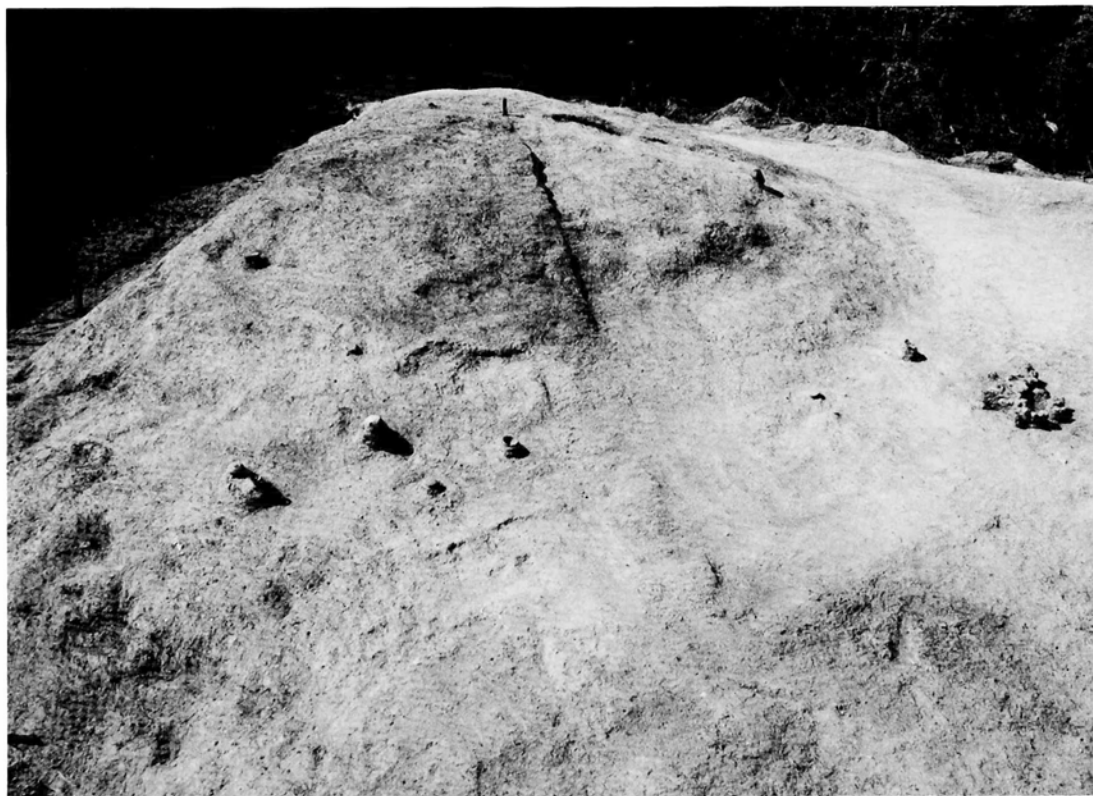
2. 印路台状墓・印路古墳群C全景(北東から)



1. 第1号墳上層全景(北から)



2. 第2号墳全景(南から)



1. 遺物出土状況(南東から)



2. 遺物出土状況(東から)



1. 第1号墳第1・2号埋葬施設(東から)



2. 第1号墳第1号埋葬施設(北から)



1. 第1号墳第1号埋葬施設玉出土状況(東から)



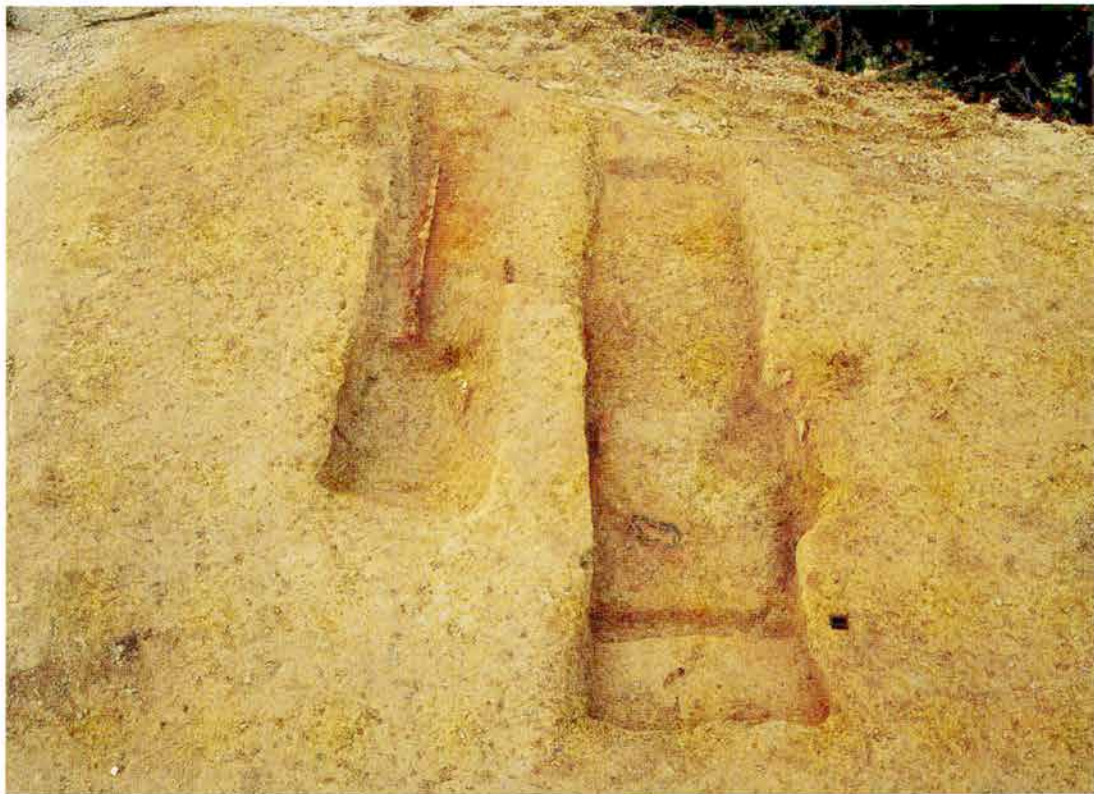
2. 第1号墳第1号埋葬施設鉄器出土状況(東から)



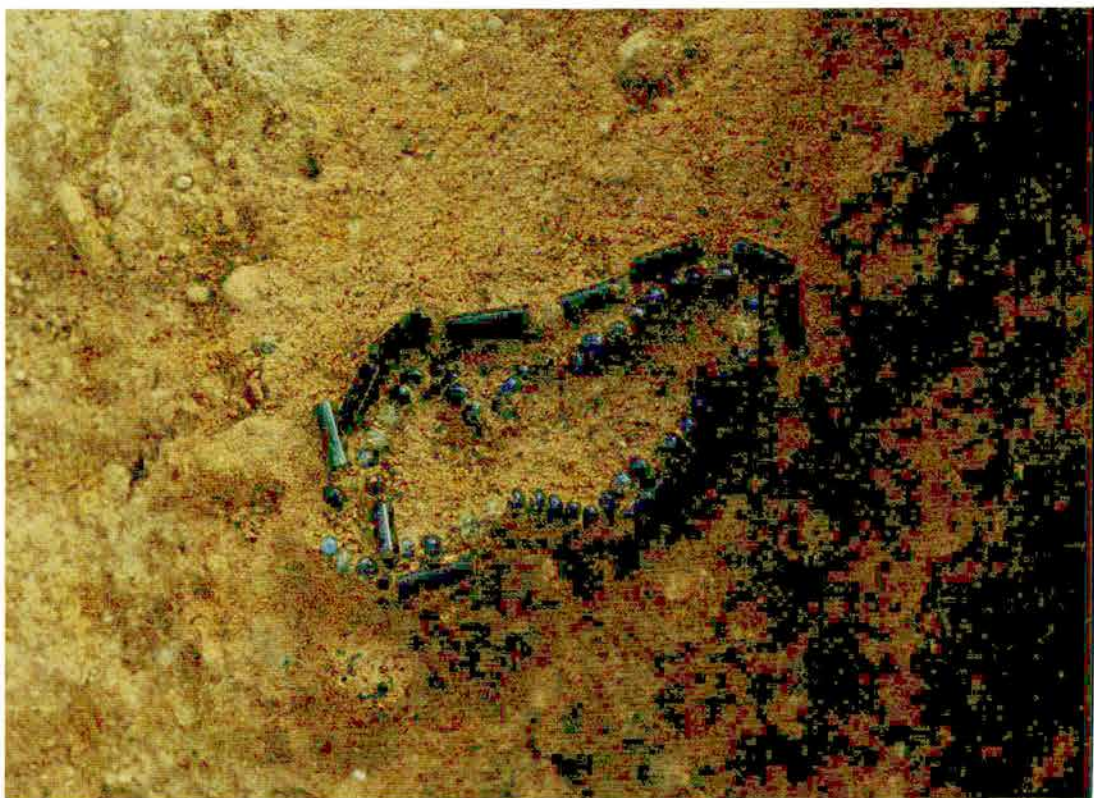
1. 第1号墳下層全景(北から)



2. 第1号墳第3・4号埋葬施設(北から)



1. 第1号墳第3・4号埋葬施設(東から)



2. 第1号墳第4号埋葬施設玉出土状況(東から)



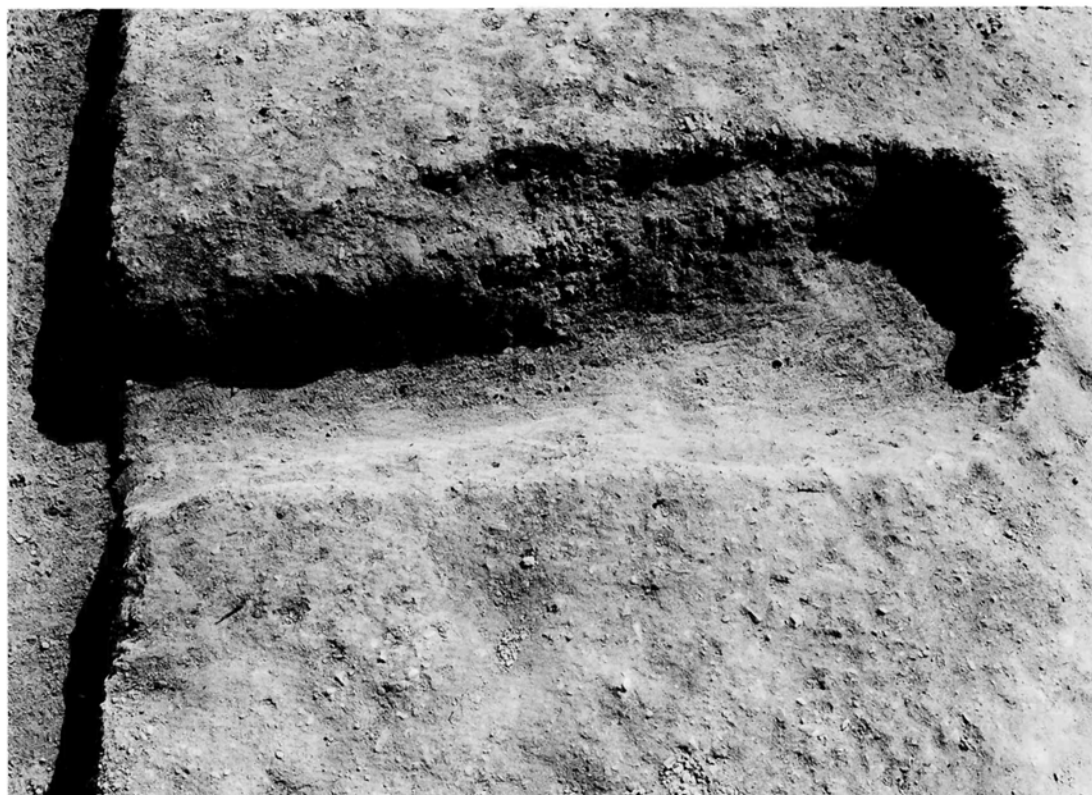
1. 調査前(北西から)



2. 全景(北西から)



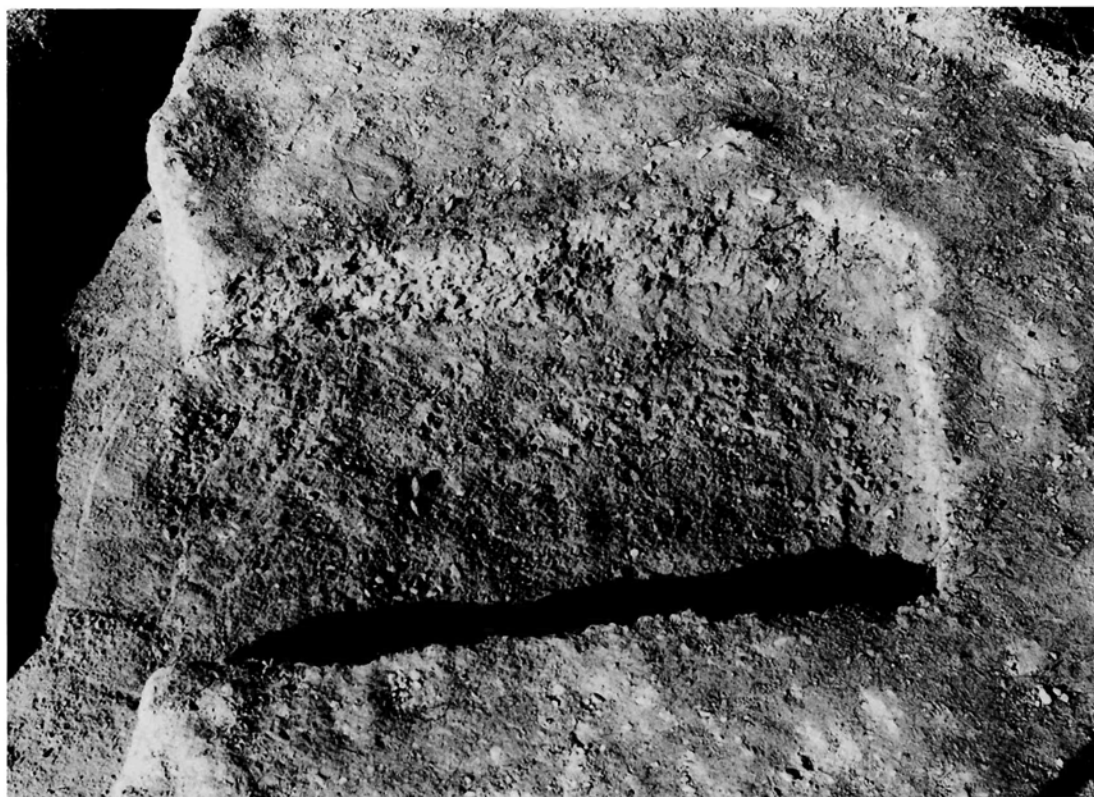
1. 第1・2号埋葬施設(北西から)



2. 第1号埋葬施設(北西から)



1. 第2号埋葬施設(北東から)



2. 第3号埋葬施設(南東から)



1. 溝土層断面(南西から)



2. 南テラス土器出土状況(東から)



1. 全景(北東から)



2. 全景(北西から)



1. 周溝断面・遺物出土状況(南西から)



2. 遺物出土状況(西から)



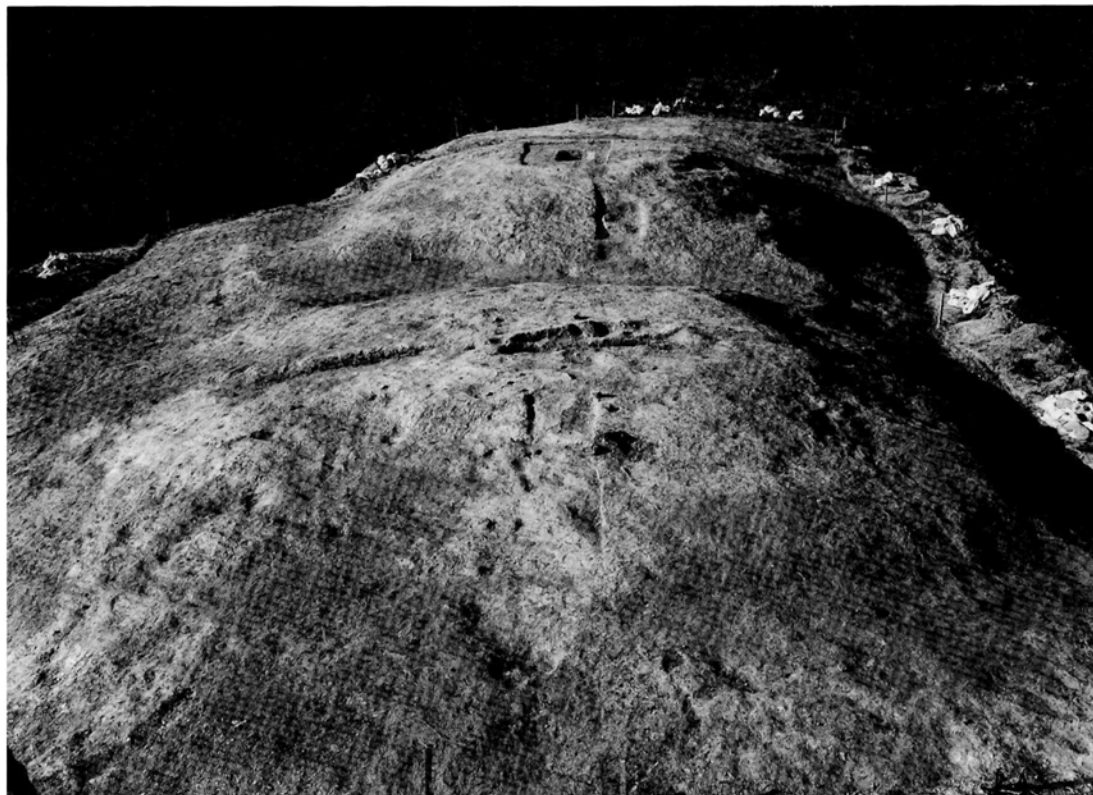
1. 調査前(北西から)



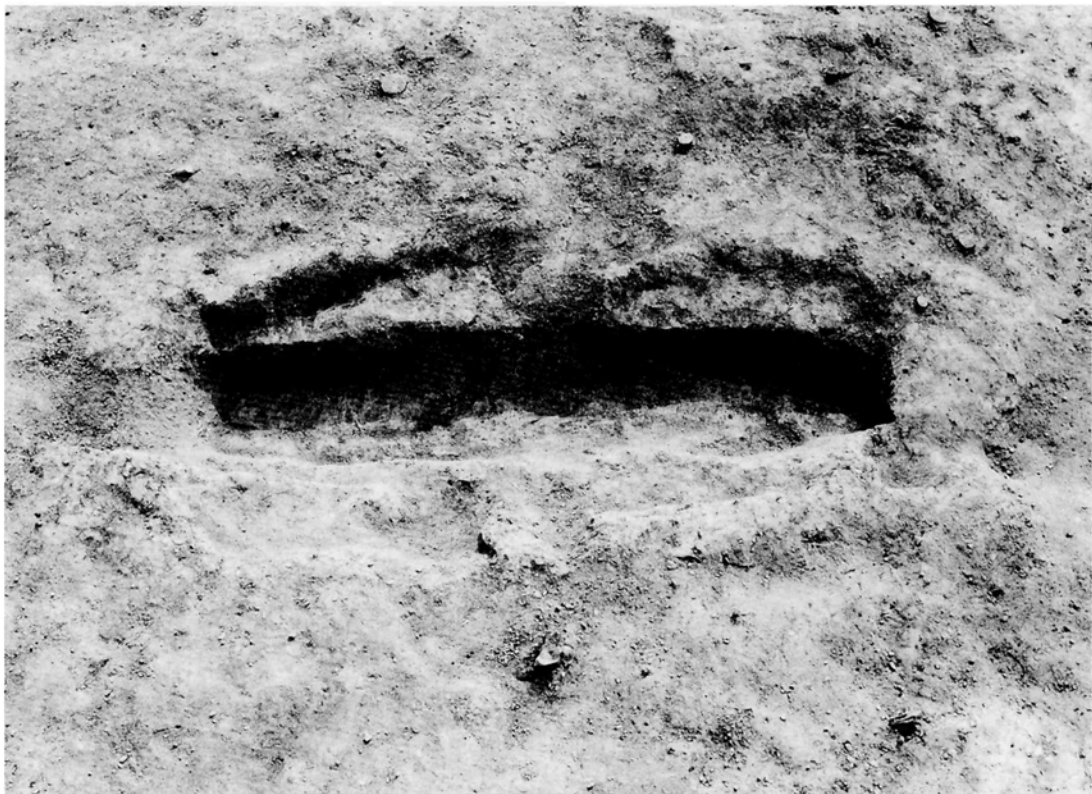
2. 墳丘(北西から)



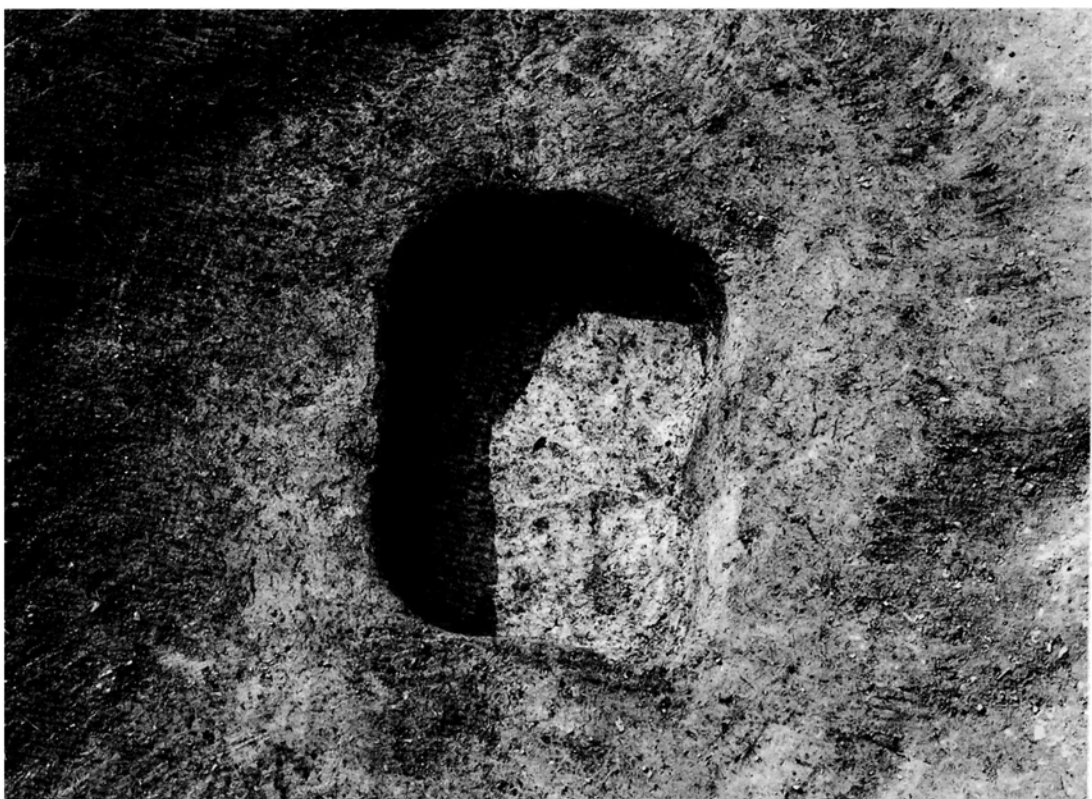
1. 墳丘(北西から)



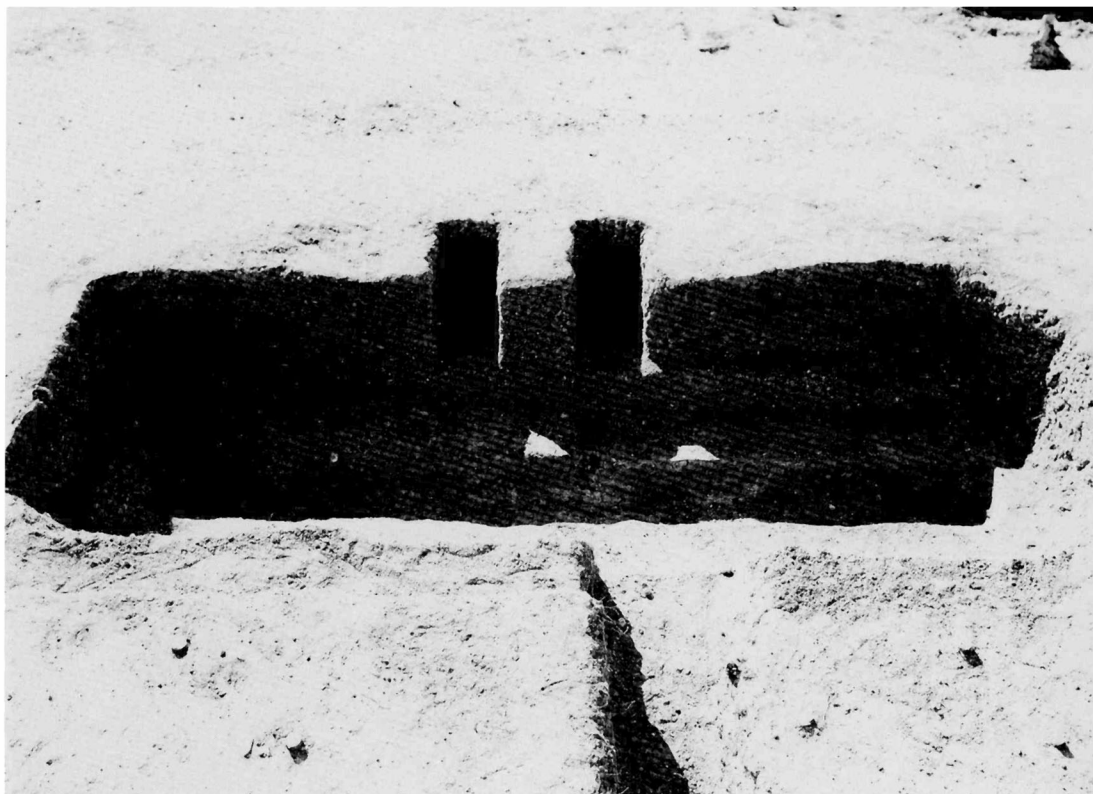
2. 墳丘(南東から)



1. C-第2号墳 埋葬施設(南東から)



2. C-第2・3号墳間 土坑(北東から)



1. C-第3号墳 埋葬施設(南西から)



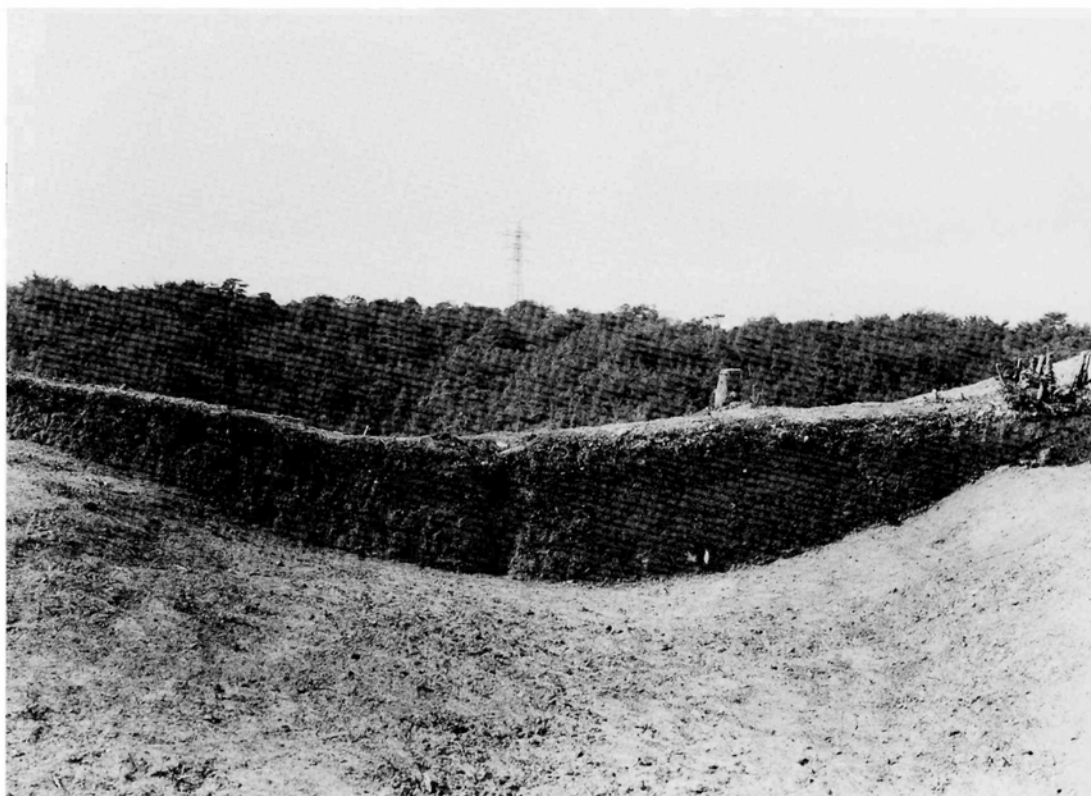
2. C-第3号墳 埋葬施設(南東から)



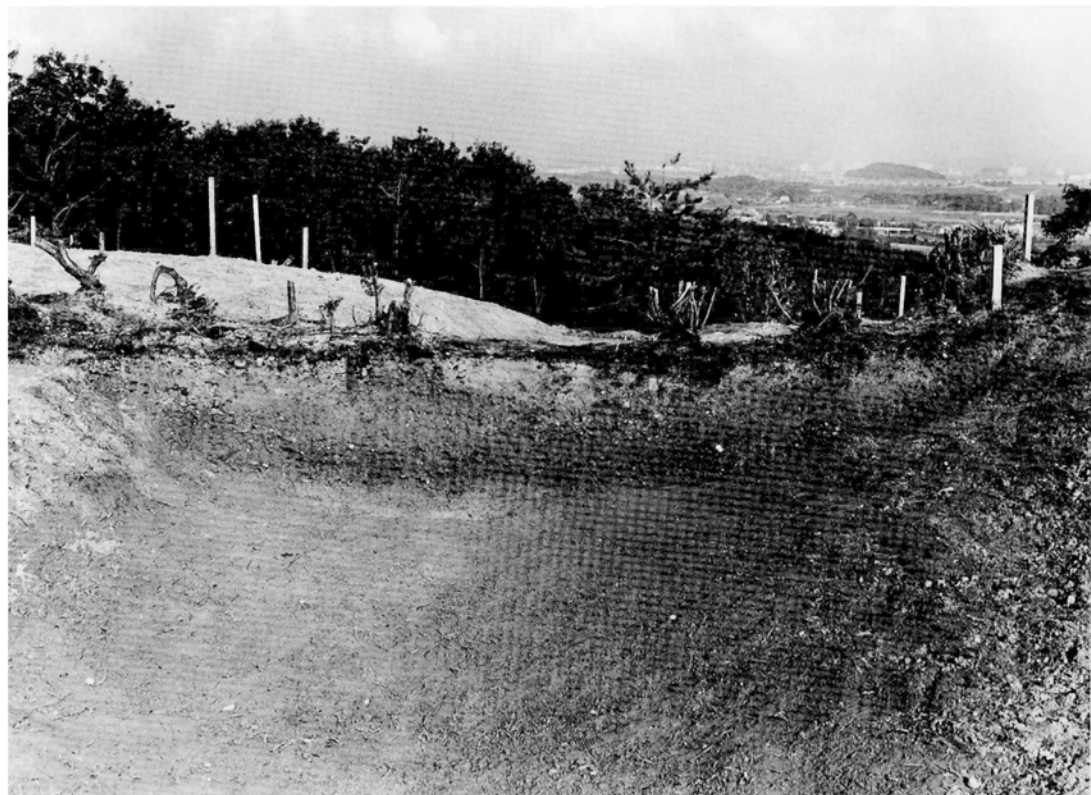
1. C-第3号墳 埋葬施設断割り状況(西から)



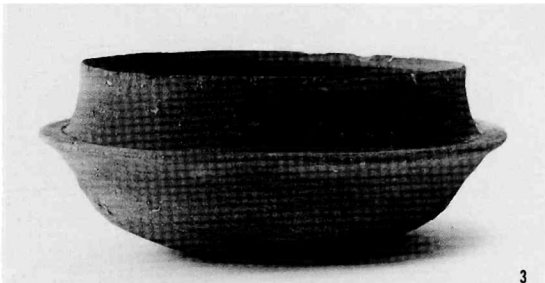
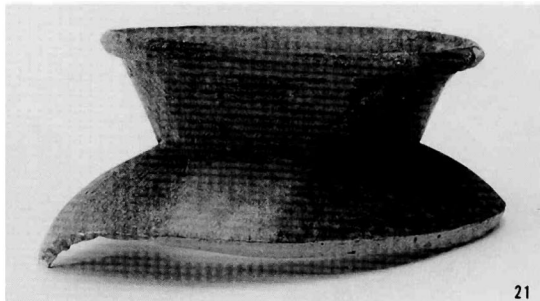
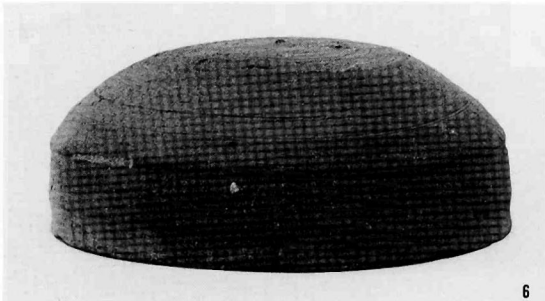
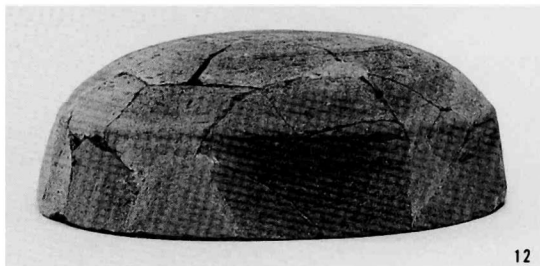
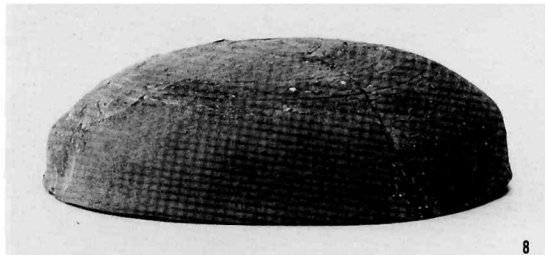
2. C-第3号墳 鉄製品出土状況(南西から)

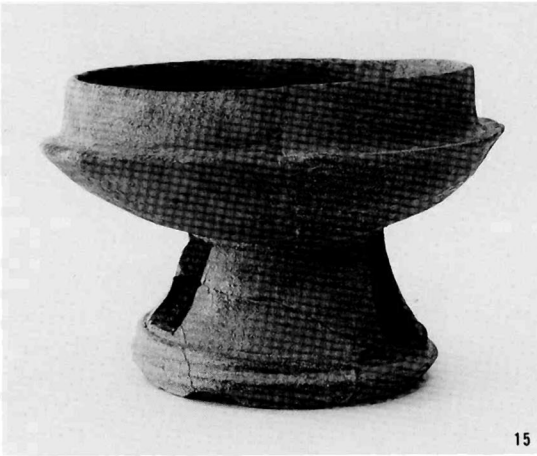
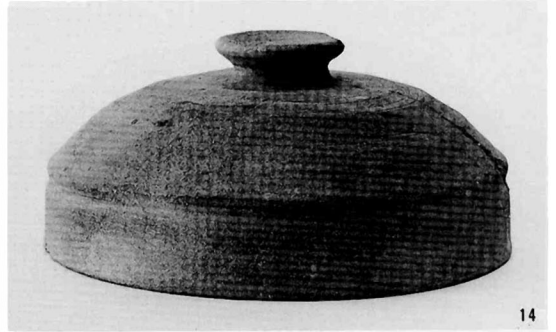


1. C-第2・3号墳間 周溝断面(南西から)

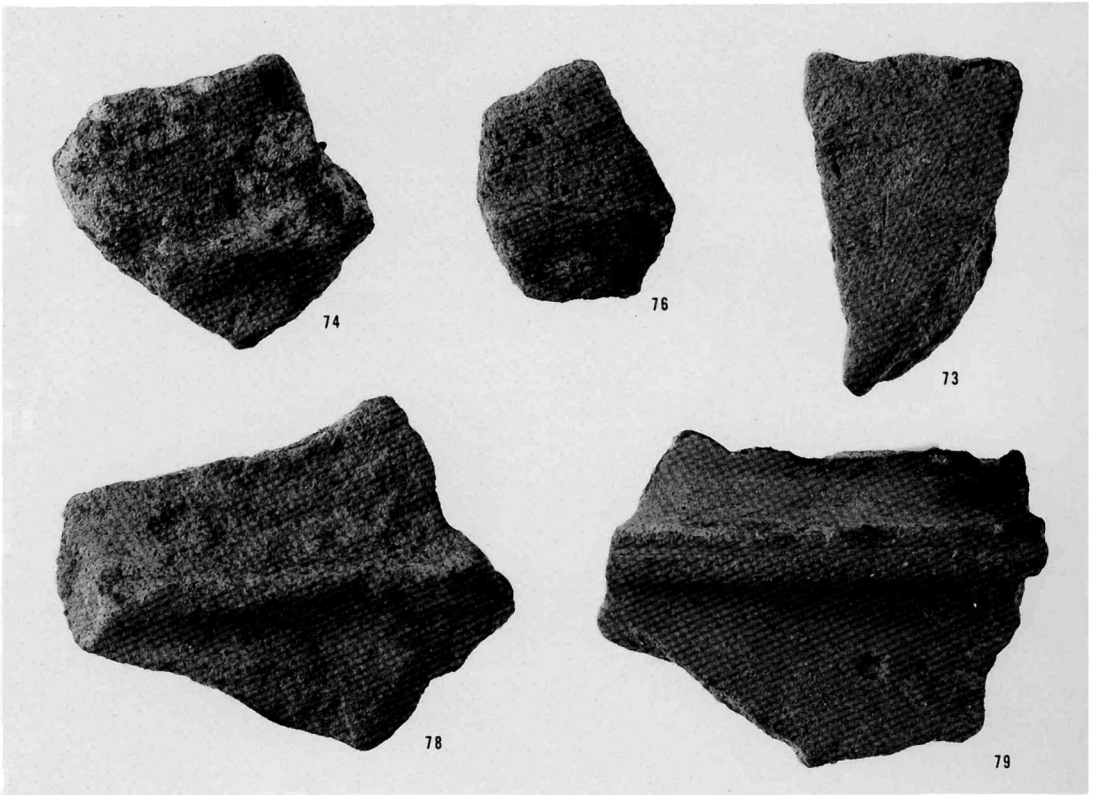


2. C-第3号墳 北周溝断面(南西から)

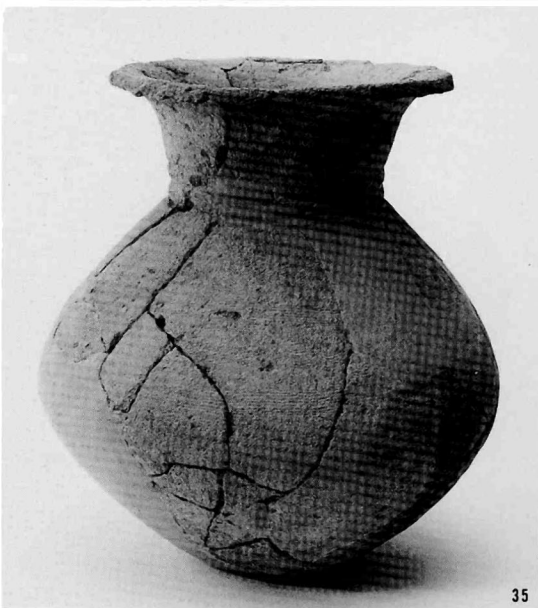
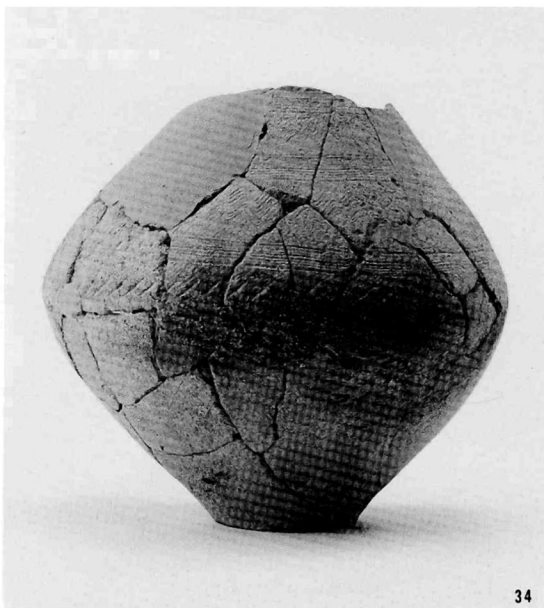
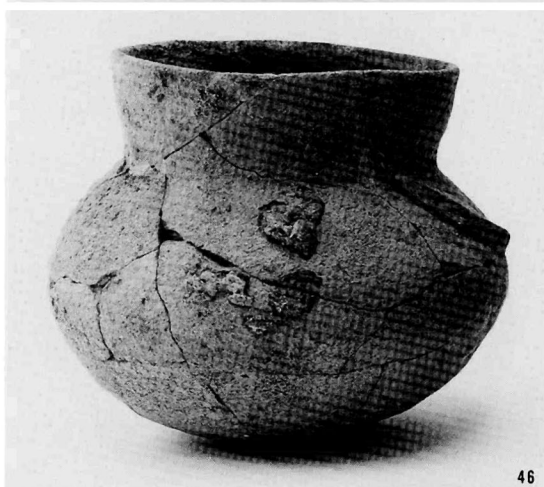
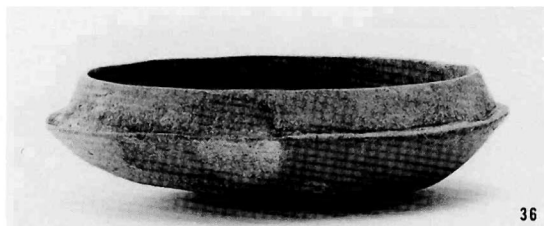


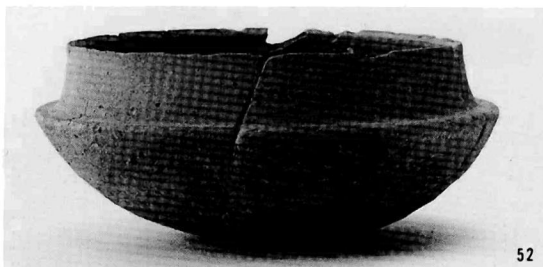


1. 土器類



2. 埴輪

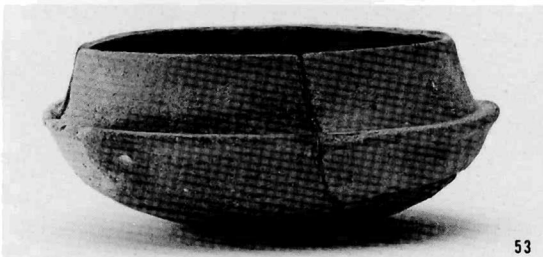




52



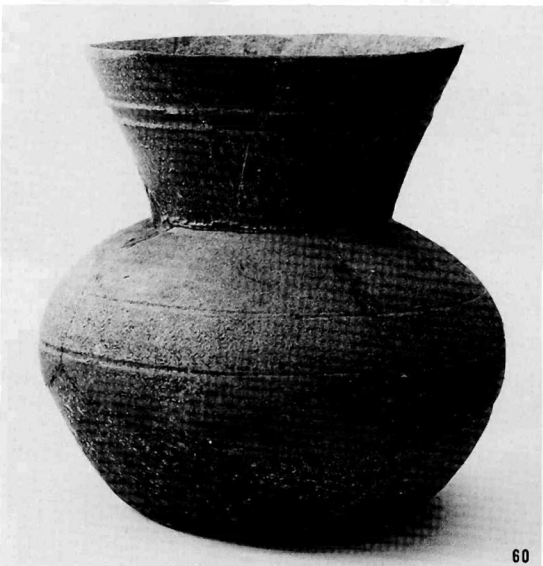
56



53



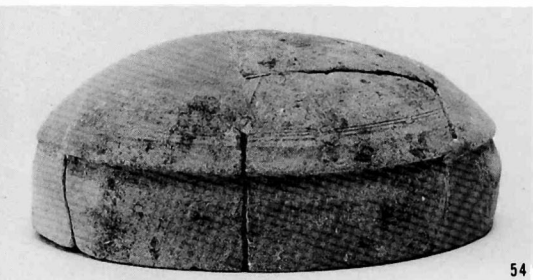
57



60



55



54



62



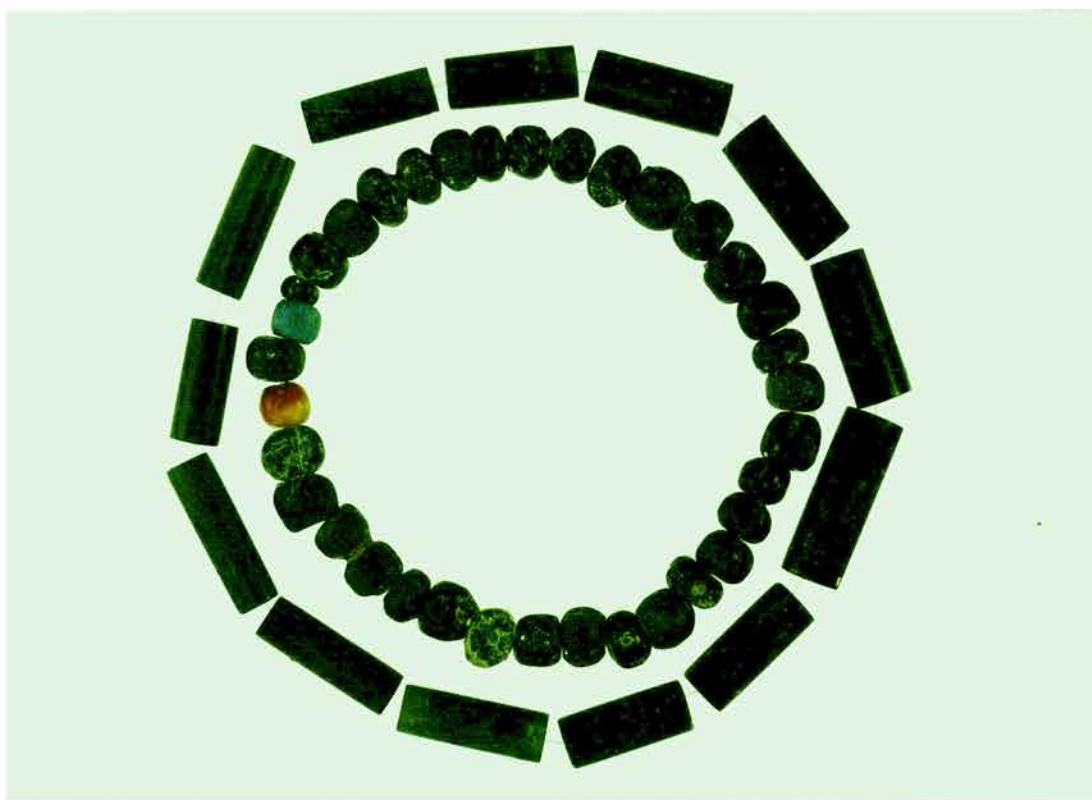
64



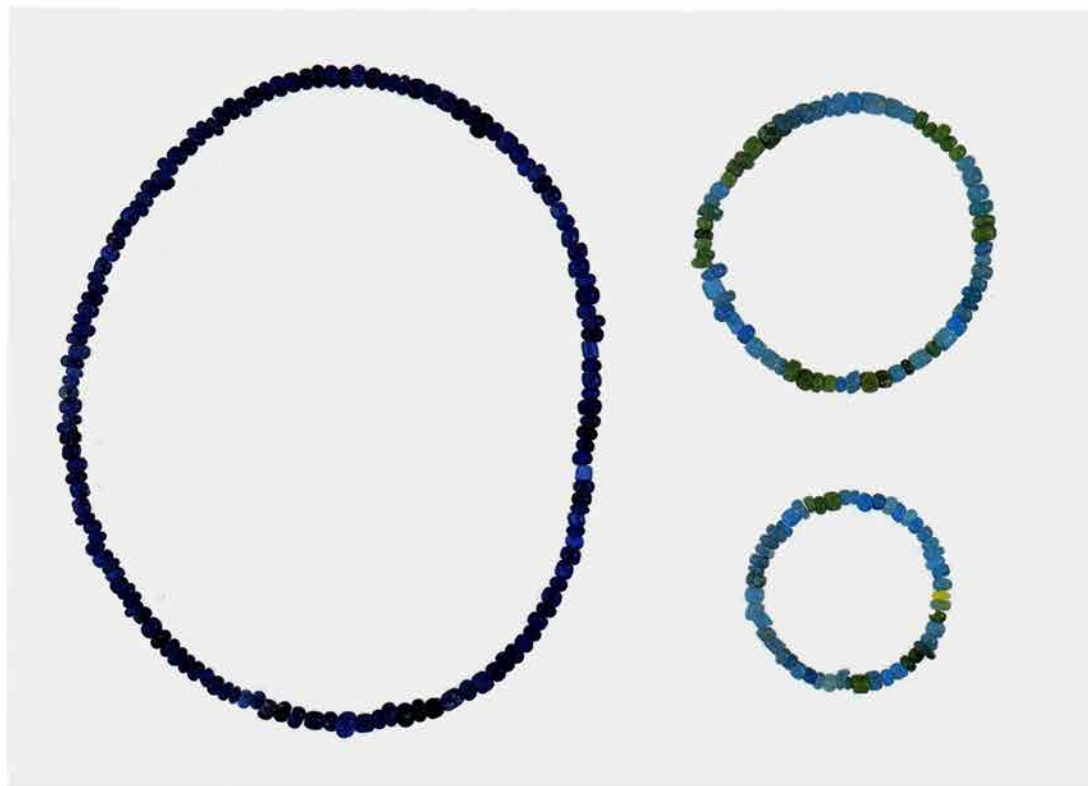
63



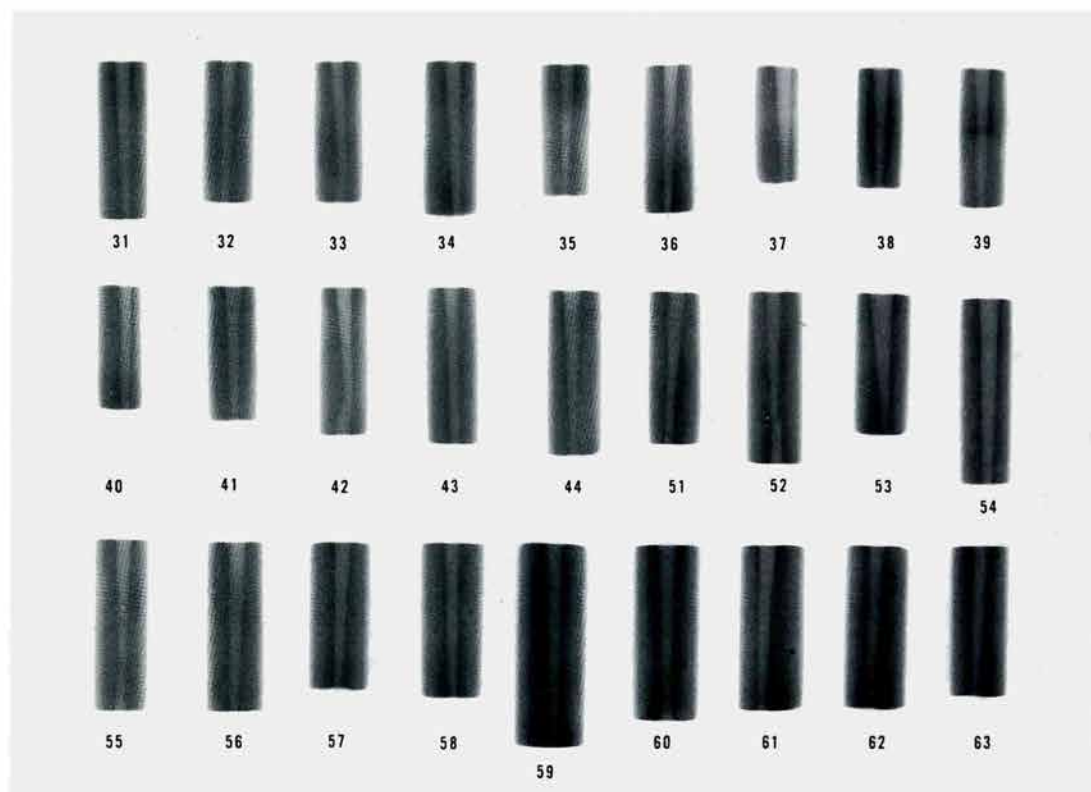
1. 第1号墳第1号埋葬施設玉類



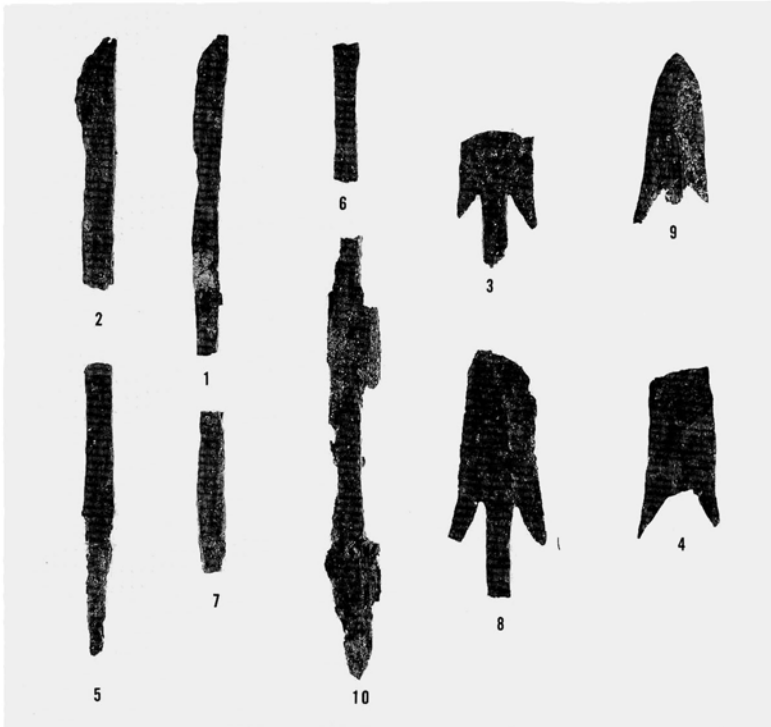
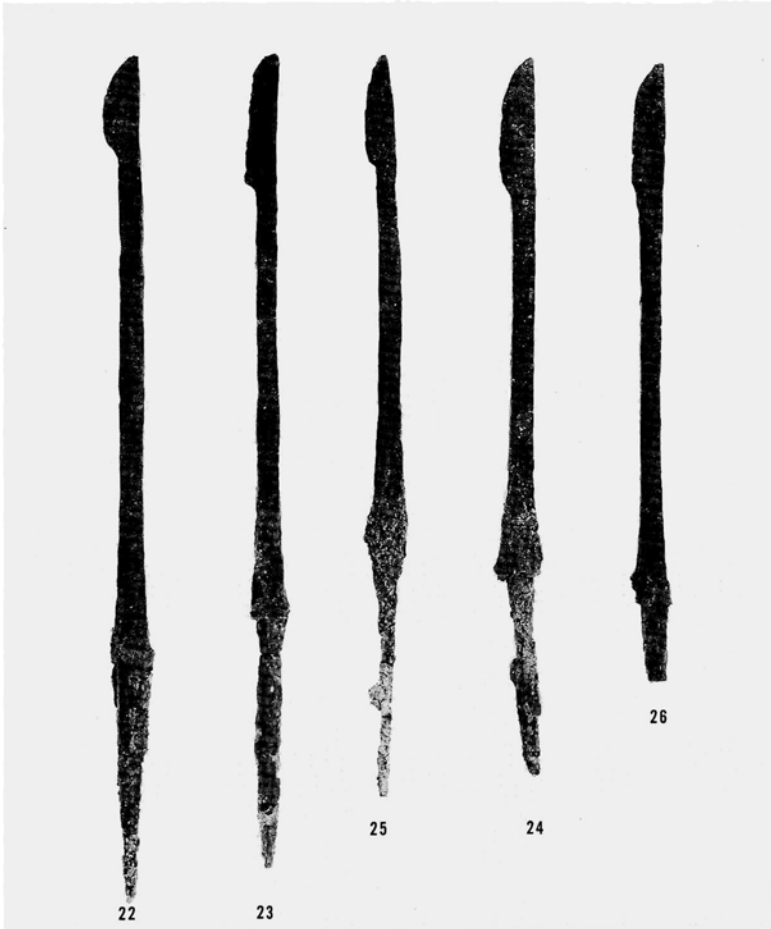
2. 第1号墳第4号埋葬施設玉類



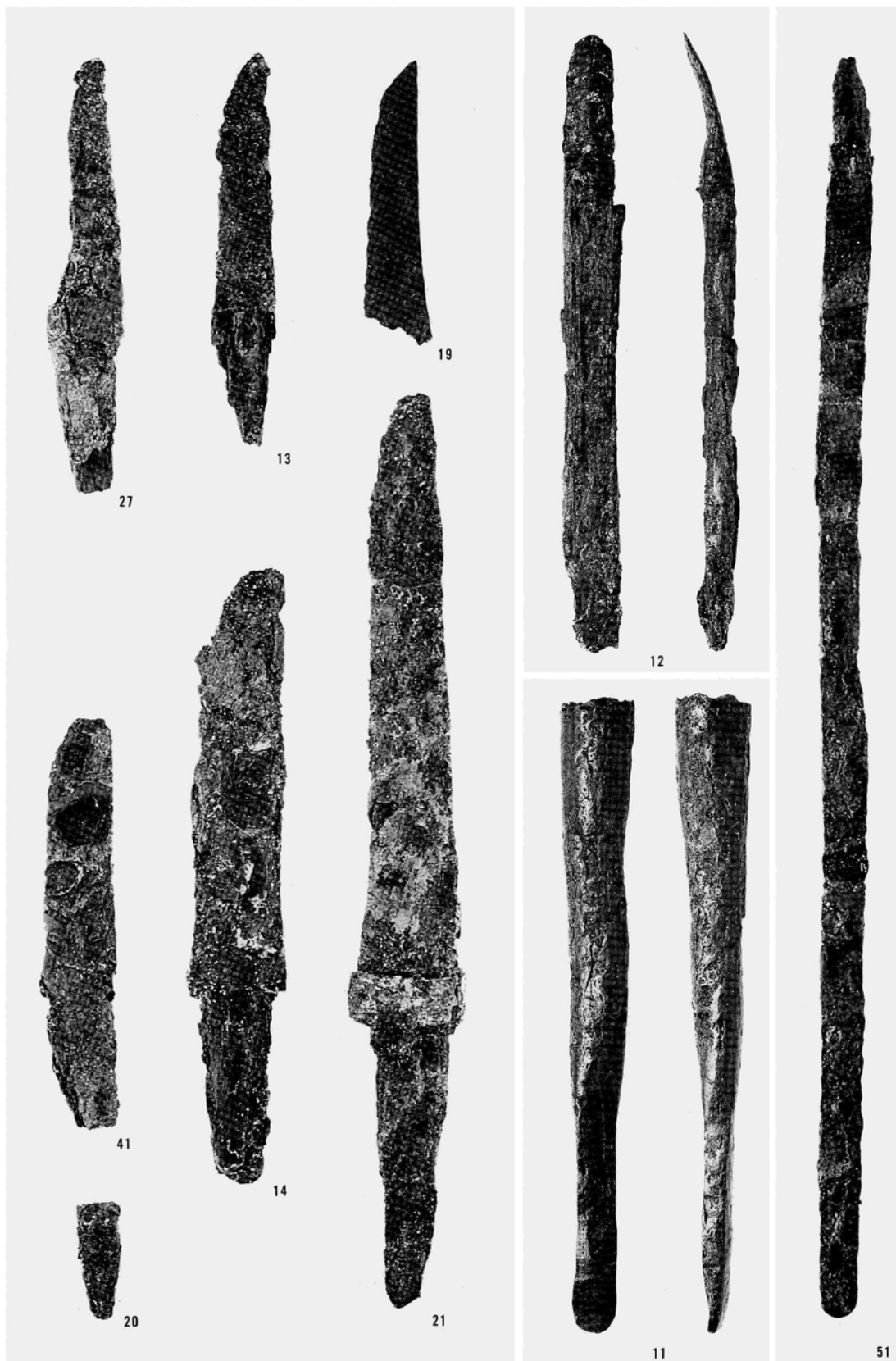
1. 第1号墳第3・4号埋葬施設玉類



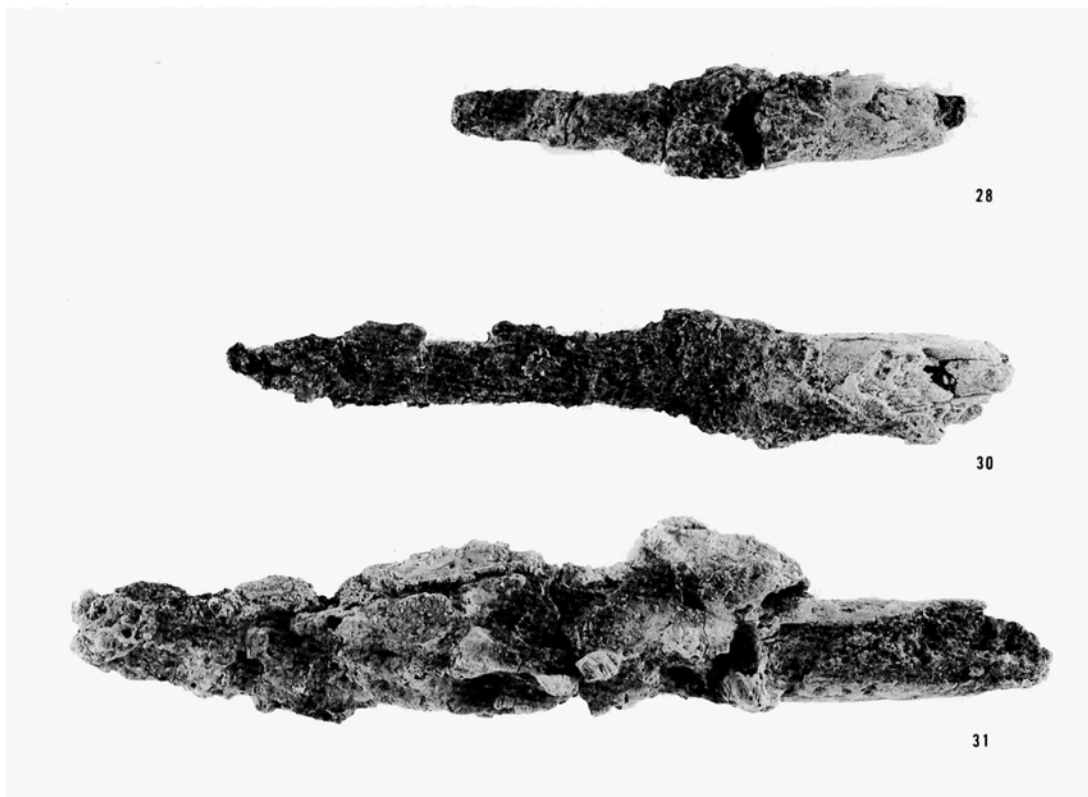
2. 第1号墳第1・4号埋葬施設管玉(X線)



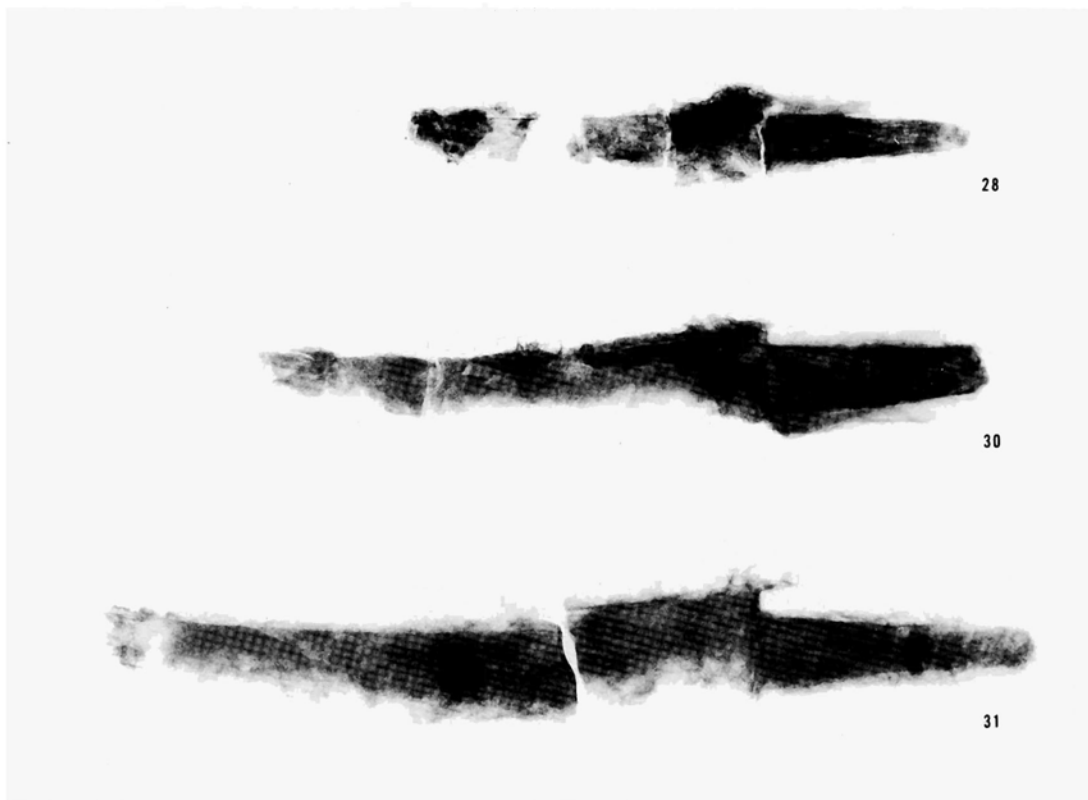
第1号墳第1・3号埋葬施設鉄製品



第1号墳第1～3号埋葬施設鉄製品
印路C-2・3号墳 鉄製品



1. 第1号墳 鹿角装刀子



2. 第1号墳 鹿角装刀子(X線)

兵庫県文化財調査報告書 第106冊

下大谷古墳群

印路台状墓

印路古墳群 C

平成4年2月8日 印刷

平成4年2月18日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL (078)531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手5丁目10番1号

TEL (078)341-7711

印刷 菱三印刷株式会社

〒652 神戸市兵庫区大開通2丁目2番11号